理由ある反抗

伊藤 直人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
理由ある反抗

【Ｎコード】
Ｎ２７３５Ｗ

【作者名】
伊藤　直人

【あらすじ】
高校野球の名門、東尾商業へのスポーツ推薦での進学を希望する、中学三年生の井岡誠と、学業最優先の進路を強要する、父・義秀の、親子間の葛藤を書いたお話です。主人公と同じ中高生や、その年代のお子さんがいらっしゃる方に、特に読んでいただきたいと思っています。

1（前書き）

えらーにより、更新できなくなってしまったので、新しく投稿し直します。

1

市立東尾中学のグラウンドで行われている、野球部の紅白戦は終盤に差し掛かっていた。３－２と紅組の一転リードで迎えた最終回。後攻白組の攻撃は二死ながらランナー二・三塁。一打サヨナラの好機に、打球が三遊間を襲った。レフト前へ抜けようかというその打球はしかし、間一髪の所でショートを守る井岡誠のグローブに拾い上げられた。誠は、元は黄色だったが、使い込んで黒ずんだ愛用のグローブから、素早くボールを右手に持ち替え、ノーステップで一塁へ送球した。ショートバウンドになった送球が、ファーストを守る小川佑介のミットに掬い上げられるのと、ほぼ同時にバッターランナーが一塁塁上を駆け抜ける。全部員の視線が、主審を務める野球部顧問青木健二に注がれた。

「アウト！」

アウトともセーフとも取れる際どいタイミングだったが、青木は力強く右拳を突き上げ、アウトの判定を下し、試合は紅組の勝利で終わった。

「３－２で紅組の勝利。礼！」

「ありがとうございました！」

ホームベース前で整列した部員達は、互いに帽子を取って頭を下げた。

「じゃあ、道具の片付けとグラウンド整備をして、解散」

誠が、バックネットの裏側にある倉庫へ、グラウンド整備用のトンボを取りに向かうと、菊池翔太が声を掛けてきた。

「最後の守備凄かったっスね、絶対抜けると思ったのに。やっぱこないだスカウトされちゃったから気合入ってんスか？」

翔太は誠より一年後輩で、この日は白組のセンターを守っていたが、普段は誠と二遊間コンビを組むセカンドのレギュラーだ。体格

は小柄だが、二年生部員の中では抜群のセンスを持っている。そしてスカウトというのは、県立東尾商業高校野球部の監督、西崎俊雄の事である。

東尾商業、通称“東商（とうしょう）”の野球部は、春五回、夏四回の甲子園出場の実績を誇る名門校だ。西崎は二十五年前の夏に、東商の四番打者として甲子園に出場し、二本塁打を放つ活躍で、チームをベスト8に導いた男だった。そしてその時の二年後輩が青木である。その縁もあって、東尾中野球部で実力を認められた者は、東商野球部にスカウトされるのが通例となっており、東尾中野球部員にとって、西崎に認められることは大きなステイタスでもあった。誠達の二年先輩で、当時のキャプテンだった小松辰弥も、西崎の誘いを受けて東商入りし、東商においても時期キャプテンの座がほぼ内定している。その西崎が、先日東尾中の練習を見学に訪れた際に、三人の部員をスカウトした。エース投手で三番を打つ宮田英治、四番ファーストでキャプテンの佑介、そして一番ショート井岡誠。

東尾中野球部員にとってこの上ない名誉な事だが、誠にはその話題には触れられたくない事情があった為、わざとそっけなく答えた。

「あの状況でそんな事考えらんないよ。必死で捕りに行っただけ。それに、今日は西崎監督来てないじゃん」

「でもいいプレーしたら、青木先生から報告して貰えるかも知んないじゃないスか」

なおも食い下がる翔太の質問をさえぎるように、後ろから声を掛けたのは佑介だ。

「俺達はお前みたいに雑念だらけでプレーしたりしねえんだよ」

佑介は誠とは幼馴染であり、少年野球チーム時代からのチームメイトでもある。

「お前こないだもバレバレの隠し球狙って、先生に怒られたばっかだろ。もうちょっと真面目にやれよな。他所との試合になったら、出たくても出れない奴らだっているんだから、レギュラーに選ばれてる以上、例え野球部同士の紅白戦でも、チャラチャラした態度見

せんなよ」
　キャプテンのお叱りを受けた翔太は、ぺろりと舌を出したおどけた表情で「はーい，すんません」と言いながら、ズルズルとトンボを引きずってグラウンド整備に向かっていった。誠と佑介もトンボを担いでグランドへ向かう。
　二人でマウンド周辺の土にトンボを掛けていると、視線は自分がならしている土に向けたまま、佑介が訊ねてきた。
「やっぱりおじさん、許してくれそうにないの？」
　その質問に誠は「・・・うん」と力なく答えた。
「そっか…。まあ東商は偏差値あんま高くないし、ヤンキーとかも結構いるからな。親としては嫌かも知んないよな。せっかく成績良いのにもったいないもんな」
　佑介が言うように、東商は、高校野球の強豪としては、県内でも名高いが、学校そのものの評判は決してよくなかった。事実、誠たちの先輩達にも、西崎のスカウトを受けながら、「東商はガラが悪いから」という理由で、他校へ進学する者も少なくなかったという。
　誠の場合、本人はそれでも東商へ行きたいと思っているのだが、父の義秀がそれに断固として反対しているのだった。だが誠は、自分の進路選択において、自分の意思より親の意思が優先されているという状況を、まだ認めたくなかった。
「でも、まだ完全に諦めたわけじゃないよ。やっぱり自分の進路なんだから自分の意志で決めないと。東商で野球やるにしても、一般受験するにしてもさ」
　佑介よりも、自分自身に言い聞かせるような口調になっているのがわかった。佑介は、そんな誠の気持ちを、知ってか知らずか「そうだよな、せっかく小学校からずっと一緒にやって来たんだからさ、高校でも一緒にやろうぜ。な、誠。東商なら甲子園にだって行けるも知れないぜ」　と言って、誠の背中を、大きな手の平でぽんぽんと叩いた。
　誠も、「ああ」と努めて明るい声を出したが、作り笑いが引きつ

っているのが自分でもわかってしまうほど、不自然になってしまった。

佑介は一瞬戸惑ったような表情を見せたが、誠の気持ちを察したのか、それ以上はこの話題に触れる事はせず、既に丁寧にならしてある土に、軽くトンボを掛けなおして、トンボを肩に担ぐと「よし、こんなもんでいいだろ。トンボ、倉庫にしまって帰ろうぜ」と言って、倉庫の方へ歩き出した。その佑介の声色も、不自然に明るかった。

幼馴染の気遣いが、嬉しくもあり、辛くもあった。

2

後片付けを済ませた後、誠はいつものように、佑介と共に下校した。いつもなら野球談義をしながら帰るのがお決まりだったが、その日は先刻の会話が尾を引いていてしまい、どうしてもよそよそしい雰囲気になってしまっていた。お互いにその気まずさを紛らわすように、言葉を搾り出すのだが、会話が続かない。間が持たない。やがてお互いに黙り込んでしまい、佑介の家の手前の曲がり角で、別れの言葉を交わすまでは、共に下校しているというより、ただ一緒に歩いてるだけという状態だった。

「じゃあ、俺こっちだから。また明日な、誠」

「ああ、じゃあな」

いつもは、ここで佑介との会話が途切れるのが、少し名残惜しかったが、今日は、気まずい空気から開放されて、少しホッとした気分だった。

佑介と別れてから井岡家までは、徒歩で約五分程の距離だったが、自分が父を説得できるだろうかという思いが、誠の足取りを重くさせていたせいか、いつもの何倍も長く感じた。

憂鬱な気持ちのまま帰宅した誠を、母の美奈子が出迎えた。

「おかえり、誠。あら、ユニフォーム泥だらけじゃない。塾まで、まだ少し時間あるし、すぐにお風呂入っちゃったら？」

「うん」

そう言って、誠は風呂場に向かった。

汚れたユニフォームをかごに放り込み、熱いシャワーを浴びる。疲れた身体に、湯の熱さが染み渡る。できれば湯舟にも浸かりたいが、七時には塾に行かなければならないため、あまりゆっくりはしていられない。

「はあぁ…」

思わず、ため息が漏れた。部活の後で疲れていたこともあるが、

それだけではない。東尾商業への進学を、父に断られてから、誠は毎日、どうすれば父を説得できるだろうかと、そればかり考えていた。しかし、あの融通の利かない父が、自分の主張を曲げる事など、あるだろうか。

誠が野球を始めたのは、小学三年生の時だった。きっかけは、当時仲の良かったクラスメイトに誘われたのだ。

誠が野球チームに入りたいと言い出したときも、義秀は、あまり良い顔をしなかったが、週に一回、二時間だけという練習時間なら、さほど勉強に支障はないだろうと言う事で、了承してくれた。

もともと運動神経は良い方で、足も速かった事に加え、真面目で練習熱心だった誠は、めきめきと上達し、五年生で、ショートのレギュラーポジションを獲得した。

誠にとって、毎週土曜午後三時から五時まで、二時間の練習は、何よりの楽しみだった。平日の午後は、二箇所の塾を掛け持ちし、放課後自由に遊べるのは、水曜日だけだった誠は、その時間も大概野球をして遊んだ。相手が見つからなければ、一人で校舎の壁に向かって、日が暮れるまでボールを投げつけていた。

中学に上がっても、誠は一年生からサードのレギュラーに抜擢された。

そして、この時ショートを守っていたのが、辰弥だった。

軽快なグラブ捌きと強肩で、ヒットを許さない守備も、体の軸が全くブレないシャープなバッティングフォームで、広角に打ち分ける打撃も、辰弥のプレイは一つ一つが洗練されており、美しかった。

辰弥のようなプレイが出来るようになりたいと、強く思った。辰弥は、誠の憧れだった。もう一度、辰弥と一緒に野球をしたいと言う事も、誠が東商で野球をしたい理由のひとつでもあった。

譲れない。これだけは、どんなに反対されても譲れない。そのためには、なんとしても、父を説得しなければならないのだ。

義秀は、一人息子である誠に、幼い頃から厳しかった。特に職業柄か、勉強に関しては、満点でない限りは褒められる事は無く、義

秀の個人レッスンの下で、不正解だった問題の復習をやらされた。
義秀の、厳しい指導の甲斐あってか、誠の成績は小学校時代から、学年でも上位から数えたほうが早かった。クラスメイトや、教師たちからも、「井岡君は、頭がいい」と言われた事は、決して少なくなかった。そして、それが父の厳しさのおかげだと言う自覚は、誠にもあった。だが、どんなに良い成績を収めても、勉強が楽しいと思ったことは、一度もなかった。
自分は何の為に、こんな事をしているんだろう。
父に言われるままに、勉強に打ち込む自分に、疑問を感じるようになったのは、少年野球のチームメイトの言葉だった。
野球の練習中に、グローブが破けてしまったのだ。紐も何箇所か痛んでいて、今にもちぎれそうだった。誠は、家に帰ってから、義秀に新しいグローブをねだった。
それを聞いた義秀は素っ気無く「じゃあ、明日の帰りにでも、ホームセンターに寄って、買ってきてやる」と言った。
だが、誠が欲しかったのは、ホームセンターで売っているような安物ではなく。プロ野球選手が使っているような、野球用品専門メーカーのグローブだった。この時、破れてしまったグローブも、ホームセンターで買って貰ったもので、チームメイト達が使っているメーカー品のグローブが、ずっと羨ましかったのだ。
「ホームセンターじゃなくて、スポーツ洋品店で売ってるやつが欲しいんだ。ダメかな？」
「いくら位するんだ？」
「一万円くらい…」
「そんなにするのか、しかし、うーん、さすがに、このグローブをこれ以上使うのは無理だしな。よし、買ってやる」
義秀は、使い古してぼろぼろになったグローブを、手にとって眺めながら、そう言った。
「本当！？ありがとう！」
「但し」

はしゃぐ誠を制するような口調で、義秀は付け加えた。
「今度の塾のテストで、いい点が取れれば、の話だ。それが出来なかったら、ホームセンターの物で、我慢しなさい」
「うん、わかった」
一瞬気落ちしたが、誠は俄然やる気になった。入念に予習をし、義秀が納得するだけの点数を取ったのだ。
「よく頑張ったな、誠。それじゃあ約束通り、グローブを買いに行こう」
返却されたテストの答案を見ながら、義秀は満足そうな笑みを浮かべ、誠の頭をなでた。
そして誠は、憧れのメーカー品のグローブを買って貰った。それまで使っていた、合成皮革の物にはない、本皮の香りに胸を躍らせた事を、今でも鮮明に覚えている。
そのグローブを始めて少年野球の練習で使った日、チームメイトの川西弘之が、誠がグローブを新調した事に気づいた。
「お前、グローブ買い換えたんだ」
「うん。塾のテストでいい点採ったら買って貰うって、お父さんと約束してたんだ」
誠がそういうと、弘之は、嘲るように言った。
「なんだよそれ、お前、親の言いなりじゃん」
「えっ？」
確かに誠は、義秀に逆らう事は殆どなかった。というより出来なかった。たまに反論しても、すぐに言いくるめられてしまう。そういうことを、繰り返すうちに、確かに誠は、言いなりと言っていいほど、義秀に従順になっていった。
だがそれまで、自分と父のそういった関係に疑問を持つことは無かった。どこの家でも、子供は親の言う事を聞くのが、当たり前だと思っていた。
「そうやって、えさで釣られて、なんとも思わないのかよ、だっせえ」

誠は、何も言い返せなかった。確かにそうかもしれない。義秀は、誠が欲しがっていたからではなく、成績を上げることに利用できるかもしれないと思って、あのような条件をつけたのかもしれない。自分は、義秀の手の上で、踊らされていただけなのだろうか。

買って貰ったばかりのグローブを、愛しく思う気持ちは変わらなかった。その証拠に、こまめにローションで磨き、オイルを塗り、手入れを怠らずに大切に扱い、今でも愛用している。

だが。

お前、親の言いなりじゃん。

その日、誠の胸の奥を抉ったその言葉は、今も深く突き刺さったままだった。

まだ六月だと言うのに、この日の最高気温は三十度近かった。日中に比べれば、幾分涼しくはなっているものの、熱い湯をたっぷりと浴びて、火照った身体のまま風呂場から出れば、すぐに汗が噴き出してくるだろう。

誠は、湯のバルブを少し閉め、その締めた分だけ、水のバルブを開いた。熱かった湯が、適度に冷たい温度になり、火照った身体を心地よく冷ます。

体の火照りが冷めてからも、誠そのまま、シャワーに打たれ続け、どうしたら父を説得できるだろうかと考えていた。

考え込めば、考え込む程、心が折れそうになる。

だけど、諦めるわけにはいかない。自分の進むべき道は、自分の意思で決めなければならない。東尾商業で、野球をやりたいと言う気持ちも強かったが、それ以上に、自分の進路を父に委ねてしまう様な、弱いままの自分でいたくないという気持ちのほうが強かった。

「誠、随分長く入ってるみたいだけど、塾の時間大丈夫？」
母の声にはっとして、シャワーを止め、扉越しに尋ねる。
「今何時？」
「六時二十分。塾、七時からだっけ？」
「うん。もう出なきゃ」
風呂場から出た誠は、冷蔵庫から瓶入りの牛乳を取り出して、一気に飲み干した。微かな痛みを覚えるほど冷たさが、喉から胃にかけて、染み渡る。　火照った身体は、外側と内側から冷まされ、すっかり汗もおさまった。
部屋に戻って、塾へ行く支度をしていると、ふと、先刻無造作に床に放り出した、部活用のスポーツバッグが目に入った。バックのファスナーを開き、グローブを取り出した。野球部の顧問の青木から、入部して間もない頃、型の良さを褒められた時の事を思い出す。
「よく手入れがしてあるな。自分でやってるのか？」
「はい」
「そうか。偉いぞ井岡。道具を大切にする奴は、きっと上手くなる。特に内野手は、丁寧なグラブ捌きが大切だからな。これからも、大切に使えよ」
「はい」
嬉しかった。自分の野球への熱意を、褒められた気がした。でも……。
「お前、親の言いなりじゃん」
自分の野球に対する熱意と、父に対する従順さ。大きく揺れる今の自分の、その振り幅の対極にある二つの気持ちを、ともに象徴するグローブ。
高校で野球をすることになっても、高校野球は硬式野球だから、軟式用のこのグローブを使うことは無い。つまり野球を続けるにしても、辞めるにしても、このグローブでプレイするのは、中学卒業までの間だけだ。役目を終えた後の、このグローブは、誠にとって、何を思い出させる物になっているだろう。

誠は携帯電話のディスプレイを開いた。待ち受け画面に映るのは、野球部の仲間たちと撮った写真。その画面箸のデジタル時計は、午後六時二十八分を示している。

誠は塾用のショルダーバッグを肩にかけ、部屋を出た。

「いってらっしゃい。気をつけてね」

「うん」

玄関を出て、自転車に跨る。ペダルを漕ぐ度に、洗い髪をなでる風が、心地よかった。

3

誠が通っている塾は、駅前の大通りに面した、六階建てのビルの、五階にある。エレベーターで五階へ上り、教室の扉を開くと、すでに何人かが席についている。二人掛けの机が、八つ、二列に並んで配置された座席の、壁に掛けられたホワイトボードから、向かって右側の列の、前から二番目の机の窓際が、誠の席だ。誠が自分の席に座ると、少し遅れて阿部亮平が教室に入ってきた。亮平は、誠とは違う中学で野球部に在籍しており、何度か練習試合でも対戦した事がある。

「よお、井岡。翔太から聞いたんだけどさ、お前東商からスカウトされたってマジ？」

亮平は、翔太と同じ少年野球チームの出身だ。上背はないが、がっしりとした体型で、強肩強打の三塁手として、青木からも一目置かれていた。

「ん、まぁ、一応……」

「マジかよ！凄えじゃん！今あそこ、お前の先輩の小松さんと、一年の大谷って人が凄えらしいじゃん。来年は久々に甲子園行けそうって言われてるし、お前ももしかしたら……」

「そんな簡単にいくわけないだろ。大体まだ東商に行くって、決めたわけじゃないんだから、そんなに騒ぐなよ」

一人で勝手に盛り上がる亮平を、制するように、誠は言った。

「えっ、何で？せっかく誘われてんのに、勿体ねぇじゃん」

先刻の、翔太とのやり取りを思い出し、誠は思わずため息をつく。

「そんなに簡単に決めれる事じゃないだろ。自分の将来にも関わる事なんだから、野球やりたいからってだけで、あっさり決められるかよ」

「じゃあ、東商に行かないとしたら、どこらへんの高校狙ってんの？」

「一応、第一志望は鶴川学園」
「鶴川学園？あそこ野球部ないじゃん」
だからこそ、選んだのだ。東商を諦めたら、もう野球はできない。だからこそ、なんとしても父を説得し、東商で野球をやるのだ。そうやって自分を追い込むために、あえて野球部の無い鶴川学園を第一志望にしたのだ。だけど、そんな事で、悩んでいる自分を、亮平に悟られたくなかった。
「うるさいな。俺の事より、阿部はどうなんだよ。志望校決まってんの？」
「俺？俺は今更悪あがきなんてしねえよ。ただ、この年で就職はまだしたくねぇからな。とりあえず、入れりゃどこだっていいよ」
「そんなら、わざわざ、塾なんか来なくたっていいじゃん。お前、何で塾通ってんの？」
亮平は、何故塾に通ってるのか不思議なほど、不真面目だった。授業中にくだらない事を言って、皆を笑わせたりするのが得意で、誰からも好かれる性格だったが、肝心の成績の方は、不動の学年最下位だ。誠は、亮平のような男が、何故塾に来ているのか、不思議だった。
「別に、部活終わってから、家に帰ったって、俺一人っ子だし、やる事ねえじゃん。だったら、誰かと会える場所にいたほうが楽しいじゃん？」
「ったく、そんなんで、将来大丈夫かよ？」
ため息混じりに言いながら、自分が義秀に言われている事と同じような事を、良平に対して言っていることに、気がついた。その気持ちを紛らわすように、亮平の顔から視線を外し、教室の中を見回した。
誠達の他に、八人、計十人の生徒が、席について雑談をしている、いる。今日は欠席者はいないようだ。それとなく聞き耳を立ててみると、自分たちのように、進路について話をしている者もいれば、部活や、新しく発売されたゲームについて話をしている者もいる。

みんなは、自分の進路をどうなふうに決めているんだろう。親や教師、塾の講師ら、大人達が勧めるままの進路を選ぶ者は何人いるのだろう。それを当たり前のように受け入れるものは、何人くらいだろう。それに抗い、別の道へ進もうと、もがいている者は何人くらいだろう。そうして決めた結果について、後悔する者と、しない者は、それぞれ何人ずつくらいだろう。そして結果に後悔した者達は、その後自分とどのように向き合っていくのだろう。そんなことを考えていると、教室の扉が開いて、数学の担当講師、早川尚樹が入ってきた。生徒達はおしゃべりを止め、皆自分の席に着く。早川は、教室の中を見渡して、欠席者がいないのを確認すると、満足そうに頷きながら言った。

「よし、今日も全員出席だな。じゃ、はじめるぞ」

塾の授業が始まっても、誠はやはり集中できなかった。いつもの習慣で、ホワイトボードに書かれているものを、ノートに書き写す作業だけは怠らなかったが、早川が話している内容は、耳に入ってこない。板書を終えて、ふうっ、とため息をついて、窓の外に目をやると、陽はすっかり暮れていた。帰宅ラッシュの時間のせいか、人通りは、この頃がもっとも賑やかだ。スーツを着た会社帰りのビジネスマン、自転車のかごを一杯にした買い物帰りの主婦、塾帰りの小学生。高齢者は、比較的少ない気がする。

五階という高さから、俯瞰気味に町の風景を見下ろしてみると、町を行き交う人々の姿も小さくて、地上ですれ違う時に比べ、生命感を感じない。それでも彼らは確かに生きていて、一人ひとりに人生があり、家族や友人がいて、そして彼らにもまた、それぞれの人生がある。

人類が誕生してから、今までにいくつの人生があるのだろう。これから先、いくつの人生が始まるのだろう。その時間を全て足したら、どれくらいの時間になるのだろう。そして自分の人生は、その全体の何分の一くらいになるのだろう。

地球全体と、砂浜の砂一粒くらいの比率だろうか？いや、もっと

小さいかもしれない。それでも、自分にとっては、この人生だけが全てなのだ。この人生を、どれだけ実りあるものに出来るか、それが何より大切なのだ。そのためにも、今は強い気持ちで戦わなければならない。決して父のものではない、自分自身の人生のために。

「どうした井岡」

「えっ……」

「上の空で、外の景色なんか見て。いつも熱心に聞いてるお前が、珍しいな。部活かなんかで、疲れてるのか？」

「いや、大丈夫です。すいません」

「そうか、それならいいけど、具合が悪いようなら、すぐに言うんだぞ」

「はい」

一応、そう答えた誠だったが、結局、その日は最後まで、授業に集中できなかった。

憂鬱な気分のまま、帰り支度をしていると、亮平が声を掛けてきた。

「井岡、ちょっとコンビニ寄ってこうぜ」

誠と亮平は、塾があるビルの隣にあるコンビニでアイスを買って、それを店先でかじっていた。

「お前、ほんとに今日ずーっと、ぼけっとしてたけど、どうしたんだよ？」

「いや……、ちょっと考え事しててさ」

「東商に行こうか、どしようかって？」

「……うん……」

学校でも塾でも、この話か。そっとしておいてほしいという気持ちもあるが、時期的に仕方ないとも言える。それに、彼らなりの意見を聞いて見たいという気持ちもあった。

「阿部だったらどうする？」

「んー、わかんねえな。まぁ、俺は東商からスカウトされるほどの野球の実力も、進学校に合格できそうなほどの成績も無いからさ。

俺からすりゃ、贅沢な悩みにも思えるけど、でもなぁ……」
　そこまで言って、亮平は俯いて口をつぐんだ。誠は、何も言わずに、地べたに座り込んでアイスをかじっている亮平の顔を見下ろした。亮平の話の続きは気にはなるが、せかすような事はしたくなかった。亮平は、誠との視線に気づいたのか、顔を上げて、誠の顔を見ると、再び口を開いた。
「俺や翔太がいたのチームの三コ上の先輩でピッチャーやってた人でさ、つっても、翔太が入ってくる前の年に卒業しちゃったから、あいつとは面識ないんだけど」
「うん」
「その人も野球推薦で、長浜実業に行ったんだよ。木田君って人なんだけど。」
「長実か、名門じゃん」
　長浜実業は、甲子園出場回数で言えば、東商よりやや少ないが、春の選抜大会で準優勝した事がある。輩出したプロ野球選手の人数も、東商よりやや多い。
「その人の親父も、長実の元エースでさ、ガキのころから、親父さんにしごかれまくってて、その分上手かったよ。コントロールがめっちゃ良くてさ。フォアボールなんかほとんど出さないの。でも親父さんほんとに厳しかったみたいで、本人は、もう勘弁してって感じだったみたいなんだよね。野球自体は嫌いじゃないけど、あくまで楽しむレベルでやりたかったみたいな。だから長実行くのも、あんまり乗り気じゃなかったんだって」
「ああ、俺とは、逆のパターンか」
「そういや、お前ん家は、親父さんが勉強に厳しいんだっけ？」
「うん、まぁ、教師なんかやってるぐらいだから」
「なるほどね。で、その木田君なんだけどさ、嫌々行かされた長実で、全く通用しなくて、挙句の果てに肘壊して、結局中退しちゃったんだよね」
　他人事とは、思えなかった。

父の身勝手で、自分の進路が決まってしまった時、どれほど悔しかっただろう、どれほど自分を情けないと思っただろう。その想いと、今、木田は、どのように向き合っているのだろう。

「そんでさ、こないだ、久しぶりに木田君に会って、色々しゃべったりしたんだけどさ、いつも優しくて、誰かの悪口なんか絶対言わないような人だったのに、親父さんのこと愚痴ってばっかで、なんか、かわいそうになっちゃってさ、だから、その……、井岡にも同じような事で後悔して欲しくないんだよ。木田君が言ってたんだけどさ、親父さんの強引なやり方も許せないけど、それに従うことしか出来なかった、自分の意志の弱さが一番許せないって。だからさ、お前も、後悔したくなかったら、ほんとに東商で野球したかったら、絶対諦めんなよ。お前の意志の強さ次第だぜ」

そういって、亮平は、誠の目を真っ直ぐに見た。誠も、その視線を正面から受け止めた。だけど、二人の視線が重なっていたのは、ほんの二、三秒だった。亮平のほうが、照れくさくなって視線を外してしまったのだ。

「悪い、なんか熱く語っちゃってさ。大きなお世話だよな、お前だって、自分なりに悩んでんだろうし」

普段はお調子者で、ふざけてばかりいる亮平の、不器用な優しさが、嬉しかった。

「そんな事無いよ。聞いてよかった。ありがとな、阿部」

「そっか。そんならいいんだけどさ」

4

コンビニで亮平と別れ、一人家に向かう帰り道、誠は自転車を漕ぎながら、亮平が話した木田という男の話を、思い出していた。

野球推薦で進学したいという自分に、一般受験で進学しろと言う自分の父。一般受験をしたいと言う木田に、野球推薦で進学しろと言った木田の父。誠とは全く逆の形だったが、木田の気持ちが痛いほど良くわかる。

自分も木田のように、東商野球部のレベルの高さについていけないかもしれない、という不安は、以前からあった。

だけど、自分の意思で進んだ道なら、たとえが上手くいかなかったとしても、納得できる。少なくとも、結果を全て自分で受け止めることは出来る。

だけど、仮にもし、自分が東商行きを諦め、鶴川学園へ進学して落ちこぼれ、劣等感から中退するような事があったら、そして、そうさせた父を恨むようになったら、どれほど惨めだろう。

今まで、自分の将来について考えた事はなかった。自分の将来進む道を、自分の意思で決める。当たり前の事だけれど、決して簡単ではないという事を、義務教育を終えるこの年になって、初めて知った。だけど、それが出来ないようでは、いつまでたっても親から自立できない。

まだ、胸を張って自分が大人だと言い切れるような年ではない。しかし、自分力で何も出来ないほど、子供でもないはずだ。

絶対に、木田と同じ道は辿りたくない。

絶対に、父を説得しなければならない。

家に帰ったら、今日こそもう一度、父に自分の思いをぶつけてみよう。自分は決して、野球が好きだからというだけの理由で、目先のことだけを考えて、父が示す道を拒んでいるのではない。

自分なりに、真剣に自分の将来を考えて、悩んで、その上で、自

分の進む道を、自分の意志で決めたいと考えているのだ。それが出来なければ、きっと後悔する。そして、それを父のせいにする。そんな惨めな思いは、絶対にしたくない。それだけなのだ。それだけだけど、絶対に譲れないことなのだ。

家に着いて玄関の扉を開くと、いつものように、美奈子が出迎えに来ていた。

「お帰り、疲れたでしょう？」

「うん……、父さんは？」

誠は、靴を脱ぎながら、母に尋ねた。

「今日は遅くなるみたい。他の先生達と飲みに行くって、電話あったから」

「あ……、そうなんだ」

「また、汗かいたんじゃない？お風呂入る？」

「いや、今日はもういいよ」

「そう、確かに夕方から、一気に涼しくなったものね。そんなに汗もかかなかったか。じゃあ、すぐ、ご飯にする？」

「うん」

テーブルに夕食が運ばれてくるのを待つ間に、誠は冷蔵庫から麦茶の入ったペットボトルを取り出し、氷を入れたグラスに注いだ。氷がぴきぴきと音を立てひび割れていく。

一気に飲み干して、ふうっ、と息をつく。

肩透かしを食らった気分だった。父と、進路について、もう一度話をしたいとは、ずっと思っていた。思ってはいたけれど、なかなか決心がつかずにいたのだ。

今日は、その決心がついていた。学校で佑介や翔太と、塾で亮平と、自分たちの進路について話をして、改めて、自分は東商で野球をしたいと思った。その想いを、自分以外の誰かの意思で、断ち切られたくないと、強く思った。だからこそ、決心できた。それなのに、そんな日に限って、父は酒を飲んで帰ってくるという。

義秀の帰りを待っても、酔っている父に、今の自分の気持ちをぶ

つける気にはなれない。義秀は、家ではあまり酒を飲まないが、外で飲んで来る時は、かなり酔って帰ってくる。そんな状態の父に、今の自分の真剣な気持ちをぶつける気にはなれなかった。
タイミング悪いなぁ、と思いつつも、自分の父親に、自分の気持ちを伝える、たったそれだけの事に、これだけ大きな決心が必要な自分の脆弱さが、情けなくもあった。
明日だ、明日こそは絶対に、父に自分の気持ちをぶつけよう。そして、絶対に説得してみせる。しなければならない。いつまでも迷っていられるほど、時間は残されてはいないのだ。
義秀は、結局十一時頃に帰宅した。
誠は、その時間には、部屋の灯りを消して、ベッドで横になっていたが、なかなか寝付なかった。せっかく父を説得するために、高めた集中力が、行き場を失い、収まりがつかなかったのだ。普段なら、今頃徐々に眠気が襲ってきて、目を閉じているのに、この日は、目が冴えていて、神経も研ぎ澄まされていた。その分、扉越しに聞こえて来た両親の会話は、はっきりと聞こえた。
「お帰りなさい」
「ああ、ただいま。誠は？」
「もう寝たんじゃない。十時ごろには、部屋に戻ってそれっきり」
「そうか」
「誠が、どうかしたの？」
今夜のように、なかなか寝付けなくて、両親の二人だけの会話が耳に入ってくる事はあるが、この時間なら、いつも誠がベッドにいる事は、義秀も知っているはずだ。それでもあえて美奈子に尋ねたからには、義秀にも、何か自分について、考えるところがあったのかもしれない。誠は、窓から差し込む月明かりしかない、暗がりの部屋の中で、聞き耳を立てた。
「いや、別に、どうって事はないんけど……」
義秀が言葉を詰まらせた。いつも断定的な物言いをする義秀にしては、珍しく歯切れが悪い。どうとも思っていないはずなどない。

自分なりに、感じる事があったに違いない。
知りたい。父が何を思っているのか。なぜ、この日に限って、自分の様子を気に掛けているのか、直接尋ねてみたい。
ベッドから飛び起きて、自分の思いを父にぶつけてみようか。そう思ったけれど、一度冷めてしまった想いは、簡単には、熱を取り戻せない。
自分の感情をコントロールする事って、こんなにも難しい事なんだろうか。いや、結局それは、自分の決断力が足りないだけで、意志の強い者なら、今すぐにでも部屋を飛び出して、父に自分の思いをぶつけるのではないだろうか。
やはり、自分の人生が思い通りに行かない一番の理由は、自分自身の弱さなのではないだろうか、それを父のせいにして、自分の弱さから、目を背けているだけなのではないだろうか。
そんな事を考えているうちに、両親の会話は途切れていた。微かに、水の跳ねる音が聞こえる。義秀は、もう風呂に入っているのだろう。美奈子も、義秀が上がれば、それに続いて風呂に入り、夫婦は寝室へ向かう。そうして、井岡家は一日を終える。
（今日もダメだった。でも、明日こそは、きっと）
誠は、一度萎えてしまった気持ちを、再び奮い立たせるように、自分にそう言い聞かせ、目を閉じた。

5

翌朝、学校へ向かう途中、佑介と合流し、しばらく歩くと、コンビニから宮田英治が出てくるのが見えた。英治は、誠や佑介と共に、西崎のスカウトを受けた野球部員の一人だ。エースピッチャーであると同時に、三番バッターでもあり、副キャプテンでもある。

「エーちゃん」

佑介がそう声を掛けると、英治が振り向いた。切れ長な目に、鼻筋の通った端正な顔に、縁の無い眼鏡をかけている。

「あ、おはよう」

英治は、中学生にしては長身だが、色が白く体つきも細身で、制服を着ていると体育会系の者には見えない。しかし、ボールを低めに集める制球力は抜群で、切れ味鋭いスライダーは、誠や佑介でも簡単には捉えられない。

「昨日、どうしたの？」

並んで歩きながら、佑介が尋ねる。英治は、昨日の部活を休んでいた。

「うん、少し風邪気味だったからさ。今の時期に無理は出来ないからね」

「それって、受験に影響するからってこと？」

誠が尋ねる。

「勿論」

「じゃあ、エーちゃん、一般受験するの？」

「当然」

「じゃあ、東商行かないの？」

今度は、佑介が尋ねた。

「うん、もう正式に断ったよ」

英治は淡々と、そう言い放った。最初から、東商に行く気など、さらさら無かったかのような言い方だった。

投手に絶対的な柱がいないことに悩んでいた西崎が、最も熱心にスカウトしたのは、英治だった。それだけに、佑介は驚きを隠せない様子だったが、誠は、それほど驚かなかった。英治は、大人しそうな外見とは裏腹に、意志が強く、考え方も大人びている。堅実な将来を考えれば、一般受験という選択は、当然に思えた。

「野球は、もうやんないの？」

佑介が聞くと、英治は淡々と答えた。

「いや、野球部には入ろうと思ってる。でも坊主にされるのは嫌だから、坊主にしなくてもいい学校探してるって感じ。私立は、高速厳しいとこ多いから、多分公立だね」

「ああ、たしかに俺も坊主は嫌だな。それにエーちゃんが坊主なんて、絶対に似合わなそう」

佑介の言葉を聞いて、誠はふと英治の髪を見た。少し赤みがかった色の直毛は、野球部員の中では最も長く、首筋を殆ど隠すほどだ。風を受けると、柔らかく揺れるその髪は、女性的にすら見え、英治を体育会系のイメージから、さらに遠ざける。

誠は、この髪が坊主頭になった所を想像してみたが、全くイメージがわかなかった。

「エーちゃん、最初っから東商行く気なかったの？」

「うん、野球は好きだけど、野球するために学校へ行くような選択をするつもりは、最初から無かったよ」

「ふーん、でも、やっぱ将来のこと考えたら、その方がいいのかなぁ」

そういって、誠は頭の後ろで手を組み、天を仰いだ。

「いや、俺も、別にそこまで先のこと考えてるわけじゃないよ。一応、大学には行くつもりだけど、将来やりたい事なんて、まだ何も無いし」

「じゃあ、なんで、公立受けようと思ったの」

誠の質問にも、英治はあくまで淡々と答えた。

「別に、さっき言った事以外に、たいした理由なんて無いよ」

「へえー、なんかちょっと意外」
佑介が、目を丸くする。
「意外？何が？」
「いや、なんかエーちゃんて、大人っぽく見えるから、もう自分の将来のプランみたいなの、出来上がってるんだと思ってた」
誠も、全く同感だった。英治の学業成績は、学年でもトップクラスだ。現時点で大学進学を視野に入れていることは当然として、その先の事まで、しっかりと見据えているのだろうと、勝手に思い込んでいた。
「そりゃまあ、やってみたいなあって思う仕事とかも、無いわけじゃないけどさ、高校三年間と、大学四年間、合わせて七年もあるんだよ。その間に、自分がどう変わっていくかなんて、少なくとも俺には、現時点じゃ想像もつかないよ。だから、今はまだ、そこまで自分の将来を煮詰めたり、絞り込んだりする段階じゃないんじゃないかなってこと。はっきり決まってはいないけど、それなりに考えてはいるよ」
「やっぱり、エーちゃんは大人だなあ」
誠は、ため息混じりに言った。
「どうして？」
「いや、なんていうかさ、こう、周りに流されずに、地に足がついてるっていうか、自分の考えをしっかり持ってるっていうか。俺も将来何がしたいなんて、全然決まってないけど、もうやりたい事とか見つけてる奴だっているじゃん。そういうの見てると焦っちゃうもん」
誠の話に、佑介も同調する。
「俺もそう思う。俺は、東商で野球やるつもりだし、親にも青木先生にも、そう言ってあるけど、その先のことなんて、やっぱどうなるんだろう、とかって不安になるもん。だから、誠みたいに、もっと先のこと、今の内から考えて、早く決めなきゃって焦っちゃう気持ち、俺もあるもん」

「いや、誤解の内容に言っておくけど、俺が自分の将来について、何も悩んでないってわけじゃないよ。でもさ、結局、中学生の俺達に、現時点で考えられる将来なんて、たかが知れてるじゃん。いま、将来の目標が決まってるって言ってる奴らだって、これから先に、他にもっとやりたいことが見つかるかもしれないだろ。だから、俺達ぐらいの年の奴らにとっては、将来のことを決めることより、悩んだり考えたりすることのほうが大事なんじゃないかなって、俺は思うんだよね。まあ、決まってるのに越した事はないかもしれないけど」

「やっぱ、エーちゃん大人だなあ」

佑介が、改めて感心する。誠も、態度には示さなかったが、佑介と同感だった。

英治の言うとおりだ。結局、十五年かそこらの人生経験しかない自分達に、出来る事なんて、たかが知れてる。でも、だからといって、大人達の言う事に黙ってしたがっていく事で、自分が大人になっていけるとは思えない。

たかが知れているかもしれないけれど、出来る限り自分の力で、自分の意思で、自分の進むべき道を見極めて行きたい。そう思って、大人達の示す道を拒む子供達を、大人達は、反抗的だの、素直じゃないだのと言って、眉をひそめる。

自分の意思で行動すれば、何もかも上手くいくなどと思うほど、世の中が甘いものではない事ぐらいは、わかっているつもりだ。それでも、失敗を恐れて、立ち止まったり、誰かに頼っていたりしていたら、いつまでも子供のままじゃないか。

素直である事と、従順である事は違う。だけど、大人達の多くは、それを履き違えてはいないだろうか。

「って言うか、井岡は、東商行くんじゃないの？」

英治からの質問に、誠は我に返った。

「えっ？」

どきりとした。佑介をちらりと横目に見ると、バツが悪そうに目

を逸らした。昨日の会話を思い出したのだろう。自分の心の弱さが、幼馴染にまで余計な気遣いをさせている事が、もどかしい。
英治にも、本当は東商に行きたいのに、父親に反対できずに、一般受験をさせられそうだなんて、言いたくなかった。昨日も、佑介と亮平に晒した自分の弱さを、英治の前でも晒さなければならないのが、嫌だった。
「いや、そりゃあやっぱり、行きたいけどさ、なかなか簡単には決めらんないよ」
英治の質問を、中途半端にはぐらかした言葉が、自分の胸に突き刺さる。父に抗う事もできず、その弱さを、仲間の前で素直にさらけ出す事もできない。自分の弱さがつくづく嫌になる。
「へえ、それこそ意外だな。井岡だったら、迷わず推薦受けると思ってた」
「えっ、何で？」
「だって、井岡って、ほんとに野球大好きって感じに見えたからさ。練習中だって、誰よりも熱心だし。それに、東商には小松先輩もいるじゃん。むしろ断る様な理由なんてあるの？」
「いや、別にこれといって、理由があるわけじゃないんだけど……」
言葉に詰まってしまう。佑介が心配そうな表情で、見つめている。
「でも、まだ、ちょっと迷ってるってワケだ」
誠の気持ちを代弁するように、英治が言った。柔らかく、穏やかな口調だった。
「うん……」
「そっか、まあ、皆色々だよね」
そう言ったきり、英治はそれ以上、深く追及して来なかった。マイペースで、人に干渉される事を好まない英治は、自分が他人に干渉する事も好まない。誠は、そんな英治が好きだった。
人は人、自分は自分。誰もが違って当たり前だし、人には話したくない事情があって当たり前なのだ。でも、それを弁えて人と接するのは、なかなか難しい。必要以上に深入りしてしまえば、相手を

怒らせてしまう。けど、あまりにも無関心だと、鈍感な奴だと思われてしまう。

英治は、どちらかといえば人と距離を置く方だけど、かといって、他人に無関心な薄情者ではない。事実、野球部の後輩達にも、良くも悪くも熱くなり易い小川キャプテンより、常に冷静沈着で、客観的な視点からアドバイスをしてくれる、宮田副キャプテンを頼りにしている者も、少なくなかった。

佑介のように、幼い頃から気心が知れていて、何でも言えるような友達がいて、英治のように、適度な距離感が心地よい友達もいる。翔太のように、生意気だけど、どこか憎めない後輩もいる。誠は、東尾中野球部が大好きだ。でも、この仲間達と野球ができる時間は、もうそれほど長くは、残されていない。夏の大会が終われば、三年生は事実上引退だ。夏休みに入れば、塾の夏期講習も始まる。

未練は残したくない。後悔もしたくない。東尾中学野球部の一員として、完全燃焼したい。そして、その為には、自分はもっと、強くならなければならない。

「エーちゃん、今日は、部活、出れそうなの？」

校門を過ぎ、三年生校舎の昇降口まで着いたとき、誠が英治に聞いた。

「うん、今日は全然大丈夫」

「うん、じゃあ、また後で」

「うん」

そう言って、誠と佑介は三年七組へ、英治は三年四組の教室へ、それぞれ向かった。

6

午前の授業が終わり、昼休みになり、弁当を食べ終えた誠の所に、藤田隆が声を掛けてきた。

「よお、井岡。お前今月の『メジャー・リーグ』持ってる？」

「ああ、確か机の中に……」

そういって、机の中から一冊の雑誌を取り出し、隆に手渡した。その名の通り、アメリカのプロ野球、メジャーリーグの詳細情報が満載の、ややマニアックな雑誌だ。隆は、元は野球部員だったが、二年の秋に退部している。それでも野球そのものは大好きで、誠や佑介とは、今でもよく野球談議をする仲だ。

「サンキュー」

誠に礼を言って、自分の席に戻って行く隆の背中を見つめて、誠はその背中に、無言で問いかけた。お前はどうするんだ？どこの高校受けるか決めたのか？それは自分の意志で決めたことなのか？親や教師に決められたことなのか？

隆は、本当に野球が好きだった。打撃練習も、守備練習も、真っ先に駆け出して懸命に取り組んでいた。

だが、隆には才能が無かった。小学校時代は、弱いことで有名な少年野球チームで、セカンドのレギュラーを勤めていたそうだが、中学では、どんなに練習を積んでも、殆ど上達しなかった。それを露骨にバカにする者も少なくなかった。

「センスねえ癖にでしゃばんなよ」

「もう辞めた方がいいじゃねえの？」

しかし、心無い言葉を浴びせられても、隆は必死に努力した。チーム内の紅白戦の最中、ピッチャーの動きに集中するあまり、青木のサインを見落として、即座に交代させられても、後輩の翔太がセカンドのレギュラーに選ばれても、隆は諦めなかった。

だが、二年の秋に、肩を痛めた。医者に見せたら、野球を続ける

のは無理だと言われたらしい。それでも、まだ隆は諦めなかった。野球部の練習に参加し続けた。しかし、やはり隆の肩は限界だった。サードから一塁への送球はおろか、キャッチボールもままならない。肩が痛む事を恐れる気持ちが、無意識のうちにフォームを狂わせ、もともと制球が不安定だった隆の投げるボールは、どこへ飛んでいくか見当がつかないほど、不安定になってしまった。

「これ以上いたら、皆にも迷惑だから」

最後にそう言い残して、隆は野球部を辞めた。

隆は、成績もあまり良くなかった。塾などにも通っているはずだが、あまり成績の向上には結びついていないようだった。

大好きな野球もできずに、受験できる高校の選択肢も決して多くない。その将来に、同情するのは、傲慢だろうか？でも、自分の境遇は、客観的に見れば、隆よりもだいぶ恵まれているだろうと思う。甘えは許されない、恵まれた選択肢の中から、勇気を持って、自分の意思で、進むべき道を決めなければならない。

自分の席に戻って、ぼんやりと雑誌のページをめくる隆の姿を見て、誠は改めてそう思った。

7

午後の授業が終わり、部活の時間になった。

「アップが終わったら、打撃練習だ。一人3ストライクまで。まずは、レギュラー陣が打順どおりに、打席に入れ。その後は控え選手が一巡するまで続ける。打順が回って来るまでは、それぞれの守備位置に就く。宮田は、ピッチングに専念して、バッティングは最後だ」

「はい」

青木の指示に、英治が頷く。部活の時には、眼鏡を外している分、いくらかスポーツマンらしく見える。

準備運動を終え、一番バッターの誠が、左バッターボックスに向かった。

白い線で囲まれた長方形の中に入り、スパイクで軽く土をならし、バットの先でホームベースの角を軽く叩く。

三年生にとっては、最後の公式戦となる夏の大会まで、残り一ヶ月を切っている。部員達の練習態度にも、そろそろその緊張感が現れ始める頃だ。

誠も、徐々に緊張感が高まってきた。今までに無い程、悔いを残さない試合をしたいという気持ちが強いのが、自分でもはっきりと分かる。

中学最後の大会だから、当然かもしれない。でも、もともと自分は、闘争心の強いタイプではない。やるからには勝ちたいという気持ちは、いつだってあるけど、楽しめればそれでいいという気持ちのほうが、いつもは上回っている。でも今は、何か違う。

落ち着け。ここで終わりじゃないんだ。この大会が終わったら、東商で甲子園を目指すんだろう。あのわからずやの親父を、説得して見せるんだろう。自分に言い聞かせる。

マウンド上の英治は、いつものように淡々とした様子で、ロージ

ンバッグを拾い上げ、二、三度指先でそれを擦ると、もとあった場所にそれを落とし、指先に軽く息を吹きかけた。微かに舞い上がった白い煙が、ただでさえ無表情な英治の顔を、さらに見づらくさせる。

　贔屓目なしに、英治はいいピッチャーだと思う。チームメイトだから、当然、試合で真剣勝負をしたことは無いが、こうして練習中に実践的な勝負をしたことは、数え切れないほどある。ミートにはそれなりに自信のある誠でも、簡単に打ち込んだ記憶は、殆どない。コントロールのいい英治は、じっくりとボールを見極めようとしていると、あっという間に追い込んでしまう。どちらかといえば慎重な誠には、相性も悪いのかもしれない。

　だけど、今日は絶対に、英治の球を打ちたかった。英治はいい奴だとは思うけど、西崎からの誘いを、あっさり断った男には、絶対に負けたくない。決して、英治が憎い訳ではない。むしろ、いい奴だと思っている。だけど、自分の野球への想いを、自分自身に証明するためにも、ここは絶対に負けられない。

　肩幅に足を広げ、軽く膝を折る。バットは気持ち短めに持ち、やや寝かせ気味に構える。誠が一番バッターとして定着した二年前の秋、辰弥に教わった、ミート重視の構えだ。

　英治がキャッチャーのサインに頷いた。ノーワインドアップから、コンパクトで動きに無駄の無いきびきびとしたホームから、アウトコース低めに、キレのいいストレートが投げ込まれる。甘い球ではないが、決して手が出ないほど難しい球でもない。誠の読みどおりのボールだった。

　英治は、決して非力な投手ではないが、力でねじ伏せるような豪腕タイプではない。打者の癖や傾向を読んで、駆け引きで打ち取るタイプだ。誠が普段は、初球にあまり手を出さないことを計算に入れて、見送るはずだと踏んでの配球だろう。

　誠は、バットを振り抜いた。自分でも驚くほど、スムーズにバットが出た。金属音が響き、それとほぼ同時に、両手にボールを捉え

たという感触が伝わってくる。
　ショートの頭上、普段は自分が守っているポジションにいる控え選手が、ジャンプして目一杯伸ばした左手のグラブを掠めるようにして、打球はレフト前に落ちた。
「ナイスバッティング！いいぞ井岡。初球だって打てると思ったら積極的に打っていけよ」
「はい！」
　二打席目の初球にも、誠はバットを出した。今度はインコース低め、膝元に食い込むスライダー。英治の決め球だ。これも読みどおりだった。理由なんて無い。なんとなく、このボールが来るような気がしただけだ。今までの自分なら、こんな難しい球を狙って打ちに行くなんて考えられない。だけど、今日は何故か、じっとしていられない。バットを振らずにいられない。
　肘を畳んで膝を曲げ、腰の回転を使ってコンパクトにバットを振り抜く。今度はライト線を破るツーベースコースだ。自分でも少し驚いた。英治の球を二球続けて、こんなに綺麗に捉えられた事は、今まで一度も無かったはずだ。
「いいぞ井岡！その調子だ！」
「はい！」
　今度はどんな球で来るか。マウンド上の、英治の表情に変化は無い。読めない。ならばこちらも、あれこれ考えるのはよそう。来た球を打つ。それだけだ。
　そうだ。攻めろ、止まるな、行動しろ、積極的になれ。あれこれ考えるのは、その後でいい。
　次に英治が投じたのは、ど真ん中への、渾身のストレートだった。球種やコースを見極める余裕は無かった。ただ、バットを振り抜いた。殆ど反射的に、体が動いた。今度も、ジャストミート。
　次の瞬間、思わず、あっ、と息を飲む。ライナー性の打球が、英治の顔に向かって飛んでいくのが、スローモーションのようになって見えた。

「危ない！」
崩れ落ちるような体勢から、英治が反射的に突き出したグローブに、打球が収まる。
英治は立ち上がると、ユニフォームについた土を手ではたきながら、珍しく悪戯っぽい笑みを浮かべながら、誠に聞いた。
「わざと？」
誠も、笑いながら答える。
「うん、わざと」
「こら、井岡。冗談でもそんなこと言うな」
後ろから、審判を勤めている青木にたしなめられる。
「でも、ほんとにいいバッティングだったぞ。最後もアウトにはなったけど、宮田の全力投球を、綺麗に捉えたもんな。勿論捕った宮田も、ナイスキャッチだ。でも、それにしても今日の井岡は気持ちが乗ってるな。お前はいつも一生懸命だけど、今日は特に気持ちが入ってる感じがする。最後の公式戦まで、もう少しだからな。その調子でチームを引っ張ってくれよ」
「はい」
誠は、青木に一礼してベンチへ戻り、ヘルメットを置くと、愛用のグローブを持って、ショートの守備に就いた。
青木は、いつも誠を誉めてくれる。特に、心を誉めてくれる。ミスをしてしまった時にも、温かい言葉を掛けて、励ましてくれる。誰に対してもそうだ。青木のおかげで、どれほど自分に自信を持てただろう。何度失敗から立ち直れただろう。周囲の教師から、青木先生は甘い、とたしなめられる事も少なくなかったと聞く。
甘さと優しさは、紙一重なのかもしれない。それでも、誠は青木が好きだった。青木のおかげで、名門東商からスカウトされるほどの選手になれた。もっと上手くなりたい。もっと野球がしたい。こんなところで、自分以外の誰かの意思で、自分の野球を終わりになんて、させられてたまるか。
英治は、二番の翔太を、得意のスライダーで三振にしとめた。悔

しさに顔を歪めた翔太が、セカンドのポジションに向かう。
三番の英治の打順を飛ばし、四番の佑介が、バッターボックスに入った。
佑介、俺の所に打って来い。そう思った。
初球。インコース低目へのストレート。佑介が一番苦手なコースだ。窮屈そうなスイングになりながらも、何とかバットに当てたが、完全に差し込まれてファール。
二球目。アウトコース低め、ストライクゾーンからボールになるスライダー。佑介は、出しかけたバットを、途中で止めた。コースは完全なボールだが、スイングか、ハーフスイングかは微妙だ。バット、止まってますよね、と言いたげに、青木の方を振り返る。
「ボール」
青木のコールを確認した佑介は、何度か小さく頷くと、再びバットを構えた。佑介も、いつも以上に気合が入っているように見えた。
カウント1－1からの三球目。インコース高めのストレート。佑介は、今度はしっかりとバットを振り切った。しかし、二球目の残像があったのか、最も得意なはずのコースのボールに、佑介は差し込まれ、力の無い打球がレフトとショートの中間に、フラフラと上がった。
「レフト！」
「ショート！」
ナインが口々に叫ぶ。どちらの守備範囲とも言えない、微妙な打球。ポテンヒットになるかもしれない。だが。
捕れる。
打球が上がった瞬間、そう判断した誠は、一度打球から目を切り、後方へ全力で走った。もう一度打球を見る。思ったより伸びている、でも、飛びつけばあるいは……。
迷うな。行け。
自分の声が、聞こえたような気がして、誠は力強く地を蹴って左手を目一杯突き出した。グローブの先にボールの重みを感じた次の

瞬間、うつぶせの姿勢から、つんのめる様に倒れ込んだ。着地の寸前にぎゅっと閉じた目を開き、左手を見ると、相棒はしっかりとボールを捕まえていた。

「ナイスショート！」

セカンドから回り込んできた翔太が、そう言って手を差し出した。誠も手を差し出し、翔太に腕を引かれながら立ち上がる。

「絶好調じゃないスか。さすが、未来の甲子園球児！」

翔太にそう言われて、誠は少し照れてしまったような気持ちになった。

「何言ってんだよ。大会近いんだから、お前も気合入れとけよ」

そういった後で、翔太の言葉を胸の内で繰り返す。未来の甲子園球児。東商野球部へ入ったとしても、自分の力が、どこまで通用するかなんて分からない。それでも、可能性はあるはずだ。東商のレギュラーの地位を勝ち取る事ができれば、高校野球の聖地、甲子園の土を踏む事も、決して夢ではない。そのチャンスが、今の自分にはあるのだ。そのチャンスを、逃したくない、手放したくない。挑戦してみたい。

佑介が、英治の球を捕らえた。今度は三遊間への痛烈な打球。逆シングルの姿勢で打球に飛びついたが、わずかに届かなかった。起き上がり際に佑介の方を見ると、こっちを見て笑っている。

俺も負けないぜ。だから、お前も諦めるなよ。東商に行って、これからも一緒にやろうぜ。佑介の目が、そう言っている気がした。

誠も、少し笑った。

8

練習が終わり、いつものようにグラウンド整備をしていると、佑介が声を掛けてきた。
「随分、気合入ってたじゃんかよ」
そういった佑介の顔は、どこか嬉しそうだった。
「当たり前だろ。最後の公式戦まで、一ヶ月切ってんだから」
「最後にする気なのか？」
佑介の顔は笑っている。
「してたまるかよ」
誠も、笑顔でそう返す。
「だよな。誠、青木先生にも相談してみようぜ。もしかしたら、おじさん、説得してくれるかもしれないぜ」
そうか、顧問である青木に相談すれば、力になってくれるかもしれない。
「そうだな。帰りに、ちょっと話してみようかな」
「がんばれよ。校門のとこで、皆と待ってるからな」
そういって、親指を立てた佑介に、誠も同じ仕草で応える。
「うん」
グラウンド整備と、道具の片づけを終えた後、誠は、青木を呼び止めた。
「先生」
職員室へ引き返そうとしていた、青木が振り返る。
「どうした、井岡」
「あの、ちょっと話したい事があるんですけど」
「何だ？」
「あの、進路の事なんですけど……」
「東商の推薦の件か？」
青木の顔が、引き締まったのが分かった。おそらく青木も、西崎

の誘いを受けた三人の中で、唯一明確な返答をしていなかった誠の事を、気にしていたのだろう。
「俺、東商で野球がしたいです。でも、親父に反対されてて……」
「そうだったのか。それで返事が遅れてたのか。確か、井岡の親父さんて、学校の先生だったよな」
「はい」
「確かに、親父さんの立場からしたら、一般受験して欲しいと思うかもしれないよな」
青木の言葉に、不安がよぎる。先生、あんたも一緒かよ。結局学歴が全てかよ。信じてたのに。あんたは違うって、あんたなら力になってくれるって、信じてたから相談したのに。
「でも」
誠の不安を打ち消すように、青木は続けた。
「井岡の進路は、他の誰でもない、井岡自信のものだからな。お前が東商で野球をやりたいって言うんなら、俺はその気持ちを尊重したい」
よぎった不安が消し飛ぶ。やっぱりこの人に相談してよかった。大人の中にも、こんな風に子供の立場に立って、ものを考えてくれる人もいるんだ。
「家に連絡して、俺が親父さんに相談してみようか？」
青木の言葉に、一瞬期待してしまう。自分が言うより、顧問の青木が話した方が、義秀を説得しやすいかもしれない。でも……。
言葉に詰まる。青木は急かす事はせずに、誠が事得るのをじっと見守っていてくれているように見える。
甘えてはいけない。頼ってはいけない。ここで誰かの力を借りるわけにはいかない。
「いえ、やっぱり、それは自分でやります。わざわざ、話聞いてくれたのに、すみません。やっぱり、自分の力で、親父を説得してみます」
そうだ。他の誰かに頼ってはいけない。それに、青木が義秀に相

談してくれたとしても、義秀がそう簡単に、納得するとは思えない。もしかしたら、余計に話がこじれてしまうかもしれない。そうなったら、青木を恨む気持ちが生まれるかもしれない。それは嫌だ。この人を、嫌いになりたくない。

「そうか。井岡、随分大人になったな」

青木の表情が崩れる。

「えっ？」

「いや、なんて言うか、井岡はいつも真面目で、俺も含めて、先生や親の言う事に反発するような事とかって、今まであんまり無かっただろう？それは、基本的にはいいことなんだろうけどさ、でも、俺は少し不安だったんだよ。本当に、この子は大人達の言う事に納得してるのかなって、本当は、言いたい事があるのに、そういう気持ちを押し殺して、我慢してるんじゃないかなって。もっと自己主張してもいいじゃないかなって、少し心配だったんだ」

「先生……」

「がんばれよ、井岡。親父さんと話し合って、お前がどんな結論を出したとしても、俺はそれを尊重するよ」

そういって、青木は両手で誠の肩を優しく掴んだ。

「ありがとうございます」

嬉しかった。この人に相談してみてよかった。自分の野球への想いを、こんなにも大切にしてくれる大人がいる。それだけで、自分は決して間違ってはいないという気になれた。勇気をもらえた。

「何とか、自分で親父を説得してみます」

「そうだな、自分の事は、自分で出来るようにならないとな」

「はい、失礼します」

そう言って、誠は、青木に頭を下げた。

薄暗くなった学校を出ると、校門の所で、佑介達が待っていた。

「どうだった？」

と、佑介。

「うん、やっぱり、相談してよかった」

「先生、おじさんのこと説得してくれそう？」
「ん、そういうわけじゃないけど、でも、いいんだ」
佑介の顔色が変わる。
「なんだよそれ、おじさんの事、説得してくれるように、先生に頼んだんじゃないのかよ？」
「そんな事頼んでないよ。ちょっと、親父を説得するのに手こずってるって、そう言っただけ。そんで、先生と話して、相談してよかったって、俺は思った。それで充分だよ」
「でも、誠……」
佑介は、まだ腑に落ちない様子だった。
「まあまあ、井岡自身が先生と話して、それでよかったって思ってるんだから、それでいいだろ？」
英治が、佑介をたしなめるように、そう言った。こういうところが、英治は大人だと思う。勿論佑介もいい奴だけど。
「じゃあ、やっぱ、井岡先輩、東商行くんスか？」
翔太が尋ねる。
「行くよ。絶対行く」
宣言した。みんなの前で、はっきりと言い切った。言った以上、もう後戻りはできないぞというところまで、自分を追い込むために。
「よし、やろうぜ、誠。一緒に甲子園行っちゃおうぜ」
佑介が、肩に手を置く。
「ああ」
やれる。今日ならきっと、父に自分の気持ちをぶつけられる。簡単には、いかないかもしれない。だけど、絶対に諦めない。諦めるものか。

9

「ただいま」
家に帰ると、いつものように母が出迎えてくれた。
「お帰り、今日も随分練習がんばったのね」
泥だらけのユニフォームを見て、優しく微笑んだ母の顔を見て、誠は少し、考え込んだ。
母さんは、どう思っているんだろう。
井岡家では今の所、誠は義秀の意向に従い、一般受験をするという事になっている。
母はどう思っているのだろう。自分が、本当に、義秀の意見に納得した上で、その考えを受け入れたと思っているのだろうか。
自分が、まだ野球への未練を断ち切れてないことに、気づいているのだろうか。もし、その気持ちを、自分が父にぶつけたら、母は自分の味方になってくれるだろうか。
父とは対照的に、母はいつも優しかった。誠を庇って、自分が夫に怒られたりしても、いつも後で、義秀のいない所でで、慰めたりしてくれた。そんな態度を、父から、甘いと叱責されることも少なくなかった。初めて、東商の推薦の話を持ち出した時も、
「誠がそうしたいのなら」と、母は言ってくれた。
しかし義秀に、
「お前は甘い」となじられると、気の弱い母は、何も言えなくなってしまった。父に強く言われれば、母はそれ以上反対する事はできない。そんな母に、頼りなさやもどかしさを感じた事も、無かったわけではないが、それ以上に、家族が自分の意見に従って当然。と思っているかのような父の態度に、いつも怒りを感じていた。そして、そんな父に逆らえない自分自身にも。
母の事は好きだ。でも。
援護は、期待できないな。一瞬胸の内で呟いた後で、思い直す。

いや、それでいい。自分の力だけで、父を説得すると、心に決めたのだ。だからこそ、青木の申し出だって断ったのだ。
「父さん、今日も遅い？」
「今日は、特に何も連絡ないら、九時ごろには帰ってくるんじゃない？お父さんに何か、用があるの？」
「うん、ちょっと」
「……そう」
一瞬、間があった。しかし、それ以上は何も言って来なかった。美奈子なりに、何か察したのだろうか。でも、それは今の自分には関係ない。あくまでも一対一で、父を説得するのだ。
部屋に戻った誠は、いつものようにすぐには風呂場に向かわず、グローブの手入れをした。ローションをしみこませた布で満遍なく汚れを落として、薄くオイルを塗りよく馴染ませた後で、ボールを中に挟んで伸縮性のある専用のベルトで固定する。いつもより、少しだけオイルの匂いが強めなグローブの匂いを、ゆっくりと鼻から吸い込み、野球への想いを再確認する。
今日こそは、必ず父に自分の思いをぶつけるのだ。皆の前でも、東商に行くと宣言した。もう、後へは引けない、逃げるわけには行かない、負けるわけには行かない。
風呂場でシャワーを浴びながら、誠は東商からスカウトを受けた日の夜、父とその事について話し合ったときの事を思い出した。
「父さん、今日さ、東尾商業の監督から、うちで野球やらないかって誘われたんだ」
誠の言葉を聞いた義秀は、一瞬間を置いて、抑揚の無い声で言った。
「そうか、それで？」
表情は殆ど変わらないが、微かに威圧的な光が目に宿る。
それで？聞かなくても、わかるだろう。俺は東商で野球がしたいんだ。わかってるくせに、どうしてそんな言い方をするんだ。そう思っていても、口に出来ない自分の意気地の無さが、もどかしい、

歯痒い、情けない。
「……だめかな」
やっとの思いで、一言だけ搾り出した。
「駄目に決まってるだろう」
間髪入れずに、義秀に斬り捨てられた。威圧的な眼光が、さらに鋭くなり、誠を睨めつける。誠は、それ以上何も言えなかった。
「誠、学校は、何をしに行く所だ」
押し黙る誠に、義秀が追い討ちを掛ける。
これも、義秀が誠に、“学校は勉強をするために行く所”と言いたいのは、明白だった。だけど義秀は、こういう時、自分の口からは決して言わず、誠に言わせるよう仕向けるのが常だった。義秀は、暴力を振るう事は無かったものの、言葉で徹底的に追い詰めて来る事が、多々あった。そのやり方が、誠に、どれ程の屈辱を与え、自身への不信感を募らせているのか、義秀は全く気付いていなかった。いや、気付こうともしていなかった。少なくとも、誠にはそう見えた。
「どうした誠。聞かれた事に、答えられないのか？」
義秀は、白々しく怪訝そうな表情を作り、誠に返答を迫る。誠がそれでも黙っていると、義秀は、これもまた白々しく大きなため息をついて、
「じゃあ、教えてやるよ。学校って言うのはな、勉強するために行く所なんだよ」と言った。
義秀は、こういう時、妙に芝居がかった口調になる。その言い回しも、誠は大嫌いだった。
「野球が好きだから、野球の強い学校へ行きたい。その気持ちは、俺にもわかる。でも、もうお前も、それだけじゃいけない年齢だろう」
嘘だ。何が“わかる”だ。あんたは、俺の野球への熱意を、ひとつも分かっちゃいない。分かろうともしていない。いつだってあんたはそうだ。俺が何かに夢中になっても、それが自分にとって理解

の出来ないものだと、あからさまにけなすんだ。野球だけじゃない。保育園に通っていた頃、夢中になって見ていたテレビ番組の変身ヒーローや、小学校の頃、当時人気だったアニメキャラのカード収集に熱中したときも、どうせ大人になったら、こんなもの、見向きもしなくなるんだ、せっかく小遣いをやってるんだから、無駄遣いをするな、なんて言って、いつもバカにしていたくせに。

「お前の為に、言ってるんだぞ」

義秀が続ける。

その言葉を聞いた時、誠は奥歯をぎゅっと噛み締めた。

義秀がよく使う言葉の中でも、最も嫌いな言葉だった。

本当に俺の為なのか？自分の為じゃないのか？俺を自分の理想通りの人間に造り上げて、自分が満足したいだけなんじゃないのか？

義秀は、いつも一方的だった。誠の側に、歩み寄るようなことは考えていない、自分の側に一方的に、誠を引っ張り込むことによって、距離を縮めようとするのだ。

義秀は、誠が自分の意見に異議を申し立てて、口論になると、例え誠が筋道を立てた主張をしても「お前は、まだ若いから、そんな風にしか考えられないんだ」とか、「お前も親になれば、俺の気持ちがわかる」等と言って、決して誠の主張を受け入れようとはしなかった。

自分は大人であり、親である。だから子供である誠より、物事の道理を深く理解しており、より正しい道を導き出す事ができる。だから誠は、自分に言う事に従う事が、当然である。そんな傲慢さが、義秀の一挙手一投足に、ありありと見える。

大人だからなんだ。親だからなんだ。歳をとれば、何でもわかるのか。あんたが俺に示す道が、必ず成功に繋がっていると、あんたは保障できるのか。あんたの言う通りにして、上手くいかなかった時、俺が後悔した時、あんたは何を保障してくれるって言うんだ。あんたの為に失われた時間を、傷つけられた自尊心を、あんたはどうしてくれるんだ。

誠はいつも、そう思っていた。しかし、その気持ちを父にぶつける事ができなかった。そんな自分の弱さが、父の傲慢さ以上に許せなかった。それなのに、

「もう一度、しっかり考えてみろ。自分の将来のために、どうするのがベストなのか。もう子供じゃないんだから、それくらいわかるだろう」

子供じゃない？いつもは、お前なんてまだ子供だって、馬鹿にしてるくせに。一体、あんたの中で、俺は子供なのか大人なのか、どっちなんだよ。そのときの都合で、大人扱いしたり、子ども扱いしたり、どこまで身勝手なんだ。胸の内で父を罵倒する自分が惨めだった。

「そんな話、俺は絶対に認めないぞ。何の為に、高い月謝を払って塾にも行かせてやったと思ってるんだ」

行かせてやった？誠が、自分から塾へ行きたいなどと言った事は一度も無い。それなのに、あんたは、行かせて“やった”と思っているのか。怒りの中に、呆れが混じる。

「もう一度言うぞ。俺はそんなの絶対許さない。わかったな」

寝室へ向かう父の後姿を、黙って見送る事しか出来なかった時の屈辱が蘇って来る。あんな思いは、二度としたくない。

今度は負けない。父にも、自分自身にも、絶対に負けられない。

父よ、勝負だ。

10

自室の勉強机で、数学の問題集を解いていた宮田英治は、一区切り付いたところで問題集を閉じて、数分前に母が持って来てくれた、アイスコーヒーの入ったグラスを手に取り、ストローを口に咥えた。

グラスの中で、溶けかけた氷がカランと音を立て、水滴が一滴、机の上に落ちた。英治は、咥えたストローからは口を離さずに、指先でなぞるようにして、机に落ちた雫をふき取った。放っておいても、すぐに乾いてしまうだろうが、性格的に放っておけないのだ。

そんな性格を人からは、几帳面だと言われる事もあれば、神経質だと言われる事もある。ただ、英治自信は、人が自分をどう評価しようと、あまり気にしないタイプだった。

人は人、自分は自分、みんな違って当たり前。人に干渉される事も、逆に干渉する事も、英治はあまり好まない。誰かに何かを相談したりする事も、滅多に無い。自分でも、個人主義な性格だと自覚している。それが悪い事だとは思わないが、そんな自分が今、ひどく気になっている男がいる。自分でも、こんなふうに、他人のことが気になるのは珍しいとわかっているから、少し驚いている。

男の名は、井岡誠。野球部のチームメイトだ。

東尾中野球部の一番ショート。自分と同じく、東尾商業野球部監督、西崎俊雄の誘いを受けた男だ。自分はそれを断ったが、井岡は東商入りを望んでいる。しかし、父の猛反対に遭い、悩んでいた。今日登校時に、偶然会った時も、井岡の幼馴染でもある野球部主将で、同じく西崎の誘いを受け、すでに東商行きの決心を固めているという小川佑介も交えて、その話をして、井岡が、心から真剣に悩んでいると感じた。

英治は、西崎の誘いを初めから断るつもりだった。野球は好きだけど、本気で、現実的な目標として甲子園出場を狙うような環境に身を投じて、そこに自分が馴染めるとは思えなかった。

学生の本分はあくまでも勉強だ、などという決まり文句に、迎合するつもりはさらさら無かったが、かと言って、部活を最優先した進路選択をするという発想は、全く無かった。

東商への推薦を断り、公立高校を受験すると決めたのは、百パーセント自分の意思だ。誰かに、相談もしなかった。そもそも、その道を選ぶのに、殆ど迷いなどなかったから、誰かに相談しようとも思わなかった。両親も、反対はしなかった。

自分は今までに、あれほど深刻な悩みを抱えた事は、無い。

子供の頃から、要領がいいとよく言われた。勉強も、スポーツも、それほど必死に取り組んで来たわけではなかったが、何をやっても平均以上の能力を発揮できた。友人が多いタイプではないが、かと言って周囲から孤立しているわけではないし、異性からの人気も決して悪くはない。比較的裕福な家で生まれ育ち、家族との関係も良好だ。

どれも、強く望んで手にしたものではない。学校の成績や、野球の技術に関しては、人並みに努力もしたが、それもあくまで“人並み”だ。

勉強、スポーツ、人間関係、家庭環境、英治がそれほど高望みをしなくても、どれも充分に満たされていた。だけど、そのどれか一つさえ、どんなに望んでも、決して手に入らない境遇に生まれた者もいる。井岡の場合は、家族関係に悩んでいるということになるだろう。

教師をしているという、井岡の父。井岡の話からすると、かなり厳格な父なのだろう。

英治は井岡に対して、“そつが無い様で、どこか不器用”という、少々矛盾した印象を持っている。

勉強も結構できる。野球も東商からスカウトされるほどの実力がある。なのに、どこか危うい。同じクラスになった事が無いので、殆ど部活のみの付き合いだったが、二年間一緒に野球をしていても、井岡の不器用さを感じたことは、少なくなかった。

不器用といっても、技術的なことではない。むしろ技術的な面で言えば、井岡ほど器用な選手はいないと思う。ショートでの堅実な守備は勿論、バッターとしても、ミートの正確さは野球部の誰もが認めるところだ。バントなどの小技も上手い。

英治が感じている、井岡の不器用さとは、精神的な部分だった。

英治は、野球部顧問青木健二の指示で、井岡がピッチャーをやらされた時の事を思い出した。英治達の学年には、エースを務める英治以外の投手がいまひとつ頼りなかった為、去年の秋、一学年上の先輩達が引退し、新チームが発足した直後に、野手の中から投手が出来そうな者を、青木が何人か試したのだ。井岡も、その内の一人だった。適任だと思った。井岡は肩もそこそこだし、何よりコントロールが良い。多少無理な姿勢からでも、悪送球は滅多にしない。

実際、紅白戦で初登板を果たした井岡投手は、青木が期待した通りの、安定したコントロールを見せ、立ち上がりは危なげなかった。しかし、結果的には打ち込まれた。原因は、アウトコース一辺倒の配球である事は、明白だった。キャッチャーが、そんな単調なリードをしたわけではないだろうし、井岡自身も、インコースを狙って投げたボールが無かったわけではないだろう。だが、優しい性格の井岡は、インコースを狙っても、無意識にデッドボールを恐れる気持ちが働いてしまい、ボールが真ん中寄りにいってしまったのだ。

気持ちに迷いがあれば、しっかりと腕を振り切ってキレのあるボールを投げる事はできない。小学生時代からピッチャー一筋の英治は、その事をよく知っている。

甘く入った棒球を、次々に打ち込まれた井岡は、自ら青木に降板を申し入れ、結局ピッチャーも辞退したのだった。

その井岡が、厳格な父の意向に、断固として立ち向かおうとしている。朝会った時には、まだ、はっきりと迷いが感じられた。だが、午後になって、部活で顔を合わせた時の井岡は、別人の様にふっ切れていた。少なくとも、英治にはそう見えた。もしかしたら、一心不乱に不安を打ち消そうと、もがいていただけなのかもしれない。

だが結果的に、井岡は、英治の決め球であるスライダーも、渾身のストレートも、迷いの無い鋭いスイングで、ほぼ完璧にバットで捉えた。井岡のバットに、今日ほど見事に自分の投球を捉えられた事は無かった。井岡は、その後守備でも、小川が打ち上げた際どい打球にダイビングキャッチを試みて、見事に捕球している。

練習後に、小川の勧めもあって、井岡は青木に、進路の事を相談しに行った。そして、はっきりと東商へ行くと、断言した。その時の井岡の、凛とした口調と表情が、無性に羨ましかった。そして、自分がそんな感情を抱いている事に、驚いた。深刻な悩みを抱えた事のない自分は、その辛さを知らない半面、逆にそこから抜け出したときの喜びも知らない。

人生山あり谷ありというが、その喩えで言えば、自分のこれまでの人生は、小高い丘が延々と続いているようなものだと、英治は思った。いつでも、周りの人より満たされていて、大きな転落は、今のところ一度も無い。言う事ないじゃないか。何が不満なんだ。

でも、そう思う一方で、不安定で起伏の激しい、けれど刺激的な人生に、少し憧れたりもする。それは、本当の苦難を知らない者の、贅沢な無いものねだりだろうか。

自分の感情が、小さくはあるけれど、しかししっかりと、確実に波打っているのを、英治は感じた。

井岡は、父を説得できるだろうか。

誰にでも優しくて、人を傷つける事を嫌う井岡は、自分を含めた野球部員達からも好かれている。とりわけ井岡は後輩達から好かれていた。上下関係の厳しい体育会系において、井岡の様な存在は、些細な事でギクシャクしがちな中学生のチームの和を、さりげなく保ってくれる。井岡はいい奴だ。

出来れば、井岡の父には、息子の願いを聞き入れてやって欲しい。あの不器用な井岡が、あんなにはっきりと自分たちの前で、決意表明したのだ。その気持ちを、汲んでやって欲しい。

今日の井岡を見る限りでは、その決心は簡単には、揺らぎそうも

無い。だが英治は、あの時、マウンド上でうなだれて、自ら降板を申し入れた、井岡の脆さも知っているだけに、不安もあった。
らしくないな。他人の事を、こんなに気に掛けるなんて、でも――
でも、中学生なんて、本来そんなものなのかもしれない。
大人と子供の境目の、どっちつかずな微妙な年頃。小さなことに、大きく揺れ動くのが当たり前じゃないか。そしてきっと、自分も例外ではないのだ。
「どっちみち、俺が心配したって、どうしようもないか」
波打つ感情を振り切るようにひとりごちて、英治は飲みかけのアイスコーヒーのグラスを手に取った。
グラスの中に半分ほど残っているアイスコーヒーは、すっかり氷が溶け切ってしまい、表層の部分だけ、殆ど水のようになってしまっている。
英治はそれを、ストローで念入りにかき混ぜてから、少し躊躇したけれど、グラスに直接口をつけて一気に飲み干した。

11

ベッドに横になり、仰向けの姿勢から、ボールを天井へ向かって軽く投げる。手首のスナップを利かせて、指先でスピンを掛けて、ほぼ垂直に投げる。舞い上がった頂点で、一瞬静止するくらいのスピンを掛けるイメージで、投げる。落ちてきたボールを、グローブのポケットにしっかり収まるよう、注意しながらキャッチする。

考え事をする時、誠はいつも、この“一人キャッチボール”をすると、落ち着いてゆっくりと物を考えられるのだ。小学校高学年の頃、自然と身についた。

投げては捕り、捕っては投げ、集中力を高める。

風呂にも入った。夕食も済ませた。歯磨きもした。ついでに、少し散らかっていた、机の上も整理した。後はもう、父の帰りを待つだけだ。

大丈夫、自分がやろうとしていることは決して、間違ってなんかいない。だけど――

では、父の考えは？

父が、自分に示している道は、間違っているのか？

亮平との会話を思い出す。

そんなに簡単に決めれる事じゃないだろ。自分の将来にも関わる事なんだから、野球やり

たいからってだけで、あっさり決められるかよ

あの時、亮平の追求から逃れたいだけで、言ったわけではない。自分の中にも本音でそう思う気持ちがある。父の考えも、決して間違いではないだろう。でも、今はそれを認めたくない。

東商で野球をしたいという自分の気持ちを「将来の事を、何も考えていない」と罵る、父の考えを受け入れる事は、負けたことにな

るような気がするのだ。
何に対して負けなのかは、自分でもはっきりとは分からない。父の傲慢さなのか、それに抗えない自分の弱さなのか、学歴を重んじる社会の規範なのか、今の誠にはわからない。ただ、ここで負けたら、自分は絶対に後悔する。そしてもしそうなったら、それを義秀のせいにしてしまう。そうなったら、自分があまりにも惨めだ。自分の人生が、思い道りに行かない事を、誰かのせいにして引きずっていくなんて、あまりにも惨めじゃないか。
そうだ。俺が一番したいことは、東商で野球をすることじゃない。誠は今、確信した。
一番したいことは、自分の進むべき道を、断固として自分で決める事なのだ。誰のどんな反対があろうとも、それを貫き通す意志の強さが欲しいのだ。

お前、親の言いなりじゃん。

あの時は、何も言い返せなかった、弘之の言葉。でも、今は違う。
親の言いなりになんてなるものか。自分の人生は自分のものだ。自分の未来は、自分の意思で、自分の力で、勝ち取るのだ。
どんなに厳しい言葉を投げつけられても、どんなに激しい叱責を受けようとも、今日の俺は、絶対に怯まない。退かない。負けない。だから……、
覚悟はもう決まっている。父よ、早く帰って来い。

12

義秀は、美奈子の言った通り、九時過ぎに帰ってきた。誠は息を潜めて、扉越しに聞こえてくる、両親が交わす言葉に、耳をすました。

義秀は、いつものように、まずは夕食を済ませ、それから風呂に入って寝るつもりのようだ。

誠は、どのタイミングで、父に話を切り出そうか考えた。その結果、義秀が、食事も風呂も済ませ、もう寝るだけ、というタイミングがベストだろうと、誠は考えた。義秀に、「食事中だから」とか「もう風呂に入るから」といった、話を途中で切り上げる口実を与えないためだ。

「ごちそうさま」という、義秀の声が聞こえた。おそらく、そう時間をおかずに、義秀は風呂場へ向かうはずだ。

誠の予想通り、義秀は食後すぐに、風呂場へ向かった。扉のすぐ向こうを、義秀のものと思われる足音が、通り過ぎて行ったのだ。リビングから風呂場へ向かうには、誠の部屋の前を通らなければならないから、今聞こえた足音が、義秀が風呂場へ向かうものだったのだろう。

時計を見ると、午後十時を少し回っていた。

誠は、部屋の扉を開いて、リビングの食卓へ向かい、椅子に腰掛けた。

「どうしたの？怖い顔して」

「えっ？」

食器洗いの手を止めて、美奈子が尋ねた。母にそういわれて、誠は初めて、自分の顔が強張っている事に気づいた。だけど誠は、母の不意の問いかけに、思わず緩んだ顔を、もう一度引き締めた。隠す必要は、無いと思った。

「ちょっと、父さんに、話があるんだ」

「そう……」
それだけ言って、美奈子はまた食器洗いに取り掛かった。
台所で、食器を洗う母の背中を見つめながら、誠は、考えた。
母さんは、俺が何を話そうとしているのか、聞こうとしなかった。たいした話ではないと思ったのだろうか、それとも、大切な話だときづいているからこそ、あえて深く追求しなかったのだろうか。母の背中からは、察する事はできない。そう思って、誠が美奈子から目を逸らしたとき、食器を洗い終えた美奈子が、声を掛けた。
「何か、冷たいものでも飲む？」
「うん」
話し合いの前に、喉を潤しておく事は大切かもしれない。
「オレンジジュースでいい？」
「うん」
美奈子が、氷の入ったグラスに、オレンジジュースを注いだ。誠は、それを一気に飲み干した。自分でも気づかないうちに、喉が渇いていたらしい。
「おかわりは？」と、美奈子。
「ん、もう大丈夫」
「そう」
美奈子が、冷蔵庫に、ジュースをしまった。
誠は、グラスの中に残った氷を、口に含んで噛み砕いた。甘ったるいオレンジジュースより、こっちのほうが、今の自分の喉には、いいような気がする。
美奈子が、テレビのリモコンを手に取り、電源を入れた。特に見たい番組があったわけではないらしく、無作為にチャンネルを切り替え、スポーツニュースで、野球情報が流れているのに気づき、手を止めた。
「見る？」
「あ、うん」
メジャーリーグでプレーする、日本人選手の活躍が、ダイジェス

トで紹介されている。鍛え抜かれた身体と、洗練された技術で、夢を掴んだ男達。彼らは、野球を続ける事を、親に反対されたりはしなかったのだろうか。それとも、彼らは子供の頃から、親までもが、その将来に夢を膨らませるような、圧倒的な才能を見せ付けていたのだろうか。

自分は、どうだろう。小学生時代も、五年生から、ショートのレギュラーを任されていたし、中学でも一年からサードのレギュラーで、辰弥の引退後は、ショート。打者としても、小中通して、主に一番を打ち、リードオフマンを務めてきた。それなりに実績を残したのかもしれないが、自分より明らかに上手いと思える選手も、試合などで何人も見てきた。客観的に見て、自分が傑出した才能を持っているとは、思えない。だけど、それと、自分が東商で野球をするのとは、全く別の話だ。

自分には、東商で野球をする資格がある。たとえ、芽が出ず、三年間ベンチ入りする事すら出来なかったとしても、ここで父の意思に押し切られて、行きたくもない学校へ行かされるよりはましなはずだ。結果が全てじゃない。

「野球、好きなんだね」

母の声に、はっとした。

「すっごい、真剣な顔で見てた」

「いや……別に」

また、知らず知らずのうちに、顔が強張ってのを、母は勘違いしたようだ。

「野球、続けたい？」

「……うん」

「……そうだよね、せっかく強い学校から誘われたんだもんね」

「うん、でも、やっぱり好きなことばっかりじゃいけないとも思うし……」

だからと言って、父の意見に従う気は無い。だが、母が、自分と父が衝突する事を心配しているのだとしたら。もし、これから、自

分と夫が、口論する場面を目の当たりにして、母がそれを悲しんだら。

今日こそ揺るがないと思っていた決意が、ここへ来てわずかに揺らいだ。

義秀は、まだ、風呂から上がってこない。

13

「母さんは、どう思う？」
今度は、誠が逆に、美奈子に尋ねた。
「進路の事？」
「うん」
「うーん、どっちかなぁ。自分の好きな学校へ行って欲しいとも思うけど、お父さんのの言うとおり、堅実な道を選んで欲しいとも思う。優柔不断かもしれないけど、どっちっていうふうに言い切ることは出来ないな」
美奈子は、義秀のように、誠に何かを強要することは決して無いけれど、こちらが意見を求めたときにも、はっきりとした答えが帰ってこないことが多い。優しいと言えば優しいが、頼りないといえば頼りない。
「ごめんね、はっきりしなくて」
誠の胸の内を、見透かしたかのように、美奈子が言った。
頼りないかもしれないけれど、母は確かに、自分のことを想っていてくれている。頭から見下して、自分の理想を押し付けて、それを「お前のため」などと言う父とは違う。
「別に謝んなくたっていいよ。自分の事だもん。自分で何とかするよ」
「そう……」と言って、美奈子は微笑んだが、その笑顔の目にだけは、微かな悲しみが宿っているように、誠には見えた。
息子が、精神に自立しようとしている、その成長を喜びながらも、力になってやれない自分を恥じているのだろうか。
「父さん、遅いね」
そういって、誠は、風呂場の方に顔を向けた。母の顔から目を逸らす口実が欲しかった。
「そういえばさ……」

誠は、ふと思い出した。
「昨日、父さん帰ってきた時、部屋の扉越しにちょっと聞こえたんだけど、父さん、俺になんか言おうとしてなかった？」
「えっ？ああ、そう言えば、でも、もう寝ちゃったって言ったら、それ以上何も言わなかったから、何の用だったかはわからなかったけど。お父さんも酔ってたみたいだから、あの後お風呂入って、すぐ寝ちゃったし」
「そう」
自分が神経質になりすぎていたのだろうか。
その時、風呂場の扉が、開く音が聞こえた。義秀が、風呂から上がったのだ。
いよいよだ。
母との会話で、少し決意は揺らいでいたけど、もうわずかな迷いは吹っ切れていた。
大丈夫、やれる、そう簡単に、今の俺の決意は揺るがない。
「母さん」
「何？」
「出来れば、二人だけで話したいんだ」
「……わかった、頑張ってね」
美奈子はそう言って、微笑んだ。その目からは、先刻の見せたような悲しみは感じられなかった。
美奈子が寝室へ入り、扉を閉じたのとほぼ同時に、義秀の足音が聞こえてきた。

14

「なんだ、起きてたのか」
風呂から上がったばかりの義秀は、タオルで髪を拭きながら、言った。
「父さん」
「どうした？」
「あのさ……ちょっと、話があるんだけど」
「何だ、改まって」
そう言いながら、義秀は、誠の向かい側の椅子に、腰を下ろした。
「母さんはどうしたんだ？まだ風呂にも入ってなかっただろう」
父の質問には答えぬまま、小さく息を吸って、誠は言った。
「俺……、どうしても東商で野球がしたいんだ」
あの日から、ずっと言いたかった、言いたくても言えなかった言葉を、父に告げた。
義秀の表情が、一瞬硬直する。驚いているように見えた。誠が未だに野球への未練を引きずっている事など、　予想もしていなかったかのようだった。少なくとも誠には、そう見えた。
「何を言ってるんだ、お前は？」
「俺は、東商で野球がしたい」
もう一度言った。
義秀が、二、三度目をしばたかせた。
「今さら何を言ってるんだ。前にも話しただろう。高校へ行ったら勉強に専念して、野球はやめるって、俺と約束しただろう。もう忘れたのか？」
義秀は、呆れ気味に言った。だけど、こちらもはじめから、義秀がすんなりと聞き入れてくるとは思っていない。ここで怯んではいけない。黙るな。言い返せ。相手に飲まれるな。
「……違う」

父の目を真っ直ぐに見据えて、誠は静かに、しかしはっきりと、そう言った。
「違う？何が違うんだ？あの時、お前の為にも一般受験する方が良いんだって事を話して、それで、お前だって納得したんだろう」
「俺は納得なんてしてない。俺は約束なんかしてない。父さんが、勝手にそう思い込んでるだけだ」
自分の言葉が、自分自身を興奮させ、語調が荒くなる。誠の義秀の目を見る視線は、殆ど睨むようなものになったいた。
「だったら、どうしてあの時、最後に何も言わなかったんだ。何も言わなかったら、わからないだろう」
わからない？本当にわからなかったのか？あの時の俺の態度を見て、自分の言葉に納得したのだと、この父は本気でそう思っているのか？独りよがりな理屈を押し付けて、一方的に話を切り上げたという事を、全く自覚していなかったのか。
違う。本当は、わかっているのだ。今回の、進路の事だけじゃない。いつもそうだった。誠が何も言い返せなくなるまで徹底的に捻じ伏せて、“正しいのは自分”という形を作る事で、義秀は誠を、支配してきたのだ。憎い。父の傲慢さが、心の底から憎い。
誠は、自分の腹の底から、怒りが込み上げてくるのを感じた。いつもは、こういう攻撃的な感情は、いつもは抑制し、胸の内に仕舞い込んでしまっていた。ぶつけたくても、ぶつける勇気がなかった。だけど、今日は、違う。覚悟は決まっている。抑えない。抑えられないのではなく、あえて抑えない。
「じゃあ、あの時、俺が何か言ったら、父さんは聞く耳を持ってくれたのかよ。いつもいつも、自分の言う事一方的に押し付けてばっかりで、俺の言うことになんて聞く耳持たないくせに」
ぶつけた。幼い頃から、胸の奥で燻らせていた思いを、初めて、はっきりと、父にぶつけた。かつて、父にこれほど強い口調で、言葉をぶつけたことは無かった。
「どうしたんだ、誠？何をそんなに、怒ってるんだ」

義秀は、目を丸くした。本気で驚いているようだ。息子が、何故自分に対してこんなに怒りをぶつけてくるのか、理解できていないのだろうか。
鈍い。鈍すぎる。
自分を正しいと信じきっている、傲慢さのなせる業だ。
自分は正しい。だから、息子が自分に従うのも当然だ。きっと、いつだって父はそう思っているのだ。今までは、そんな父に、黙って従ってきた。従うしかなかった。逆らえなかった。だけど、今回は違う。
退くものか。諦めるものか。絶対に、父に自分の意思を認めさせてやるのだ。
「別に、どうもしないよ。俺は東商へ行って野球をやる。ずっとそう決めてた。それを言いたかっただけ」
今度は、感情を抑えて冷静に言った。それが当然であるかのように。そうだ。当然なのだ。自分の進路を、自分の意志で決める。自分がやろうとしていることは、至極当然の事なのだ。
「お前、今更何を言ってるんだ？」
義秀は、眉間にしわを寄せ、呆れたように言った。驚きが、怒りと侮蔑に切り替わるまで、そう時間は掛からなかったようだ。
「俺は、東商で野球をする」
父の目を真っ直ぐに見て、もう一度、はっきりと、自分の思いを口にした。
「はぁ……」
義秀は、わざとらしいほど大げさな溜息をついた。よくあることだ、この程度の事で、今日の誠の心は、折れたりはしない。
「それで？その後はどうするんだ？まさかプロ野球選手になるなんて言い出すつもりじゃないだろうな？」
予想外の言葉だった。一瞬、言葉に詰まる。
誠が、今思っている事は、あくまで東商で甲子園を目指して野球がしたいという事だけだ。でも、もしかしたら、プロ野球選手にも、

なれるかもしれない。そんな気持ちが無いわけではない。だが、それは決して現実的な目標ではなく、淡い夢のようなものだった。だけど――――

それを、父に一方的に否定されるのは、納得できない。

「簡単になれるとは思ってない。でも、もしかしたら、なれるかもしれない。そのために、少しでも高いレベルで野球がしたいんだ」

「なれなかったら？」

義秀は、断定的な言い方はしなかったが、その口調には、そんな事出来っこないと言う嘲りが、はっきりと込められていた。

「そこまで先のことは、まだ考えていない」

「はぁ……、もう、呆れて何も言えないな」

義秀は、もう一度大きな溜息をつき、吐き捨てるように言った。

こんな事を言えば、義秀が呆れるのはわかりきっていた。でも、それが、今の誠の正直な気持ちだった。まだ中学生の自分に、高校を卒業した後の自分がどうなっているかなんて、見当も付かない。それが、悪い事だなんて、少しも思わない。

「前にも言っただろう、もう子供じゃないんだから、もっと自分の将来の事を考えろって。部活のためなんかに、学校選んでどうする。それで、怪我でもして、野球ができなくなったらどうするんだ。自分の将来っていうのはな、楽しいとか楽しくないとか、そんなことで選ぶもんじゃないんだよ。どうしたら、将来安定した生活が出来るか、それが一番大事なんだよ。それぐらいわかるだろう」

「じゃあ、俺が東商に行ったら、将来安定して生活は出来ないの？」

先の事なんて、誰にもわからない。それは大人も子供も同じじゃないか。東商へ行くという選択が、誠の将来にマイナスになると、今の時点で断言することなんて、誰にも出来ない。出来るはずがない。

「確率の問題だよ。安定した将来を考えろと言ってるだろう。叶うかどうかわからないような夢を見て成功する確率と、素直に俺の言う通りにして、堅実な道を選んで、大学へ行って、収入の安定した

仕事に就ける確率。どっちが確実か、そのくらいわかるだろう」
義秀はそうまくし立てて、自分の言っている事に反論が出来るか、とでもい言いたげに、誠の目を真っ直ぐに見てきた。誠は、視線を逸らさなかった。
何なんだよ、その偉そうな態度は。“素直に”だって？あんたが俺に求めているのは、“素直”じゃなくて“従順”だろう。あんたの言う事聞いてりゃ、何もかも上手くいくみたいな顔しやがって。
「どうだ誠？どっちが確実だ？」
義秀が、重ねて問う。またそれか。
「自分の言ってる事のほうが正しいって、俺に言わせたいんだろう。だったら最初から自分の口で、そう言えばいいだろう。何でいちいち、そんな勿体つけた聞き方するんだよ」
「お前が、何も分かっていないからだろう」
「だったら、あんたはどうなんだよ？」
何もわかってないだって？だったら、あんたは、自分は何もかもわかっているとでも言うのか？そんな人間、いるはずが無い。自分は絶対に正しいだなんて思っている奴こそ、何もわかってない奴だ。確信した。父は間違っている。
「あんたは何でもわかるのかよ？俺があんたの言う通りにすれば、必ず上手くいくって、保障できるのかよ？」
「誠、お前、さっきから誰に向かって口を利いてるんだ」
義秀は、ゆっくりと、威圧するような口調でそう言った。誠は、怯むことなく答えた。
「父さんに言ってるんだよ。他に誰がいるってんだよ」
当たり前だろう。ここには、あんたと俺しかいないじゃないか。わかりきった事を聞くな。
「いい加減にしろ！」
義秀が、怒鳴った。それでも、誠は怯まなかった。
「俺が聞いたことに答えろよ。そんなでかい声だしたって、誤魔化されないからな」

いいぞ。ここまで、一歩も退かずに、父と渡り合えている。やれば出来るじゃないか。

「自分の言ってる事が、絶対に正しいなんて言い切れるのかよ？もし、あんたの言う通りにして、上手くいかなかったとき、どう責任取ってくれるんだよ。出来ないだろ？だったら、そんなふうに何でもかんでも、自分の言う通りにさせようとするなよ。俺は……」

誠が、言いかけた時、寝室の扉が小さく開いて、美奈子が心配そうな顔がのぞいた。

「母さん……」

15

「美奈子、ちょっと」
義秀は、そういって、空いた椅子を指差し、美奈子をそこへ座るよう促した。美奈子が、黙ってそれに従う。
「誠はどうしても、俺の言う事を無視して、野球を続けたいそうだ。お前、どう思う？」
義秀は、少し済ましたような微笑を浮かべながら、美奈子に尋ねた。初めから相手の回答を制限する、いつもの威圧的な口調だった
「母さんは、関係ないだろ」
母の真意はわからない。ただ、父に強く迫られれば、母は自分の意思とは関係なく、父に賛同する態度を見せるだろう。そうなれば、父はさらに勢いづく事は目に見えている。そしておそらく、父の狙いが、そこにあるだろうということも。
「関係ない事はないだろう。母さんにとっても、お前の将来は大切な事なんだぞ。どうなんだ、美奈子」
「あたしは……、誠自身の進路なんだし、本人の行きたい学校へ……」
美奈子が言い終わらないうちに、義秀が口を挟む。
「お前まで、何を言ってるんだ。どうしてもっと先のことまで考えないんだ。そうやって、お前が甘やかすから、誠が、こんな勝手な事を言い出すんだ」
義秀が、声を荒げる。美奈子は萎縮して、押し黙ってしまった。
自分から、質問をしておいて、相手の言葉に割り込んでくる。これも義秀がよくやることだった。会話をしていても、相手の意見を聞き入れる姿勢など、頭から無い。自分の考えを、相手に一方的に押し付けるためだけの、コミュニケーションしか出来ない。だから、こんな事ができるのだ。
父への怒りが胸の奥で、さらに激しく燃え上がる。それを、ぶつ

けてやりたい。いままでは、威圧的な父に萎縮して出来なかったけれど、今日は出来た。今また、父にこの勘定をぶつけてやりたい。だけど、母が介入してきた事で、状況が変わってしまった。

これ以上、自分が父に抗えば、父の怒りが母に受けられてしまう。いや、すでにその矛先は、母の喉元に突きつけられている。それに母自身、息子と夫が、これ以上言い争うのを見ているのは辛いだろう。

加勢はしてくれないけれど、誠が誠でいることを、いつも受け入れてくれた母を、これ以上苦しめたくないという思いが、固まっていたはずの決意を激しく揺さぶる。

今日も、ダメなのか。また父の思い通りになってしまうのか。

嫌だ。

お前、親の言いなりじゃん。

弘之の声が、頭の中に響く。

違う。俺は、親父に屈したわけじゃない。父の言っている事を、認めたつもりも無い。でも、母さんを、これ以上苦しめたくないだけなんだ。

「誠、どうだ。これだけ言っても、まだ俺のいうことがわからないか」

義秀が、誠のほうに向き直った。

誠は、俯いて視線を、逸らしてしまった。

目を逸らすな。黙り込むな。今日の練習だって、積極的なバッティングが成功したじゃないか。守備だってそうだっただろう。あの時の気持ちを思い出せ。攻めろ。退くな。相手に飲まれるな。でも――

俯いた誠の視界の端に映る、母の悲しげな表情が、奮い立とうとする気持ちを押さえつける。

「もう、俺は寝るからな。二人とも、もう少し頭を冷やせ」

義秀は、そう言って立ち上がり、寝室へ向かった。

１６（前書き）

今回で、一つ目の山場が終わります。でも、お話はまだまだ続くので、今後も宜しくお願いします。

16

一方的に話を打ち切り、寝室向かう父の背中。あの時と同じだ。止めなきゃ。今ここで、父を止めなかったら、あの時と何も変わらないじゃないか。佑介達の前でも「絶対に東商へ行く」と、宣言したんじゃないか。

俯いた顔を上げて、父の背中に何か言おうと口を動かすが、声にならない。

顔を上げたその目に、困惑した母の顔が映った。それとほぼ同時に、母は気まずそうに顔を伏せてしまった。心が揺れる、決意が鈍る。だけど、今ここで父を引き止めなければ、絶対に後悔する。そう自分に言い聞かせ、沈みかけた気持ちを奮い立たせる。

「父さん！」

義秀が、面倒くさそうな顔で振り向いた。

「何だ。まだ何かあるのか？」

義秀は、げんなりとした表情で振り返った。

「いい加減にしろ！誠、お前、学費を払うのは誰だと思ってるんだ」

「……それは……」

それを言われたら、何も言い返せない。だけど、親が子供の学費払うなんて当たり前じゃないか。それを引き合いに出して、自分の意見を押し通すなんて卑怯じゃないか。そう言ってやりたい。でも言いたくない。親が子供の学費を払うのが当たり前なら、子供はそれを、親に感謝するのだって当たり前だ。でも、納得できない。たとえ高い学費を払ってもらったとしても、行きたくもない学校へ無理やり行かされて、それを感謝する気にはなれない。だけど、それはやはり、甘えではないかとも思う。

「大丈夫だよ、誠」

義秀は、穏やかな笑みを浮かべながら、そう言った。

笑ってる？なぜ？

「お前はまだ若いから、そんなふうに思うんだ。大人になって、働くようになったら、若いうちに勉強しておいて良かったって思えるんだよ。そういうもんなんだ。みんなそうなんだよ」
父のその言葉を聞いた時、誠の中で張り詰めていたものが、ぷっつりと切れた。
萎えた。心が折れた。
通じない。この人には、何を言っても、自分の気持ちは通じない。
結果さえ良ければ、それでいい。そこへ辿り着くまでの過程は関係ない。この人は、そう思っているのだ。
がっくりとうなだれる誠に、義秀が追い討ちを掛けた。
「大丈夫だ、誠。父さんを信じろ」
やはり穏やかな笑みを浮かべて、義秀はそう言った。
信じろ？息子の真剣な想いを真っ向から否定しておきながら、自分を信じろだと？ふざけるな。怒りを通り越して、悲しくなってきた。
こんな男が、自分の父親なのか。この男は、俺のことを一体ないなんだと思っているのだろう。自分の“もの”だとでも思っているのだろうか。そうとでも考えなければ、ここまで自分の“意思”を否定する理由がわからない。
自分のものだから、自分の思い通りにならなければ、許せないのだ。
義秀が、踵を返して寝室へ向かっていく背中に、もう一度声を掛ける気力は、誠には残されていなかった。たとえ気力が残っていたとしても、父の心を動かす事のできる言葉は、見つからなかっただろう。
自分の父に、心の底から失望した。もうこの男と、心を通わせる事は不可能だ。心を通わせてみようと試みる気力すら、もう沸いて来ないだろう。
父の姿が、寝室に消えた。
「誠……」

母が、泣きそうな顔で、自分の名を呼んだ。
誠は、母の問いかけには応えず、立ち上がって自室へ向かった。母に、謝られたり、慰められたりすれば、なおさら惨めな気持ちになるような気がしたのだ。母もそれを察したのか、それ以上何も言って来なかった。
自分の部屋に入った誠は、電気も点けずに、倒れ込むようにベッドに突っ伏した。枕に顔を押し付け、声にならない叫びを漏らし、枕を何度も叩く。
説得できなかった。あれほど強い決意で望んだのに、説得できなかった。
何度言っても、父に自分の想いは伝わらないだろう。物事の考え方が、父と自分は根本的に違うのだ。
もう、このまま黙って、父の言う通りにするしかないのだろうか。

お前、親の言いなりじゃん。

お前、親の、言いなりじゃん。

言いなりじゃん――

言いなりじゃん――――

言いなりじゃん――――――

弘之の言葉が、呪文のように頭の中で反芻される。頭を抱え込むようにして、耳を塞いでも、忌まわしい記憶からは逃れられない。
違う。違う。俺は、父の言う事に納得なんてしていない。従う気もない。諦めきれない。だけど――
もう、どうしたらいいか、わからないんだ。

17

かつてない決意で望んだ、父との“決戦”に敗れてから一夜明け、井岡誠は、十五年の人生で、最も憂鬱な朝を迎えた。

食欲もあまりなかったが、かと言って朝食抜きで午前中の授業を乗り切れるほど、育ち盛りの体は、燃費がよろしくない。

ハイブリッドカーよろしく、人間の身体を外科手術で低燃費に改良できるほど医学が進歩したら、発展途上国の食糧難がどれほど改善されるだろう、などと馬鹿げた事を考えながら、香ばしく焼きあがったトーストをコーヒーで流し込むようにして強引に胃袋へ詰め込む。

あほくさ。声には出さずに、胸の内で呟く。我ながら馬鹿馬鹿しいとは思うが、今は少しでも、沈んだ気持ちを誤魔化したかった。

朝食後の歯磨きを済ませて、制服に着替えた誠は、引きずりそうになる程重い足取りで、学校へ向かった。

野球部の仲間に、合わせる顔がない。

昨日、顧問の青木にまで後押しされて「絶対に東商へ行く」と、高らかに宣言したにもかかわらず、父を説得できなかった。

前にも一度、同じ話をした。その時も、断固として拒絶されたが、昨夜は、さらに決定的に拒絶された。

もう何を言っても、父に自分の想いは伝わらないと絶望させられるほど、頑なに拒まれた。

父の言うとおり、野球を諦めて学業一本に絞った進路を選ぶ道しか、自分には残されていないのだろうか。

「誠」

佑介が、笑顔で声を掛けてくる。大人顔負けの体格と不釣合いな丸顔で団子鼻の愛嬌のある顔で笑顔を見せられると、いつもは心が和むのだが、今朝に限って佑介の笑顔は、どんな恐ろしい凶器よりも暴力的に、誠の心を抉った。

「おじさんと、話しつけてきた？」
その質問が、誠の心の傷口を、さらに深く抉る。
「…ダメだった」
搾り出すように、誠は言った。出来れば、口にしたくなかった。その言葉を口にすることで、より鮮明に、自分の重いが、父に受け入れられなかったという現実を、突きつけられるような気がしたからだ。だけど、ずっと親身になって、弱気な自分を後押ししてくれた親友に、結果を報告しないわけにはいかない。
「マジで？おじさん、そこまで、お前が野球続けるの反対なの？」
「もう、反対なんて次元じゃねえよ。完全拒否。俺今まで、あそこまで親父に本気の相談した事なかったのに、完璧に否定された。もう、あのクソ親父に、何言っても無駄だよ。所詮、現実知らないガキが、夢見てるだけとしか思ってねえんだよ。畜生、ふざけやがって」
顔をしかめて天を仰ぎながら、まくし立てるように吐き捨てる。自分でも、驚くほど愚痴っぽくなっている。さっきまで、言いたくもなかった事なのに、一言「ダメだった」と、話したこと事でたがが外れてしまったのか、堰を切ったように父への悪態が、口を突いて出た。
亮平から聞かされた、木田という男の事を思い出した。
いつも優しくて、誰かの悪口なんか絶対言わないような人だったのに、親父さんのこと愚痴ってばっかで、なんか、かわいそうになっちゃってさ、
佑介が、自分を哀れんではいないだろうかと思い、佑介の顔を覗き込んだ。
「そっかあ。教師だもんなあ、おじさん。やっぱり、勉強のほうが大事って事になっちゃうのかなあ」
そう言って、佑介も顔をしかめた。自分の事のように悔しがって

くれる友の心遣いを、素直に喜べない。同情されているようで、いたたまれない気持ちになる。二日前にも同じ事を感じた。そんな自分が、惨めで仕方ない。

きっと木田という男の父親も、義秀のような傲慢な男なのだろう。誠は、木田とその父親が、どんな男なのだろうかと想像してみた。

まずは息子から。コントロールの良い投手だが、よくも悪くも神経が細やかな、自分より少し年上の男。体型は、細身のような気がするが、身長は高めのような気がする。体格としては、英治と同じくらいか。その体の上に、おとなしそうなたれ目で、顎の尖ったやや面長な顔が、小ぢんまりと乗っかっているのが、目に浮かんだ。幼い頃から、父の特訓を受けていたという事だから、その顔はきっと日に焼けていただろう。野球をやめてからは、どうかわからないが。

次に父親。体育会系出身で、息子に野球の猛特訓を課してきた中年男。義秀と同じ、威圧的な目が真っ先に目に浮かんだ。四角い顔に、短く刈り込んだ髪型。口をへの字に曲げて、息子を睨めつける姿が容易に想像できる。会った事もないくせに勝手な想像してをして、木田の父に怒りを覚える自分が、おかしい。体格は、息子と違ってがっしりしていそうなイメージだ。次に思い浮かんだのは、大きくて分厚い手。その手で、木田の父は、息子に暴力を振るうこともあったのだろうか。

木田はそんな父に、どこまで抗ったのだろう。どこで諦めてしまったのだろう。自分の意思を、自分の父親に一方的に捻じ曲げられた時、どれほど悔しかっただろう。どれほど惨めな気持ちだったのだろう。

自分もこのままだと、木田と同じ道を辿ってしまうかもしれない。このままじゃいけない。このまま、父の意思に押し切られたら、絶対に後悔する。だけど、あの様子では、とても説得できそうにない。もう、どうしたらいいのかわからない。

「誠、コンビニ行こうぜ」

「コンビニ？弁当持ってきてないの？」
特に用のない寄り道は、あまり好きではない。
「そうじゃねえけど、いいから行こうぜ」
佑介に押し切られ、誠は渋々コンビニの自動ドアをくぐった。

18

店内に入ると、季節感を無視したおでんの匂いが鼻をついた。冷房での効いた店内のレジカウンターの上で、もうもうと湯気を立てている什器から漂ってくるこの匂いが、誠は苦手だった。

コンビニでパートをしている母に、以前尋ねた事がある。

「今ってさ、一年通しておでんやってるコンビニ多いけど、真夏におでんなんか買う人なんているの？俺、冬とかならいいけど、夏とかにさ、冷房で冷たくなった空気がおでんくさいのって、なんか違和感あるんだよね」

「よその店はどうか知らないけど、うちの店はお昼頃になると、そこそこ出るわよ。勿論寒い時期に比べたら、売れないから作る量も少なめだけどね」

「夏の昼間におでんなんて、どんな人が買ってくの？」

「年配のお客さんが多いかな？うちの店の近所は、結構多いみたいだし。一人、毎日のように買いに来るおばあちゃんがいるけど、その人は、ご主人が亡くなって、一人暮らしなの。それで、一人分の料理作っても効率悪いからって、よく買いに来てるわ。あたしも、最初は何も真夏にまで、熱々のおでん買わなくても、って思ってたんだけど、よく考えたら海の家なんかでもよくやってるし、その場で食べるならまだしも、店で買ったのを家に持って帰って食べる頃には、熱々ってことはないだろうしね」

そう言われてみれば、夏でもラーメンとかなら、熱々でも違和感無く食べれるな、と誠は思った。

目からウロコ、と言ったら言い過ぎだが、その話を聞いた時妙に腑に落ちて、自分の中で、少し物の見方が広くなった気がしたのを、誠は思い出した。かと言って、真夏におでんをつつく気にはなれなかったが。

固定観念、てやつか。

当てもなく店内をうろつきながら、口には出さずに呟いてみる。
自分は、固定観念には縛られない人間になりたい。父のように、自分の考えだけを正しいと信じ、それを他者にも押し付けるような人間にはなりたくない。広い視野で、物事を考えられる人間になりたい。

お前、親の言いなりじゃん。

弘之に、あの言葉を突きつけられてからずっと、それまで何の疑いも無く、大人から与えられた課題を自分がこなしていた事に違和感を感じていた。勉強が出来なくたって、親の示す道ばかりを歩まなくたって、充実した日々を過ごしている人も、きっと沢山いるはずだ。逆もまた然り。勉強が出来て、親の言う事になんでも従ってきても、その先に必ず、素晴らしい未来が待っているとは限らない。先のことは、誰にもわからないのだ。
自分がやろうとしていることは、決して間違ってなんかいない。父がなんと言おうと、その気持ちは変わらない。でも、自分がどれほど父の意思を拒絶しようとも、結果的に、父の示す道を進む事になったら、それは、父の考えを認めるのと同じ事じゃないだろうか。
諦めたくない。自分は、自分の進むべき道すら、自分で決められないような、弱い人間なんかじゃない。でも、どうしたら……
「誠」
「佑介」
佑介が、商品の入ったビニール袋をぶら下げて、立っていた。
「お待たせ。買うもん無いなら、もう行こうぜ」
「ああ」
佑介と並んで、店の出口へ向かう途中、賞味期限切れが近づいた商品を、無造作に籠に放り込む店員の姿が目に入った。
「ああゆうのってさ、皆捨てちゃうんだろ？もったいねえよな」
佑介が、小声で言った。

「うん、うちの母さんが働いてる店なんかは、一応従業員が食べたり持ち帰ったりしてもいい事になってるみたいだけど、その分を引いても毎日必ず人籠分くらいは余るみたい。店によっては、食べさしてもくれない所もあるみたいだよ」
「じゃあ、そういう店は、残った食べ物は、全部ただのゴミになっちゃうんだ」
「そういうことだね」
自動ドアをくぐるとき、もう一度ちらりと、件の店員の方へ目をやると、すでに三つの籠が商品で一杯になっていた。
発展途上国なんかじゃ、自分よりずっと幼い子供が、何人も、まともに食べ物も与えられずに死んでいる。その境遇と比べたら、自分はどれほど恵まれているだろう。きっと、世界的に見れば、日本に生まれたという事だけでも、相当恵まれている部類に入るはずだ。そう考えると、自分が抱えている悩みが、とても贅沢な悩みのようにも思えてくる。
俺は、やはり甘えているんだろうか。このくらいの事、我慢して受け入れるべきなのかもしれない。
それが、自分の本心なのか、それとも自分を納得させる為に、必死で言い聞かせているだけなのか、誠自身にもまだわからなかった。

19

「誠、これ飲めよ」
そういって、佑介が差し出したのは、茶色い小さなガラス瓶に入った、栄養ドリンクだった。
「結構効くぜ、それ」
「佑介……」
手渡されたガラス瓶を握り締めると、心地よい冷たさが、手のひらに伝わってきた。
これを買うために、佑介はわざわざコンビニに寄ったのだろうか。
「先の事も大事かも知んないけどさ、俺達が、このチームで出れる最後の大会まで、もうちょっとしかないんだぜ。お前がそんなんじゃ、勝てる試合も勝てねえだろ」
「ごめん、なんか、変に気い遣わせちゃって……」
「いいよそんなの。それに、東商で野球やるつもりなら、今のうちから、これまで以上に頑張らなきゃ、ついていけないぜ」
まだ、自分が東商へ行きたいという気持ちを、後押ししてくれるのか。嬉しかった。こいつと、これから先も、一緒に野球がしたい。だけど……
いや、今はとりあえず、最後の大会に集中しよう。昨日の今日で、義秀に“再戦”を申し入れたところで、結果は同じだろう。それに、もしこのまま、本当に東商への道が断たれるとしたら、中学野球としてだけでなく、協議として取り組む野球も、この大会が最後という事になる。絶対に、悔いは残したくない。
「ありがとう、佑介。最後の大会、頑張ろうぜ」
「おう、やろうぜ」
誠は、ビンの蓋を開けて、ドリンクを一気に飲み干した。
「いい飲みっぷりだね」

後ろから声を掛けられて、振り向くと、英治がいた。
「おはよう、エーちゃん。俺、昨日、親父ともう一回話したんだけどさ、ダメだった」
聞かれる前に、先に言ってしまったほうが楽だと思い、誠はあえて、自分から昨日の事を、英治に話した。
「そんで、佑介が、そこのコンビニで、これ買ってくれたんだ」
飲み干した空き瓶を、顔の前でかざす。
「なる程ね、さすがキャプテン。いいとこあるじゃん」
「まあね、最後の大会も近いし、主力メンバーがへこんでちゃ困るもんな」
「確かに、井岡の出塁率は、チームの得点に大きく影響するからね」
自分が、チームから必要とされている。その気持ちが嬉しかった。その気持ちに、結果で応えたい。
「大丈夫、正直まだ完全には立ち直れてないけど、部活の時間までには切り替えるから」
「しっかり頼むぜ、誠。昨日みたいに、バッティングも守備も期待してるぜ」
佑介が、誠の肩を叩く。
「俺も昨日は、ちょっとショックだったもん。井岡にあそこまで打ちまくられたの、多分はじめてだよね」
「ショック、受けてたようには見えなかったけど」
「確かに、翔太なんか掠りもしなかったし、俺ん時も、コントロールばっちりだったじゃん」
佑介が、誠に賛同する。
「ショックを受けても、それがピッチングに影響しないように、やせ我慢するのが、エースの務めだからね」
確かに、英治は試合中にピンチを迎えても、全く表情を変えない。投球だけでなく、自分のメンタルのコントロールも、抜群に上手いのだ。
誠は、メンタルのコントロールが、やや苦手だった。打ち損じた

り、エラーをすると、考え込んで消極的になってしまう。自分の精神面の弱さは、誠自身よく自覚していたし、自分にとって最大の課題とさえ言えた。

だが、昨夜――

結果的には、自分の主張が、父に受け入れられる事はなかったが、今までにないほど、父に自分の気持ちを激しくぶつけることが出来た事は、誠の中で、小さな自信にはなった。

昨日の練習でも、積極的な姿勢が結果に結びついた。

まだ諦めるのは早い。俺はやれる。俺はあんな親父に、絶対負けない。

そう自分に言い聞かせた。

20（前書き）

安西の学年を間違えていましたので、訂正しました。

20

県立水蘭高校二年G組の教室で、井岡義秀は世界史の授業を行っていた。

「安西、どこを向いてる。ちゃんと授業を聞いているのか」

義秀に名前を呼ばれた生徒、安西聡は、俯いた顔を上げて、表情の無い顔で一瞬ちらりと義秀の方に目を向けたが、すぐに顔を背け、窓の外の風景に目をやった。無造作に染められた金髪。その頭頂部の、生え際から伸びた黒い地毛の部分がかなり伸びて、ぽっかりと空いた大きな穴のように見える。

義秀も、なんとなく、つられるように窓の外を見た。

体育の授業で、サッカーをしている生徒達が、目に映った。窓が空いている事もあり、歓声や笑い声も、はっきりと聞こえてくる。

視線だけを安西の顔に戻してみると、いつもの気怠そうな表情で、外の風景を眺めたまま、ぼんやりと頬杖をついている。安西は、小中高と、スポーツとは無縁だったはずだ。おそらく今も、サッカーに興味があったのではなく、自分の視線を避けたくて、そっちを向いただけなのだろう。

安西は、昨年度は義秀が担任を勤めていた、一年E組の生徒だった。その頃から、すでに成績は留年ぎりぎりで、義秀も、何度も安西の補修授業に付き合った。

こちらの問いかけに、嫌気が差した時、虚ろな目で窓の外を見るのは、安西の癖だった。　義秀は、去年の一学期に、二人きりで行った補修を思い出した。フランス革命についてだ。絶対王政の社会で、特権階級に虐げられてきた平民達が決起して起こした、この革命は、現代における民主主義の原点とも言われる。

「安西。今俺達が、民主主義の世の中で、独裁者に抑圧されずに生きていられるのは、こういう人たちが、命がけで戦ってくれたおかげなんだぞ。お前も成人したら、選挙には必ず行きなさい。せっか

く与えられた権利を、むざむざ放棄するのは、怠慢だ。これは、平和な時代に生まれた人間の義務だぞ」

「別に、俺がこいつらに革命起こしてくれって頼んだわけじゃないでしょ？俺政治とか興味ないし」

安西はこの時も、表情の全く無い顔で、そう答えたあと、虚ろな目で窓の向こうへ視線をやったのだ。

水蘭高校は、学区内ではトップクラスの進学校である。ここへ入学してくる者は、皆、中学時代までは、各中学でトップクラスの成績を収めてきた者ばかりだ。安西も例外ではない。

安西は水蘭の中では、下の下の劣等生だった。入学試験も、ぎりぎりでの合格だったと聞く。

“挫折に弱いエリート”などという言葉があるが、義秀は、安西にその言葉は当てはまらないような気がしていた。

義秀は、一年生の時も、安西のいたクラスで授業を受け持っていたが、安西は入学当初から、今と同じく、全く覇気の無い様子で、次第にクラス内でも孤立していった。

それから二年たった今も、安西は、当時と全く変わらぬ無気力さで、窓の外を眺めている。希望進路も、G組みの担任である後藤政信によると、一応四年生の大学という事になっているそうだが、今のままでは、よほど志望校のレベルを落とさない限り、合格できる大学は見つからないだろう。いや、それ以前に、こんな無気力なまま、大学に進学した所で、何の意味があるのだろう。

義秀は、昨晩息子の誠に投げかけられた言葉を思い出した。

俺があんたの言う通りにすれば、必ず上手くいくって、保障できるのかよ？

大人しくて、素直だと思っていた息子が、あんなに感情を露にして、自分に食って掛かった事は、初めてだった。その真剣な眼差しには、少したじろぎもした。だが、自分の教育方針を帰る気は、毛

頭無かった。
息子に対しても、生徒に対しても、決して妥協はしない。子供達の意見を聞き入れていたら、きりが無い。子供の意見を尊重するなんていうのは、自分の教育理念に自信のない者たちの、逃げ口上だと、義秀は考えている。甘やかせば、子供は付け上がるだけだ。それでは本人の為にもならない。人生は、自の思い描いたとおりに運ぶほど、甘いものではない。人生経験の浅い若者に、現実の厳しさを教えてやるのが、大人の務めなのだ。
「安西、嫌な事から逃げ出したり、目を背けてばかりいたら、いつまでたっても成長できないぞ。もう、それぐらいわかる歳だろう」
安西が、目だけをこちらに向けた。先ほどまで何の感情も感じ取れなかった眼差しが、微かに攻撃的で尖ったものになったのを感じたが、義秀は、意に介さずに授業を続けた。
安西一人のために、授業時間を浪費すれば、他の生徒にも迷惑だ。だが、決して安西を、このまま見捨てたりするつもりはない。同僚の中には、ああいう奴は毎年必ず一人はいるから、放っておけばいい、などと言って傍観を決め込んでいる者もいるが、それは職務怠慢だ。
職務を全うするのが、社会人の義務。そして、一人前の社会人になるために、良い成績を取るべく努力するのが、学生の義務。それを教えるのが、われわれ教員の義務なのだ。

21（前書き）

感想の受付を、ユーザー限定から、制限なしにしました。どんな事でも書き込んで下さい。

21

義秀は、海辺の小さな漁師町で育った。義秀の父、井岡忠雄も、その父も、そのまた父も、漁師だった。忠雄も当然、長男の義秀を、漁師にするつもりでいたし、義秀自身も、幼い頃にはそのつもりでいた。真面目で、勉強熱心だった義秀は、飲み込みも早く、義秀は、忠雄の期待を一身に受けていし、大漁旗をはためかせて、大海原へ繰り出す父の船は、誇らしくすらあった。だが――

中学生になり、自分の将来と言うものを真剣に考えるようになると、決して収入が安定して　事実、井岡家の経済事情は、決して恵まれているとは言えなかった。そのくせ忠雄は、毎晩浴びるように酒を飲むものだから、家計は傾く一方で、両親が金の事で口論になることは、日常茶飯事だった。両親が、互いを口汚く罵りあう姿を見る度に、義秀は漁師と言う職業に不安を持つようになり、こんな家族は嫌だ、自分は、将来安定した仕事に就いて、家族に経済的な負担を掛けない過程を築きたいと、願うようになっていった。

だが、長男である自分が、漁師以外の職業に就く事など、父は決して許さないだろう。同級生同士で、将来について話し合っている時に、高校を卒業したらアパートを借りて大学へ通うなどと語って、目を輝かせている仲間達の話を聞かされた時の、肩身の狭い気持ちは、今でも忘れられない。

大学へ通わせて貰うのは、さすがに厳しいかもしれないけど、せめて収入の安定した職業に就きたい。将来結婚して子供が生まれた時に、家族に経済的な負担を掛けたくない。そう思って、一度忠雄に、相談した事がある。

「父ちゃん、俺、漁師とは違う仕事がしたい。自然が相手だから仕方ないけど、やっぱり俺、将来はもっと、収入の安定した仕事に就きたいんだ」

「馬鹿野郎っ！」

晩酌中の忠雄は、赤くなり始めた顔をさらに赤くして、義秀を拳で思い切り殴りつけた。
「ふざけたこと言いやがって。俺の父ちゃんやじいちゃんが、ずっと守ってきた船を、お前はよその誰かにやっちまってもいいってのか？寝ぼけてたこと言ってやがると、張り倒すぞ、この野郎！」
忠雄は、気性の荒い漁師仲間の内でも、短気で知られた男で、口より先に手が出るタイプだった。そんな父に、漁師になりたくないなどと言えば、こうなる事は目に見えていた。だけど、言わずにいられなかった。
「俺だって、漁師の子供に生まれたくて生まれてきたわけじゃない！どうして俺の将来を勝手に……あっ！」
言い終わらないうちに、再び拳が飛んでくる。鼻からも口からも血が出ている。畳にこぼせば、母が気づいた時に心配させてしまう。それが発端になり、また夫婦喧嘩が始まってしまう。自分のしたことが原因で、両親が争う姿を見たくない。そう思って、懸命に手で顔を抑えた。
「口答えするんじゃねえ！」
自分自身の言葉が、怒りに拍車を掛けた様子で、忠雄は何度も、何度も、義秀を殴り続けた。父に殴られたことは、今までに何度もあったけれど、この時ほど執拗に殴られたことは無かった。義秀は、頭を抱え込んで亀のように丸くなった姿で、恐怖と屈辱に耐えながら、何度も、何度も、自分に言い聞かせた。
俺は、こんな理屈の通じない人間には、絶対になりたくない。自分の思い通りにならなければ、暴力で人を捻じ伏せるなんて、絶対に間違っている。正しい人間になりたい。正しい事が、何故正しいのか、それを子供に言って聞かせることの出来る大人になりたい。
教師と言う職業を志すようになったのは、その頃からだった。
高校卒業と同時に、家出同然で実家を飛び出した。生活費捻出のために、三つのアルバイトを掛け持ちし、その合間に、独学で受験勉強をして、二浪の末に合格した夜間主の大学を、六年掛けて卒業

した。生活費も、学費も、自力で賄っている自分より、親の脛を齧って通っている、自分より若い同級生が、先に卒業して就職していくのを見て、一人悔し涙を流した事もあった。

そんな劣等感に苛まれていた苦学生時代に、後に妻となる田口美奈子と出会った。必修教科の英会話で、同じクラスになったのだ。

しょっちゅう宿題を忘れてくる、あまり勉強熱心でないグループの一人だった。宿題を写させてやる代わりに、彼らに学食で昼食を奢ってもらう事が定番となり、親しくなったのだ。

宿題もやって来ないなんて、しかも人のものを写して提出するなんて、なんて自堕落な奴らだ。そう思って、義秀は当初彼らを、少なからず軽蔑していたが、貧乏学生にとって、昼食を似ただでありつけるのは捨てがたかったし、主管いっ忘れるたびに、自分を頼って「お願いします、井岡先生！」などと言って頭を下げて来る彼らが、教師を目指していたと言う事もあってか、どうにも憎めなくなってしまっていたのだ。

大学を卒業して教師になって三年目に、美奈子と結婚した。良くも悪くも大らかで、時にはそのアバウトさに呆れる事もあるけれど、一緒にいると肩の力を抜いてリラックスできる妻は、自分にとってかけがえの無い存在だ。さらに二年後に誠が生まれた。大人しくて、手の掛からない、心の優しい子に育ってくれた。

家業を継がなかったことを根に持っていて、結婚にもあまり言い顔をしていなかった忠雄も、誠が生まれてからと言うものの、事あるごとに「今度はいつ帰って来るんだ」などと言うようになり、誠を可愛がり、父とのわだかまりも、消えていった。

人より少し遠回りをしたかもしれない。だけど、後悔はしていない。人より苦労をしたからこそ、当たり前の事を幸せだと思える。

自分は幸せだ。そう思っていた。その気持ちが、昨夜、息子の言葉によって、少し揺らいだ。

俺があんたの言う通りにすれば、必ず上手くいくって、保障でき

るのかよ？

いつも大人しくて温厚な息子が、怒りに満ちた目で、自分にそう言ったのだ。さすがにたじろいだ。

保障などは出来ない。ただ、自分は確率として、その方がリスクが少ないという事を、言いたかったのだ。

学生時代に、好きな事に精一杯打ち込んで、思い出を作っておく事は、素晴らしい事だと思う。自分は、部活動に取り組むことそのものを、否定しているわけではない。

事実、自分の教え子が、部活の試合で勝った報告をしてくれたりした時などは、心から嬉しかった。だけど、学生の本分は、あくまでも勉強だ。部活は、その合間に取り組むものであるべきだ。

いくら名門校から、誘われたからと言って、自分の学力レベルを大きく下回るような学校、へ息子が進学するなどと言う事は、断じて認められない。

自分も中学生の時に、自分の将来をめぐって、父と揉めた。もしかしたら、息子も今、あのときの自分と同じような気持ちなのかもしれない。

だけど、自分と父は違う。自分の言う事は現実的で、理にかなっている。今はわからなくても、将来はきっと、自分の気持ちをわかってくれるはずだ。

義秀は、そう信じていた。

22

東尾中学放課後のグラウンド。誠達野球部員は、夏の大会へ向けて本格化した練習に取り組み、汗を流していた。

ショートの守備位置に着き、青木のノックを受ける。ボテボテのゴロに、猛然とダッシュして打球を掬い上げ、前屈みの姿勢のままサイドハンドで一塁へ送球する。佑介がミットを構えた所に、一直線に送球が収まった。

「ナイスショート！」

顧問の青木健二の声も、次第に熱を帯びてきている。

誠達三年生にとって、二週間後に迫った夏の大会は、中学野球最後の公式戦になる。二年前は、主将・小松辰弥を中心とした、鉄壁の守備力で、県大会ベスト８入りを果たした。これは、東尾中の過去最高成績でもある。誠も主に、九番サードで出場している。去年は、三年生が比較的小粒だった事もあり、一番ショート井岡誠、二番セカンド菊池翔太、三番ピッチャー宮田英治、四番ファースト小川佑介というラインナップが、この時すでに定着していた。しかし、それは逆に、まだ成長過程の彼らを中心に据えなければならなかった、チームの地力の弱さの裏返しでもあり、最後までチームとして機能しないいまま、結局地区予選で敗退した。

だが、今年は違う。下級生時代からレギュラーを任されて来た、実戦経験豊富なメンバーが、今年は揃っている。守備力で言えば、二年前のチームには、やや劣るが、絶対的エース、宮田英治の安定感を加味すれば、失点を防ぐ能力は決して引けを取るものではない。上位打線の破壊力は、明らかに現チームのほうが上だ。トータルで見れば贔屓目無しに、二年前のチームより、現チームの方が上だと、誠達は見ている。だからこそ、一年上の先輩達が引退して、新チームが発足した時、東尾中野球部発足以来となる、県大会優勝、つまり全国大会出場を目標に掲げたのだ。

父とは、ひとまず休戦だ。今はとにかく、目前に迫った、中学野球最後の大会に、全力を注ごう。もう一度、自分の野球への想いを確認するためにも。

「ショート！」

今度は、痛烈な打球が二遊間を襲った。間一髪、二塁キャンバス後方で打球をキャッチし、反時計回りに身体を反転させながら、その勢いを利用して、一塁へスナップスロー。体が軽い。こんなにも、自分のイメージ通りに体が動くなんて、初めてだ。

やれる。俺はやれる。県大会優勝も、甲子園も、決して夢なんかじゃない。自分の力に、自信がわいてくる。一度萎えた心に、力が漲って来る。

見てろよ親父、俺は絶対負けないからな。あんたにも、自分自身にも。

佑介のミットに、送球が収まる。今度も、佑介のミットは微動だにしなかった。

23

練習を終えて帰宅し、風呂と夕食を済ませた誠は、ベッドに寝そべり、いつものように一人キャッチボールをしながら、考えていた。

最後の大会を戦い終えるまで、父を説得する事は、後回しにすることにした。中学生活、もしかしたら、野球人生最後の公式戦となるかもしれない大会に、悔いは残したくなかったからだ。

だが、悔いを残したくないのは、進路の問題も同じだ。後回しにしようと心に決めても、やはり頭の中から離れない。

もう一度、父と話し合ってみようか。いや、今は最後の大会に集中すると決めたじゃないか。それに、昨日の様子じゃ、今また父と話したって、結果は目に見えているだろう。でも、もしかしたら……

「はあ……」

誠はため息をついて、ボールを掴んだグローブを、スポーツバッグの中にしまった。

どうして俺は、こう優柔不断なんだろう。

一度固めたはずの気持ちが、簡単に揺らいでしまう。やると決めた事を、やり通せない。

登校中に、佑介や英治と話をしていた時も、練習中も「今は、最後の大会に向けて、部活に集中する」と、心に決めていたはずだった。それなのに、帰宅して自室に一人でいると、どうしても昨日の事を思い出してしまう。昨日もこうして、ベッドで一人キャッチボールをしながら、父を説得する事を考えていた。ずっと悩んでいたけど、仲間たちにも後押しされて、勇気を振り絞って、父に、自分の気持ちをぶつけた。しかし、その気持ちは、父に受け入れられなかった。

父の、傲慢さを、鈍さを、視野の狭さを、心の底から憎んだ。許せなかった。だけど、今自分が、この鬱屈とした気持ちから抜け出せずにいるのは、全て父のせいにできるものだろうか。やはり、も

っと自分自身が強い気持ちで、父に立ち向かっていたら、こんな事には、ならなかったのではないか。
昨夜、父を説得しようとする誠の気持ちが、最後の最後にぐらつかせたのは、母の悲しげな表情だった。自分の夫と息子が、大声を出して口論をしていれば、心配にもなるだろう。だけど、そこで引いてしまった事は、果たして正しい判断だったのだろうか。
あの時「母をこれ以上悲しませない為に、これ以上父と言い争うのはよそう」と、誠は思った。だけどそれは自分の本心だっただろうか。自分が、父を説得できなかった事を、「母の為に」と言う方向に摩り替える事で、母のせいにする事で、逃げていたのではないだろうか。母を悲しませたくなかったという気持ちは、決して嘘ではない。だけど、その気持ちは、東商への思いを断ち切るほど、強いものだっただろうか。自分自身に、問いただす。
否定は、出来なかった。「母の為に、自分は気持ち緒抑えたんだ」と、自分に言い聞かせる事で、父を説得でいなかった自分の弱さから、目を逸らしていたのだ。
誠は昨夜、母に「父と二人だけで話しがたい」と言って、美奈子には、席を外してもらっていた。母が話し合いの場にいる事で、自分の気持ちを抑えてしまうかもしれない、自分の気持ちを伝えきれない事があるかもしれない、という不安があったのだ。結果的には、美奈子は耐え切れずに、二人の間に介入し、誠の気持ちは揺らいだ。
あの時、母が話に入って来なければ、父を説得出来たかも知れない。自分が、父を説得できなかったのは、母のせいだ。そんなふうに思ってしまう気持ちが、心のどこかにあった。
俺は、自分の弱さを、母さんのせいにして誤魔化す為に、あそこであえて、父とこれ以上議論する事をやめたのか？
父だけでなく、母にまで責任転嫁をして、自分の弱さから目を背けている。そんな自分が、心底嫌になった。
もう嫌だ。こんな自分が、情けない。自己嫌悪から逃れるように、誠は部屋の明かりを消し、布団を頭からかぶって眠ろうとした。そ

れでも、その日はなかなか寝付けなかった。

24

誠が、眠れぬ夜を幾度か過ごした後の、大会前最後の練習日。東尾中野球部は、レギュラーチーム対控え選手チームの、紅白戦を行い、レギュラーチームの誠は、定位置となっている、一番ショートで出場した。

初戦の対戦相手、旭ヶ谷中はそれほど前評判の高いチームではない。過去の実績においても、東尾中より明らかに劣る。勿論、大事な初戦であることに変わりはないが、よほどの事がない限り、取りこぼしは無いだろう。誠も、そう思っている。

油断大敵と言うが、誠は性格的に、自分を追い込むより、少し気持ちに余裕を持たせるほうが、結果を出せるタイプである。だから誠は今「初戦は問題なし」と考えている自分の精神状態を、良い兆候であると捉えている。事実、英治の球を、ことごとく捕らえ、佑介の打球をダイビングキャッチしたあの日以降も、誠は好調を維持している。

進路の事で、気持ちにゆとりが無い日々が続いているが、部活の時間が始まってしまえば、ボールを追いかけているうちに、自然と憂鬱な気持ちは影を潜め、野球だけに集中する事が出来ていた。

一回の表、最初のバッターが、誠の正面にゴロを打った。やや強めの打球。誠は、軽快なフットワークでボールに駆け寄りながらも、バッターランナーも視界の端に捕らえ、ある程度余裕を持って、刺せる、と判断した。

腰をしっかりと落として、丁寧に、包み込むようなイメージで、捕球する。一塁方向に視線を移すと、ファーストの佑介もすでに、一塁キャンバスに右足を掛けて、ミットをこちらに向けて開も　佑介のミットだけに、資格を集中させ、ボールを投げ込む。ボールがミットに収まる。ややあって、バッターランナーが一塁塁上を駆け抜け、悔しそうに天を仰いだ。

英治は続く二人も凡退させ、控えチームの攻撃は三人でこの回を終えたが、誠が打球を処理したのは、その一度だけだった。どちらかと言えば、打撃よりも守備のほうが好きな誠にとっては、やや物足りなかったが、それでも、初回の先頭打者の打球が、自分への比較的イージーなゴロだった事は、幸運だった。

公式戦でも練習試合でも、身内での紅白戦でも、一度ゴロを処理してアウトにするまでは、少し落ち着かない気持ちがある。フライやライナーでも、ひとつ処理する事で、落ち着けることに変わりはないのだが、捕球するだけでアウトになるフライやライナーよりも、捕球と送球が必要なゴロの処理のほうが、自分のその日の状態を、より多角的に判断できるし、何より誠自身、ゴロを捌くことが好きなのだ。

バウンドするボールを追って、捕球して、グローブからボールを持ち替えて、送球する。その一連の動作を行うことで、自分の状態を確認するだけでなく、自分が試合に参加していると言う事を実感し、より深くゲームに深くのめりこめるのだ。

今日も、状態はよさそうだ。

ベンチへ引き上げた誠は、バットを持ってネクストバッターズサークルに入り、控えチームの先発投手の投球に目を凝らした。今年の春に入部したばかりの一年生、渡辺章吾だ。制球力や、ランナーを背負っての投球など、技術面はまだまだ粗削りだが、小柄な体格の割りに球速があり、マウンド度胸もなかなかのもので、青木からも「将来のエース候補」と、呼ばれている男だ。

まだ小学生の面影が抜け切っていない、あどけない顔立ちだが、鋭く吊り上った目と、ややへの字気味に結ばれた口が、レギュラーチームを打席に迎え入れても気後れのしない、負けん気の強い性格を良く現している。そのギャップが、なんとも可愛い。実際渡辺は、マウンド上のふてぶてしさとは裏腹に、普段はどちらかと言えば大人しく、先輩達に対しても礼儀正しい為、誠も含め、上級生達から可愛がられていた。

そういえば、俺も小松先輩によく可愛がってもらったっけ。あの頃から、もう二年も経ったのか。

自分よりも、二年分多く未来がある後輩を、少し羨ましいと思った。でも、自分が後輩だった頃は、自分が持っていない、先輩達の過去を羨ましく思っていた事を思い出し、誠はほんの少し、自嘲気味に笑った。

渡辺の投球練習が終わり、誠は左バッターボックス入った。いつものように、入念に足場を鳴らしてから、バットを肩に乗せて背筋を伸ばし、マウンド上のピッチャーに顔を向ける。自分でも気づかぬほど、自然に身についたルーティンワークだ。

マウンド上の渡辺と、目が合う。誠は構えに入りながら、後輩達がまだ持っていない、自分の二年分の過去を、後輩達はどんなふうに思っているのだろう、などと考えていたが、構えを作り終えた頃には、全神経をマウンド上の投手のピッチングだけに集中させていた。

25

渡辺の球は、速いとは言っても、英治と比べれば劣る。技術面に関しては、比べるべくまでもない。荒れ球な分、英治よりも的を絞りにくいが、力んでカウントを悪くすると、置きに来る癖があるので、それを狙えば、攻略はさほど難しくない。

渡辺が、ワインドアップモーションから一球目を投じた。外角高めに大きく外れ、ワンボール。二球目も、ホームベース手前でワンバウンドする完全なボール球でツーボール。二年生のキャッチャー佐川龍平が、小刻みに肩をすくめるようなジェスチャーを交えながら、渡辺に「落ち着け」と、呼びかける。

誠は、次の一球を狙っていた。ノースリーになる前に、ストライクを欲しがって、置きに来ると読んだのだ。

その三球目。渡辺は誠の読み通りに、少し縮こまったフォームで置きに来たが、それでもボールは高めに浮いて、ストライクゾーンから大きく外れた。マウンド上で渡辺が、唇を噛み締める。これでカウントはノースリー。セオリーなら、次の一球は『待て』の場面だ。だが、そんな消極的な気持ちに、喝を入れるかのように、自軍ベンチから佑介の声が飛んできた。

「誠、甘く入って来たら打っていいぞ！」

佑介の言葉に、誠も頷く。

そうだ、後輩相手に受け身になってどうする。ノースリーだから手を出しては来ないだろうだなんて、甘い考えで置きに来ようものなら、それを狙い打ちにしてやるくらいの積極性が、今の自分達には必要なのだ。

誠は、集中力をもう一段階高めてバットを構え、マウンド上の渡辺に目をやった。渡辺は、少し追い詰められたような、緊迫した表情になってはいるが、眼光はまだ衰えてはいない。先頭打者、それも部内屈指の快足を誇る誠をフォアボールで塁に出せば、大事な

初回に先制点を献上する事に直結しかねない。それに、何より、先頭打者をフォアボールで出塁させる事は、ピッチャーにとって、この上ない屈辱である。ましてや渡辺は、顧問の青木から、将来のエースと期待されている男だ。気持ちが引き締まるのも、当然だろう。

渡辺が、四球目のモーションに入った。置きに来る気配など、微塵も感じさせない、小さな体を目一杯使った躍動感溢れるフォームから投げ込まれた渾身のストレートは、ストライクゾーンのど真ん中に構えた佐川のミットへ、一直線に突き刺さった。

「ストライク！」

主審青木の、右手が上がった。

「ナイスボール！」

ボールを捕ったままの姿勢で佐川が叫ぶ。

誠は、バットを出さなかった。正確には、出さなかったのではなく、出せなかったのだ。渡辺は、ここまでの三球、明らかなボール球しか投げられなかった。三球目に至っては、スピードを殺して、置きに来たにも関わらず、ストライクをとれなかったのだ。そんな投手が、ノースリーから全力投球で、ど真ん中に投げ込むなんて。これだから、荒れ球の投手はやりにくい。

誠は、一球毎に投手の配球を深く考察するタイプのバッターだ。だから、渡辺のような、細かく配球を考えるより、力で捩伏せに来る、粗削りなタイプの投手には、そういった「読み」が通用しにくい為、どうにも調子が狂わされてしまう。今の一球が、まさにそうだった。

少々面食らった。だが気圧されるという程のものではない。カウントはワンスリー。まだまだ打者優位の状況である事に、変わりはないのだ。誠とて、伊達に一年時からレギュラーを任されているわけではないのだ。

さて、次はどんな球が来るのか。投手の特徴や、状況から、次の一球を読み当てるべく、思考を巡らせる。

渡辺の持ち球は、真っ直ぐの他には、縦割れのカーブがあるだけ

だったはずだ。四球続けて真っ直ぐを放ったのだから、そろそろカーブが来てもいい頃だ。ただ、真っ直ぐのコントロールさえ覚束ない渡辺に、佐川がワンスリーから、すっぽ抜けやすいカーブを要求するとは考えにくいとも言える。五球連続直球勝負という事も、十分考えられるだろう。確率としては、半々くらいか。

カーブ待ちだと、真っ直ぐには振り遅れるだろうが、少々振り遅れてもレフト前に落とす事ぐらいの自信はあるし、例え打ち損じても、自分の脚力なら、打ち上げさえしなければ内野安打も狙える。逆に真っ直ぐ待ちでカーブに泳がされれば、転がしたとしても内野安打にはなりにくい。

よし、決めた。

真っ直ぐが来る可能性も念頭に置きつつ、カーブを狙う。ただし、カウントはワンスリーなので、際どいコースは見送る。これが一番無難だろう。

その五球目。渡辺が投じたボールは、ポン、と一度浮き上がってから、緩やかな弧を描いて落ちてきた。誠の読み通りのカーブだ。

誠は、ボールの落差に、軸足の膝を折ることでスイングの高さを合わせ、素振りをするような軽さで、バットを振り抜いた。緩いボールは、力任せに引っぱたくよりも、力を抜いてしなやかにバットを振った方が、よく飛ぶ。誠の打球は、右中間を真っ二つに割るツーベースヒットになった。

「ナイスバッティング！」

誠は二塁ベースに片足を乗せたまま、小さくガッツポーズを作って　自分を称える仲間達の声に応えた。

26

二番バッターの翔太は、初球から送りバントを試みたが、胸元を抉るような渡辺の速球に、翔太のバントは失敗し、ネクストバッターズサークルにいる、英治の方へ飛んでいくファールボールとなった。キャッチャーの返球を受け取ってから振り向きざまに、渡辺がちらりとこちｒに視線を向けた。二塁ランナーの自分を睨む様に向けられた目は、依然として鋭い光を放っている。

誠は、以前青木の指示で、紅白戦のマウンドに立った時の事を思い出した。投手の層が薄い事が欠点であるチーム事情から、安定した制球力を買われて、投手としての適正を試された誠は、デッドボールを恐れ、インコースを攻めきれずに自滅し、青木に自ら降板を申し入れたのだった。

自分は、投手には向いてないと思った。悔しくなかったとまでは言わないが、もともと内野手志望だったし、その時は、それほど屈辱を感じることも無かった。だけど、自分の心の弱さに打ちのめされそうな日々を過ごしている今になって、改めて振り返ってみると、あの時悔しさが込み上げてこなかった自分が、情けなく思えてくる。らと言って、危ないボールならバッターだって避けようとするだろうし、デッドボールなんてそう滅多出るものではない。ましてや、自分は制球力を買われて、投手としての適正を試されたのだ。自分でも、コントロールには自信があった。なのに――

なぜ、あんなに消極的になってしまったのだろう。降板した時、何故もっと悔しいと思えなかったのだろう。

野球と言う競技は、ピッチャーがバッターに対して投球することで、初めて試合が動く。バッターは常に、投手に対して受身である。言い換えれば、ピッチャーの投球とは、バッターに対する攻撃なのだ。それだけにピッチャーと言うポジションには、威力のあるボールを投げられる事と、それを狙ったコースへ投げる事のできる制球

力、そして、バッターに対して“攻める”という、強気な姿勢が求められる。
誠の場合、肩はそこそこ強い方だし、制球力ならエースの英治に次ぐ程のものを持っている。ただ、バッターに対して攻撃的な投球をするというメンタリティが、決定的に欠けていた。
「井岡は、優しいからな。ちょっとピッチャーには、向いてなかったかな」
紅白戦終了後、青木にそう言われた。その時は「優しい」と言われた事が、少し嬉しくすら思った。だけど、英治はどうだろう。デッドボールを与えてしまう事は、稀にだが、あった。英治は、普段は優しい良い奴だ。だけど、試合中インコースを攻めきれずに自滅するようなピッチングは、一度も見た事が無い。制球力に自信があると言う事もあるだろう。だけど、誠とて、英治ほどではないにしろ、制球力は高い方だ。英治がデッドボールを与える確率と、誠がデッドボールを与える確率に、そう大きな差は無いだろう。なのに、両者の投手としての資質の差は明白だ。その差は何か。
やはり、それはメンタリティの差なのだろう。誠が不安になって手元が狂ってしまうようなコースへも、英治は平常心で思い切り投げ込める度胸がある。小さな差のようだが、それは投手として、致命的な差だった。
投手と言うポジションに、未練は無かった。ただ、投手失格の烙印を押された最大の理由が、自分の心の弱さであったことを、渡辺の姿を見て、改めて実感させられたのだ。
マウンド上の小さな体が、少し眩しく見えた。少し嫉妬もした。そんな自分が、凄く惨めだった。

27

二番バッターの翔太は、初球から送りバントを試みたが、胸元を抉るような渡辺の速球に、翔太のバントは失敗し、ネクストバッターズサークルにいる、英治の方へ飛んでいくファールボールとなった。キャッチャーの返球を受け取ってから振り向きざまに、渡辺がちらりとこちｒに視線を向けた。二塁ランナーの自分を睨む様に向けられた目は、依然として鋭い光を放っている。

誠は、以前青木の指示で、紅白戦のマウンドに立った時の事を思い出した。投手の層が薄い事が欠点であるチーム事情から、安定した制球力を買われて、投手としての適正を試された誠は、デッドボールを恐れ、インコースを攻めきれずに自滅し、青木に自ら降板を申し入れたのだった。

自分は、投手には向いてないと思った。悔しくなかったとまでは言わないが、もともと内野手志望だったし、その時は、それほど屈辱を感じることも無かった。だけど、自分の心の弱さに打ちのめされそうな日々を過ごしている今になって、改めて振り返ってみると、あの時悔しさが込み上げてこなかった自分が、情けなく思えてくる。らと言って、危ないボールならバッターだって避けようとするだろうし、デッドボールなんてそう滅多出るものではない。ましてや、自分は制球力を買われて、投手としての適正を試されたのだ。自分でも、コントロールには自信があった。なのに――

なぜ、あんなに消極的になってしまったのだろう。降板した時、何故もっと悔しいと思えなかったのだろう。

野球と言う競技は、ピッチャーがバッターに対して投球することで、初めて試合が動く。バッターは常に、投手に対して受身である。言い換えれば、ピッチャーの投球とは、バッターに対する攻撃なのだ。それだけにピッチャーと言うポジションには、威力のあるボールを投げられる事と、それを狙ったコースへ投げる事のできる制球

力、そして、バッターに対して“攻める”という、強気な姿勢が求められる。
誠の場合、肩はそこそこ強い方だし、制球力ならエースの英治に次ぐ程のものを持っている。ただ、バッターに対して攻撃的な投球をするというメンタリティが、決定的に欠けていた。
「井岡は、優しいからな。ちょっとピッチャーには、向いてなかったかな」
紅白戦終了後、青木にそう言われた。その時は「優しい」と言われた事が、少し嬉しくすら思った。だけど、英治はどうだろう。デッドボールを与えてしまう事は、稀にだが、あった。英治は、普段は優しい良い奴だ。だけど、試合中インコースを攻めきれずに自滅するようなピッチングは、一度も見た事が無い。制球力に自信があると言う事もあるだろう。だけど、誠とて、英治ほどではないにしろ、制球力は高い方だ。英治がデッドボールを与える確率と、誠がデッドボールを与える確率に、そう大きな差は無いだろう。なのに、両者の投手としての資質の差は明白だ。その差は何か。
やはり、それはメンタリティの差なのだろう。誠が不安になって手元が狂ってしまうようなコースへも、英治は平常心で思い切り投げ込める度胸がある。小さな差のようだが、それは投手として、致命的な差だった。
投手と言うポジションに、未練は無かった。ただ、投手失格の烙印を押された最大の理由が、自分の心の弱さであったことを、渡辺の姿を見て、改めて実感させられたのだ。
マウンド上の小さな体が、少し眩しく見えた。少し嫉妬もした。そんな自分が、凄く惨めだった。
二球目も、翔太はバントの構えを見せたが、渡辺の投球は大きく外角へ外れた。翔太は投球の直後にバットを引き、カウントはワンボール・ワンストライク。投球後、勢い余って一塁方向へ体を反転せた渡辺が、顔をしかめる。明らかに力んでいる。力んで体の開き

が早くなっているから、フィニッシュでバランスが崩れるのだ。
ただでさえ制球が不安定な投手だ。相手バッテリーとしては、ボール先行は避けたいはず。逆にこちらとしては、ツーストライクを取られたら、スリーバント失敗の危険がある。次の一球で、翔太に確実にバントを決めてもらいたい。
三球目は、一級目同様翔太の胸元付近に来たが、若干コースが甘い。コン、と音がして、三塁線へ、絶妙に勢いが殺された打球が転がる。二塁ランナーの誠が、スタートを切る。サードのダッシュがわずかに遅れた。ライン際で、殆ど止まりかけた打球を、マウンドから素早く駆け下りた渡辺が拾い上げるのとほぼ同時に、誠が三塁へ滑り込む。それを見て、渡辺が身を翻し一塁へ送球する。矢のような送球だった。翔太も懸命に走ったが、後半歩及ばずアウト。
立ち上がって、ユニホームについた土を払っていると、控え選手チームのサードを守る加藤義彦が言った。
「さっき、カーブ狙ってたの？」
「うん。さすがに、五球連続真っ直ぐはないかなって思ったし」
「なるほどね」
加藤は部内で最も背が高く、中学生にして身長は１８０センチに達していた。どちらかと言えば小柄な誠は、加藤と話すときは、少し見上げるような格好になる。加藤はミートが上手く、二年次から代打でよく起用されていたが、守備がどうにも苦手で、ついに三年間レギュラーにはなれなかった男だ。特に今のようなボテボテのゴロの処理に、もたつく事が多かった。
ワンアウト三塁。ヒットはおろか、内野ゴロや外野フライでも一転を狙える状況だ。しかも打順はここからクリーンアップを迎える。右打席に入った英治の顔は、エースではなく、三番バッターの顔になっている。ネクストバッターズサークルで、片膝をついて待ち構えている佑介も、真剣な眼差しで、マウンド上の渡辺を凝視している。
そうだ。格下の控え選手チームを相手に、攻めあぐねているよう

では、公式戦で結果を出せるはずは無い。相手が、一年生投手であろうと、容赦はしない。この回でマウンドから引き摺り下ろすくらいのつもりで、一気に攻め立ててやればいい。
佐川の指示で、控え選手チームは野手を前進させ、バックホーム体勢の布陣を敷いてきた。サードの加藤も、ランナーの誠そっちのけで前に歩み出た。
チーム一の俊足ランナーであるこの俺を、ホームで刺す気か。舐められたもんだな。いや、これは、貴重な先制点を、なんとしても献上すまいとする、相手の闘志の表れなのだろう。ならば、レギュラーチームとしては、受けて立たないわけにはいかない。
誠は、大きめにリードを取った。右投げの渡辺は、セットポジションに入ると三塁ランナーと正対する格好になる。当然三塁ランナーの動きは丸見えだ。だがそれは、誠にも言える事。セットポジションに入った右投手の動きが、最も見やすいのは、三塁からだ。ましてや今は、三塁手がベースから離れているのだ。
さすがにホームスチールを狙うような状況ではないが、それでも少しでもピッチャーにプレッシャーを掛けて、意識をこちらへ散らせれば、打者に対する集中力を削ぐ事が出来る。それが、リードオフマンである自分の仕事だ。
セットポジションに入った渡辺の左足が上がり、右腕が広報へ引き絞られるのを見て、誠ホームへ向かって数歩だけダッシュした。キャッチャーの佐川が腰を浮かせて半身で捕球し、こちらを向いて送球動作に入ったが、誠はその頃にはすでに帰塁している。投球の判定はボール。アウトローのきわどいコースだったが、わずかに低かった。
ホームスチールなど、狙ってはいない。だが、少しでも後ろへ逸らそうものなら、躊躇無くホームへ突っ込む。そういう姿勢を見せておく事で、キャッチャーに対してもプレッシャーを掛ける。
英治に対しての二球目。明らかに投げ急いで手投げになっている。おまけに一球外しているものだから、ボールもつい甘いコースに言

ってしまう。それを見逃す英治ではない。
鋭い金属音が鳴り響き、打球が全身守備の三遊間を襲った。誰もがレフト前への先生タイムリーじっとと確信した当たりに、加藤が横っ飛びで飛びつく。グローブの先に、かろうじてボールが収まっている。ホームへ向かってスタートを切りかけた誠は、とっさに身を翻して三塁ベースへ滑り込む。
元の守備位置に戻ってきた加藤に、声を掛けた。
「ナイスキャッチ」
加藤が、にやりとしながら答えた。
「俺なら捕れないとでも思ってたか？」
「そういうわけじゃないけど、でもちょっとびっくりしたかな」
正直、野手の守備力と打球の速さから、捕球できるかどうかを判断している時間的余裕はななかった。
それにしても危なかった。もう少しで、ダブルプレーを取られる所だった。ワンアウト満塁のチャンスが、一気にスリーアウトチェンジになってしまう所だった。
ツーアウト三塁。せめて一点取らなくては、レギュラーの面目が立たない。
「佑介！頼むぞ！」
打席に入った佑介に、声援を送る。ちらりとこちらを向いた佑介が小さく頷いて、ゆっくりと右打席に入った。

28

佑介への初球。渡辺が投じたのはカーブだった。少々高めに抜けたが、佑介はこれを見送り、ストライク。先制点のチャンス、打ち気にはやる四番打者に、初球から直球勝負は危険だと判断した、佐川の考えだろう。

二球目、低めの真っ直ぐに、佑介が反応した。しかし先ほどのカーブの残像があったのか、タイミングが遅れ、打球は一塁ファールグラウンドへ転がった。口元をゆがめて、佑介が悔しがる。

四番の佑介を、ツー・ナッシングに追い込んだ。セオリーなら、次は一球外してくるだろうが、佐川が制球難の渡辺にあえてボール球を要求するかは疑問だ。

その三球目。胸元を抉る速球。佑介が、腰を引かせて小さく後ろへ飛び退くほど際どいボールだったが、渡辺は平然として佐川に返球を催促するように、グローブを慌しく開閉する。

思いの他強気なバッテリーに、誠も気持ちを引き締めた。ここまで、どこかで相手を格下と見て、見下している部分があったのかもしれない。実際、チームの自力は、自分たちのほうが明らかに上だろう。だけど、相手だって、やるからには負けるつもりなど無いはずだ。渡辺の強気な投球と、それを引き出す佐川のリード。そして、加藤のダイビングキャッチ。まだ一回の表だと言うのに、相手はこれほど気迫溢れるプレイを見せている。相手を格下と見くびっている強豪が、反骨精神に燃える弱小チームに足元をすくわれる。そんな場面は、何度も目にしてきた。一発勝負のトーナメントでは、そんなわずかな気持ちの綻びが、命取りになるのだ。

俺なら、捕れないとでも思ったか？

少し自虐交じりだけど、確かなプライドを覗かせた、加藤の言葉

を思い出した。少し、相手の気迫に飲まれそうになった自分がいることを知り、弱気になりかけた自分に発破をかける。
負けたくない。もう、自分の心の弱さに打ちのめされるのは沢山だ。実力からすれば、俺達がまけるはずは無いんだ。チームメイトといっても、チーム内ではポジション争いをしてきた、競争相手でもあるのだ。遠慮なんかするな。どちらが上なのか、はっきりさせてやれ。足りない技術を、向こうが気持ちで乗り越えようとするのなら、気持ちの面でも相手を圧倒してやればいい。
誠は、半ば自分に言い聞かせるように叫んだ。
「佑介、遠慮すんな！思いっきりぶちかましてやれ！」
「おう！」
視線は渡辺に向けたまま、佑介が答える。
佑介への四球目。渡辺も開き直ったのか、ワインドアップからの投球だった。投じたのは、勿論、渾身のストレート。コースはど真ん中だ。佑介の腰が鋭く回転し、大きく振り抜いたバットが快音を響かせる。
高々と舞い上がった打球は、あっという間に外野手の頭上を越えて、さらにその向こう側にある金網の、遥か彼方へと消えて行った。

29

初回に佑介の先制ツーランを浴びた渡辺は、二回と三回にも、それぞれ一点ずつ失い、三回限りで降板した。二番手でマウンドに上がったのは、二年生の左腕、下山昌治で、この日が投手デビューだった。スピードは渡辺に劣るが、大きく曲がるスローカーブでタイミングを外す、緩急をつけたピッチングは、同じ持ち球でも渡辺とはまるで異質で、四回のレギュラーチームは、三者凡退に抑えられた。しかし、次の回には下山を捕まえ、一気に三点を追加。時間の都合で、紅白戦はここまでとなり、五回の裏を行うことなく終了。控え選手チームは、英治の前にわずかに安打に封じられ、二塁を踏むことすらかなわなかった。終わってみれば、８対０で、レギュラーチームの圧勝に終わった。

明日の土曜はオフ日。明後日の日曜日が、いよいよ一回戦だ。

帰宅して、床に就いた誠は、最後の公式戦を目前に控えて、東尾中野球部で過ごした三年間を振り返った。

二学年先輩の辰弥に憧れ、必死に背中を追いかけていた二年前。その辰弥達が抜け、チームの主力として期待されながらも、結果を出せなかった、去年。そして、野球への熱意と、それを全うできないかもしれないと言う不安に悩み続けながらも、最上級生として、チームを引っ張ってきた今年。

楽しい事ばかりではなく、辛い事もあった。だけど、辞めたいと思った事は、一度もなかった。誠は、東尾中野球部が、心底好きだった。では、仲間達は、どうだったのだろう。懸命な努力も報われる事なく、野球を続ける事を諦めてしまった隆や、三年間代打要員で終わってしまった加藤。退部した隆はともかく、加藤ら三年生の控え選手達は、この最後の公式戦を、どのような気持ちで迎えようとしているのだろう。一年からレギュラーとして試合に出ていた誠達や、自分達を差し置いてレギュラーになっている後輩を、どんな

目で見ていたのだろう。そういえば、加藤は以前、高校では野球部には入らないと言っていた。もし、東尾中でレギュラーになれていたら、加藤は高校でも野球を続けようとしただろうか。

誠自身、先輩達を差し置いて自分が試合に出ていた事は、彼らに対して申し訳ないという気持ちがあった。だからこそ、試合で恥ずかしいプレイは出来ないと思い、必死に練習に取り組んだ。チームの誰よりも、熱心に練習に取り組んで来たと思っている。その積み重ねが、西崎からスカウトに繋がったのだ。

だけど、隆のように懸命な努力が、結果に繋がらなかった者もいる。加藤だって、守備練習の時は、傍目にもわかるほど真剣な目つきで取り組んでいたのだ。それでも、最後まで加藤はレギュラーにはなれなかった。

努力が必ず報われるなんて言葉を信じるほど、現実を知らないわけじゃない。そんなものはただの安っぽい詭弁だ。

自分が、三年間努力し続ける事ができたのは、その努力が、それなりに報われてきたからだ。それに、誠は野球を始めた時から、打撃も守備も走塁も、ある程度なんでもこなせていた。もともと、基本的に運動神経が良かったのだ。それは、誠が努力して手に入れたものではない。先天的に、自分に備わっていたものだ。その“授かり物”があったからこそ、誠は努力できたのだ。

もし、生まれつき運動が苦手で、努力も報われず、三年間控え選手のままだったとしても、同じように熱心に野球に取り組むことが出来ただろうか。自分のような心の弱い人間に、そんなことが出来ただろうか。おそらく、いやきっと出来なかっただろう。自分の努力も、熱意も、持って生まれた素質あってこそのものなのだ。それだけは忘れてはならない。

今度の大会も、おそらくいつもどおり、一番・ショートでスタメン出場する事になるだろう。レギュラーに選ばれると言う事は、チームを代表して、チームの看板を背負って、試合に出ると言う事だ。出たくても出られない選手のほうが多い中で、試合に出させて貰う

以上、彼らを納得させられるプレーをしなければならない。「俺達を差し置いて試合に出てる奴が、あんなに下手くそなのか」なんて、思わせてしまっては、彼らに合わせる顔が無い。

東商で野球が出来るかどうかなんて、今は関係ない。今はただ、東尾中野球部の一員として、東尾中野球部の為に、仲間達の為に、ベストを尽くそう。

そう心に決めて、誠は静かに目を閉じた。

30

誠が目を閉じた直後、机の上で充電中の携帯電話が鳴った。マナーモードになってはいるが、バイブレーターの振動が音を立てている。ベッドから出て、携帯を手に取りディスプレイを開く。消灯された部屋の中で無機質な光を放つディスプレイには、佑介の名が表示されていた。通話ボタンを押して、携帯を耳に当てがう。

「もしもし」

「もしもし、誠？俺だけど、もしかしてもう寝てた？」

「ん、まあ、そろそろ寝ようかなってタイミングではあったけど」

「そっか、ごめんごめん。あのさ、明日なんだけど、部活休みじゃん？お前空いてる？」

明日は、大会前のラストスパートでたまった疲労を癒すべく、ゆっくりと休養を取るつもりだったので、何も予定は入れていない。

「うん、空いてるけど」

「じゃあさ、明日二人でキャッチボールしようぜ。小学生のときいつもやってた公園でさ」

「佑介と、二人だけ？」

「そう、お前と俺、二人だけ」

断るつもりは全く無かったが、ほんの少し、考えた。最後の大会を目前に控えたこのタイミングで、佑介が自分と二人だけでキャッチボールをしようとい誘ってくるという事の意味を。

「いいよ。何時から」

佑介の意図を測りかねながらも、誠はその誘いを受けようと思った。きっと、明日ボールを投げ交わしている時に、それがわかると思った。

「十時でどう？そんで、昼前に解散して、午後はゆっくり休もうぜ」

「ＯＫ、十時な」

「おう、じゃ、よろしくな」

携帯の電源ボタンを押して、通話を切った。折り畳んだ携帯を元の場所に置いて、ベッドに戻る。

通話を切る時に、それとなくディスプレイのデジタル時計で確認した時間は、わずかではあるが十二時を回っていた。佑介が、何を思ってこんな時間に誘ってきたのか、やはり少し気になったが、目を閉じるとすぐに眠気が襲ってきた。誠はいつも、日付が変わる前には眠りにつく習慣をつけているのだ。

規則正しい生活って、やっぱりしとくもんだな。

そんな事を思いながら、誠は眠りに落ちて言った。

31

翌朝、待ち合わせの時間より十分ほど早く、誠は公園に着いた。辺りを少し見回したが、佑介は、まだ来ていないようだった。誠はベンチに腰掛けて、佑介の到着を待った。

公園には、すでに犬の散歩をしている老人や、砂場で遊んでいる子供とその母親と思しき女性など、すでに先客がいて、気温が上昇しきる前の夏の朝を、穏やかに彩っていた。

砂場で泥だらけになって遊んでいる小さな男の子を見て、誠は自分もかつて、美奈子に連れられて、同じように泥だらけになって遊んでいた事を思い出した。それから何年か後に、小学校に上がって、野球と出会い、佑介と出会い、チームの練習が無い日は、ここでよく雄介たちとキャッチボールをした。だけど、中学に上がってからは、練習量が増えた事もあって、ここへ来る事は殆ど無かった。ここへ来るのは、本当に久しぶりだった。

「誠」

佑介の声がした。声の聞こえた方へ振り向くと、佑介が小走りにこちらに近づいてきた。

「悪いな、遅くに電話しちゃってさ。でもなんか、久しぶりにここでお前とキャッチボールしたくなっちゃってさ」

「随分、久しぶりだよな、ここでやるの」

「ああ」

そう言って、屈伸運動を始めた。誠も立ち上がり、軽くストレッチをする。

「そろそろやろうぜ」

準備運動を始めて、数分ほど経った頃、佑介が言った。

「ああ」

誠も頷く。

佑介が、数メートル程距離をとってこちらに向き直り、左手のミ

ットを軽く上げた。その合図に、誠は軽く頷き、緩やかなフォームで、一球目を投げた。佑介が、ミットに収まったボールを右手に持ち替え、やはりゆったりとしたフォームで投げ返す。

肩が温まるのに合わせ、徐々に距離を広げ、しっかりと体重を乗せたボールを投げ込んでゆく。ただし、明日のことを考えて、お互い全力投球はしない。特に事前にそう打ち合わせたわけではないが、こと野球に関しては、言葉にしなくてもある程度気持ちが通じる程に、この男とは長く、そして濃密な時間を共に過ごしてきたのだと、改めて感じる。

なにか言いたい事があって、誘ったんじゃないのか。

佑介に、そう聞いてみたい。だけど、できれば佑介から、切り出してくるのを待っていたい。

「ヘイ、ショート！」

佑介が、不意にゴロを投げてきた。誠はこれを軽快に捌き、いつもの様に一塁へ送球する要領で、佑介へ投げ返す。

「もう一丁！」

今度はボテボテのゴロだ。ダッシュして地面の砂ごと拾い上げるようにして掬い上げ、そのままグラブトスで佑介に返す。そのまま小走りに、“守備位置”まで戻る。

「よし、来い！」

腰を落として、グローブを拳でひとつ叩く。自然に笑みがこぼれてくる。佑介も笑っている。楽しい。試合でも、部の練習でもない。公園で佑介と二人で、ただボールを追いかけているだけ。たったそれだけのことが、こんなにも楽しい。

誠は、夢中になって佑介が投げるボールを捌いては投げ、投げてはまた捌いた。

そういえば、小学生の頃はここでいつもこんなふうに、佑介と二人で、暗くなるまでキャッチボールをしてたっけ。

「ラスト！」

最後の一球を捌き、佑介が返球をしっかりと受け止めたのを見届

けて、誠はふうっ、と息をついて、天を仰いだ。
「こんなもんにしとこうか」
佑介の声に、誠は無言で頷いた。
「なんか飲み物買ってくるよ。付き合ってもらったから奢るぜ。何がいい？」
「じゃあ、なんか、スポーツドリンク的なやつ」
「ＯＫ」
そう言って、佑介は公園の入り口のそばにある、自販機の方へ歩いて行った。

32

「ほい、お待たせ」
ベンチに座って待っているいる誠の所へ、佑介が戻ってきて、スポーツドリンクの缶を誠に差し出した。
「ありがとう」
手のひらに伝わる、缶の冷たさが心地よく、一度間を両手で握り締めてから、開封し一気に半分ほど飲み干した。
額から汗が噴き出し、心地よい疲労を全身に感じた。
「いよいよ、明日からだな」
誠の隣に腰を下ろしながら、佑介が言った。
「うん」
誠が答える。お互いに、視線は合わせない。
「あのさ」
佑介が、何か言いかけた。
「うん？」
「うーん……なんて言ったらいいのかな」
なんとなく、佑介が何の話をしようとしてるのか、何の為に、ここに自分を呼び出したのか、わかるような気がしていた。
「東商の事？」
切り出しづらいのはお互い様だし。黙って佑介が切り出すのを待ってるだけじゃ、申し訳ないような気がして、こちらから切り出した。
「うん、あの、お前にはお前の事情があって、俺がこんな風に口出しするような事じゃないのかもしれないけど、でも、やっぱり、なんていうか、ずっと一緒ににやってきたし、俺は、東商でもお前と一緒に野球したいんだよ。でも、その……」
佑介はそこまで言って、言葉に詰まってしまったのを誤魔化すように、ひとつ大きく息を吸ってから、再び口を開いた。

「誠は、俺と違って頭も言いし、そういう意味で考えたら、その、東商には行かせたくないっていう、おじさんの気持ちもわかるような気がするし、お前にとっても、長い目で見たらその方がいいのかもしれないから、もし、お前が、そんな事、思ってないのかもしれないけど、もし、そうなっちゃったら、お前と野球するのも、中学が最後になるから、だから、その、なんて言ったらいいんだろう……」

そこまで言って、佑介はまた言葉に詰まってしまった。開いた膝の上に肘を乗せて、うなだれるような姿勢になっている。

「もういいよ、そんなに無理しなくても」

途切れ途切れで、たどたどしい言葉だけれど、懸命に胸の内を伝えようとしてくれている。どんなに歯切れの良い理路整然とした言葉よりも、真摯な想いが伝わってくる。

「なんとなくだけど、佑介が言いたいこと、よくわかった気がする。ありがとう」

ここまで、自分の事を想ってくれる友達がいる。今は、ただそれだけで良い。その気持ちだけで、凄く嬉しい。

「俺の進路がどうなるにしろ、俺達が東尾中の野球部の仲間と試合するのは、今回が最後だ。中学生活の最後に、悔いの残らない試合をしようぜ」

「ああ、なんか、わるかったな、ごちゃごちゃ余計な事ばっかり言って、大事な時なのに」

佑介は、本当に申し訳なさそうに言った。

「なんで、謝るんだよ。そこまで自分の子と考えてくれてる奴がいるんだ、って思って、嬉しかったよ、ほんとに。ほんと、ありがとな」

「うん」

誠は、ポケットから携帯電話を取り出して、時間を確かめた。

「もう十一時半か、そろそろ帰ろうか」

「ああ、せめて午後ぐらいは、明日のために体休めとか無きゃな」

公園を出たところで、別れの言葉を交わして佑介と別れ、誠は家路に着いた。

33

帰宅した誠は、シャワーを浴びてから昼食を摂り、自室のベッドで横になっていた。とはいえ、まだ昼の一時を少し過ぎたばかりである。何をするでもなく、何度かごろごろと寝返りを打った後、本棚から高校野球の雑誌を取り出し、ぱらぱらとページをめくった。表紙に書かれた東尾商業の文字が目に入り、迷わず購入したものだ。

辰弥が記事に乗っているかもしれない。そう思って雑誌を購入した誠だったが、記事になっていたのは、今年東商野球部に入学した期待の一年生大谷孝介の特集だった。それでも誠は、迷わずその雑誌を、書店のレジカウンターに持っていった。

大谷の名は、その雑誌を購入する前から、誠も知っていた。一年生にして、東商の四番を任された男として、市内の野球ファンの間では、すでに有名な存在だった。

高校球児のお約束である坊主頭。よく日に焼けた顔には、太い眉毛と鋭い光を放つ双眸と太い鼻筋。肩幅が広く胸板の厚い、がっしりとした体。プロフィールには、身長百八十一センチ、体重八十四キロとある。すでにプロ並みの体格である。

小学生の頃から硬式野球をしており、強打者としては勿論、投手としても、高校一年の現時点ですでに百四十キロに達する速球を投げているという。東商では、四番ライトでスタメン出場し、終盤にリリーフ投手としてマウンドに上がる、と言う起用法が定着しているそうで、雑誌には、大谷インタビューに応じる姿や、バッティングフォームとピッチングフォームの連続写真が掲載されている。その脇に評論家の解説が書かれており、その解説によると強靭な背筋とリストが、最大の持ち味であり、将来的には打者としてのほうが期待値が高いが、投手としての可能性も捨てがたい、とのことである。

バッティングのスウィングも、ピッチングの腕の振りも、大きな

フォロースルーが印象的で、まだ実際に大谷のプレーを見たことは無い誠でも、そのダイナミックなプレースタイルは、容易に想像できた。

インタビュー記事には、『古豪復活の鍵を握る超新星・父と二人三脚で追い続けた夢』という見出しの後に、大学野球で活躍しプロ入りを嘱望されながらも、怪我でプロ入りを断念した父に、幼い頃から野球の厳しい指導を受けてきた事、将来はプロ入りは勿論、メジャーリーグへの挑戦も視野に入れている事などが書かれている。その中に、誠にとって、どうしても気になるコメントがあった。

「自分のプロ入りは、父と自分との二人分の夢です。でも、僕は父に為に野球をしているという意識はありません。父の影響で野球を始めたのは事実だけど、自分はあくまで、自分がプロになりたいから野球をやっています。勿論、それを誰よりも応援して支えてくれてきた父には本当に感謝していますし、父が自分のプロ入りを喜んでくれれば、僕も嬉しいですけど。気が早いかも知れないけど、プロになったら契約金は全部父にあげようと思っています」

これだ。

自分と義秀の間にある最大の障壁は、これなのだ。

雑誌を閉じて本棚に戻し、誠はまた一人キャッチボールをしながら考えた。

井岡誠と大谷孝介。二人の少年が、いずれも“父が示す道”を歩んでいる事に違いは無い。だが誠が、自分の意思とは無関係に、父が示す道を歩まされているのに対し、大谷は自分自身もそれを望んで歩んでいるという所に、決定的な違いがある。

誠自身が思い描く“自分は将来こうなりたい”というビジョンと、義秀が思い描く“誠に将来こうあって欲しい”というビジョンは違う。だから今、井岡父子の間には大きな溝ができてしまっている。でも、大谷親子の場合は、それが一致している。同じ夢を追い求めて、共に歩み続けてきた大谷父子は、硬く強い絆で結ばれている。

そこでまた、誠は木田の事を思い出した。大谷と同じく、父に厳

しい野球の指導を受けていた木田。でも木田自身の気持ちと、木田の父の気持ちには大きな隔たりがあり、誰も望まぬ最悪の結末を迎えてしまった。

木田の父も、息子が憎くて厳しい野球の指導をしていたわけではなかったのだろう。木田の父も、自分なりに、野球をさせることが息子にとってプラスになると思って、したことだったのだとは思う。

義秀は、どうだろう。自分が憎くて、自分から野球を取り上げようとしているのだろうか。それはきっと違うだろう。義秀が、自分に厳しく勉強をさせていたのは、それが誠の為だと思っているからだ。それは、誠自身もわかっているつもりだ。

でも、父さん。俺、勉強だけが全てじゃないと思うんだ。他の事何もかも犠牲にして勉強したって、きっと楽しい人生なんか待ってないと思うんだ。それじゃ意味無いだろ。

自分が考えている事は、決して間違ってはいないと思う。でも、父が言う事も、正しくないとは言い切れない。どちらも一理あると思う。ならば、自分が進む道は、自分の意志で決めたい。

やっぱり、俺はどうしても野球を諦めきれない。

明日から始まる大会が、自分の野球人生最後の公式戦だなんて思いたくない。これからも、もっともっと、野球がしたい。その気持ちを、父にわかって欲しい。受け入れて欲しい。でも、その方法がわからない。

誠は苛立ちを振り払うかのように、大きく反動をつけて起き上がった。少し乱暴に扉を開き、部屋を出て、リビングのソファにどさっと座り込む。何か目的があったわけではない。ただもどかしくて、何もせずに入られなかったのだ。その音で気がついたのか、キッチンから美奈子が顔を出した。

「あら、ずっと静かだから、もう寝ちゃったのかと思ってた」

少し困惑気味の声色に、またしても自分の顔がこわばっている事に気づく。

「こんなに早くに寝ちゃったら、へんな時間に目が覚めちゃうよ」

できるだけ軽い声で言おうと思ったが、上手くいえなかった。
「それもそうね」
美奈子が苦笑気味にそう返したが、それ以上会話は続かなかった。
外から微かに聞こえてくる蝉の鳴き声が、気まずい沈黙を際立たせていた。

34

重苦しい沈黙から何とか逃れようと、誠はテレビのリモコンを手にして、電源を入れた。特に見たい番組があるわけではない。ただ、リモコンを握る手を止めていることすらももどかしく、でたらめにチャンネルを切り替える。衛星放送のプロ野球中継の画面が映った所で、ふとリモコンを持つ手が止まった。

誠は、ぼんやりとテレビの画面を眺めていたが、視界の端に、あの時と同じような、悲しげな母の顔が見えて、一瞬チャンネルを変えるか、テレビを消そうかと考えたが、そんな事をすれば余計に母に心配を掛けるだろうと思い、母の表情に気づかぬ振りをしながら、テレビの画面を見つめていた。

テレビ画面に映るプロ野球選手達。厳しい競争を勝ち抜き、狭き門を潜り抜け、さらに厳しい競争の中に身を置いている彼らは、一体どれほど強靭な精神力の持ち主なのだろう。彼らの中には、親に野球を諦めさせられそうになった者はいなかったのだろうか。いたとしたら、どうやって親を説き伏せたのだろう。それとも、彼らは皆、幼少時から圧倒的な能力を発揮していて、親でさえもその将来に夢を託したくなるような、類稀な才能の持ち主だったのだろうか。

いや、そんなことは無いはずだ。プロ野球選手の誰もが、常に野球エリートだったわけではない事は、誠も知っている。高校時代は、控え選手だったような男が、大学で素質を開花させ、一流のプロ選手になった例も、決して珍しくは無い。逆に、プロ入り前に輝かしい実績を残していたものが、プロでは全く日の目を見ることなく、ひっそりと引退していくことだって、よ　才能と努力。何をするにしても、成功するためには不可欠なものだと思う。でも、つい先日にも考えたように、努力ができると言う事にも、少なからず幸運に恵まれた部分が必要になってくることも、また事実だと思う。偶然熱意を注げるものに出会えた者。偶然稀有な資質を持って生まれた

者。それらに巡り会う幸運に恵まれた者だけが、自分の才能を存分に発揮する事ができるのだろう。才能と運。どれも努力だけでは決して手に入らないものだ。ならば、努力する事は不毛な事なのだろうか。才能や運に恵まれていない者は、どんなに努力しても報われないのだろうか。ならば、全ては運次第なのではないだろうか。

そんなの、認めたくない。認めたくないけれど、どこかで認めざるをえない部分があるとも思う。だとしたら、この世はなんて理不尽で、なんて無慈悲で、なんて不条理に満ちているのだろう。

悶々として気持ちで野球中継を見ていたら、いつの間にか試合は終盤に差し掛かっていた。窓の外に映る美しい夕焼けが、どこか物悲しい憂いを帯びているように見えた。

35

テレビで中継されていた、プロ野球の試合が終わり、誠は、またどこか手持ち無沙汰になってしまった。何もしないでいることがじれったくなり、母に声を掛けた。

「晩御飯何？」

「ああ、そのことなんだけど、お父さんが今日は外食にしないかって、さっきメールがあったんだけど、誠、何か食べたいものある？」

義秀は、まだ仕事から帰っていない。土曜日は、授業が休みでも仕事はあるということは珍しくない。でも、義秀が自ら外食を提案するというのは珍しい。

のタイミングで外食に誘ってきた事とは、無関係ではない気がする。

外食の席で、義秀がかけてくるだろう言葉は、誠にもある程度想像はつく。

「“最後”の大会なんだから、頑張って来いよ」

そんなことを言って、今度の大会が誠にとって“最後”である事に釘を刺しつつも、表面上応援もしてやっていると言うポーズを見せておくつもりなのではないだろうか。

あの理屈っぽい父なら、ありうる話だ。

「どうしたの？あんまり、お腹すいてない？」

美奈子が、少し心配そうに聞いてくる。

母は、こういう時の自分の感情を汲み取る事には敏感だ。おそらく、ある程度自分の心境を察してくれているのだろう。

「いや、そういうわけじゃないけど……」

歯切れの悪い返答しか出来ない。

なんとなく、気乗りしないんだ。

でも、そう言えば、母にまた余計な心配を掛けてしまうかもしれない。だけどやっぱり、今は父と楽しく外食なんて、出来そうに無い。

「行きたくなかったら、別にいいのよ。明日大事な試合なんだから、ゆっくりしたい？」
「んー……」
行きたいとは思わない。でも何か、断るのにも躊躇してしまう気持ちがある。
父の話を聞いてみたい。その内容がどんなものであれ、もう一度父の気持ちを確認する事で、今後自分の打つべき手を考える材料になるのなら、言ってみる価値はあるはずだ。
「今はそんなにだけど、もうちょうっとしたら食べたくなるころだと思うから、俺も行くよ。別に、何でもいいから」
そう答えた。
「あ、そう。よかった。せっかく外で食べるなら、三人一緒の方がいいもんね。じゃあ、お父さんに誘も行くってメールしとくね」
そう言って、美奈子はポケットから携帯電話を取り出し、義秀に当ててメールを打ち始めた。
誠は、夕食なんて何を食べに出かけようとかまわなかった。ただ、今の父の気持ちを、聞いておきたかっただけだ。
数分後に、義秀から美奈子へ、メールが返ってきた。
「八時前には帰ってくるって。いつもより、少し晩御飯遅くなっちゃうけど、いいよね」
美奈子は、少し嬉しそうだ。
「うん、いいよ」
また無意識に強張りそうになる顔に、形だけの笑顔を作って、誠は答えた。
今度は、少しだけ上手く笑えた気がした。

36

義秀は、言葉通り八時前に帰って来ると、仕事の時にいつも着ているスーツから、スラックスとポロシャツに着替え、井岡家の三人は車に乗り込んだ。

「今日は誠が行きたい所へ行こう。誠、何が食べたい。」

義秀が、誠に尋ねた。

誠は、特に何が食べたいと言う事はなかった。それよりも、最後の大会を前日に控えた、このタイミングで、義秀が外食に誘ってきた事が、やはり気になって仕方ない。

おそらく、義秀の胸の内にも、誠に野球をやめさせる事に対して後ろめたい気持ちが、大なり小なりあるのだろう。だけど、それが野球を諦める理由にはならない。自分にとって、父の意思で野球を諦めると言う事は、その時点で後悔する事になるのだ。

もし、父がこの食事の席で、改めて野球を諦める事を仄めかすような事を言ってきたら、その時は、もう一度はっきりと伝えよう。絶対に嫌だと。

父がもし、自分の幸せを本当に願っているのなら、きっと伝わるはずだ。でも、もし、それでも、父に自分の気持ちが伝わらなかったら――

「どうした？何か食べたいものは無いのか？」

ガレージでエンジンを掛けたまま、静かに排気音を立てている車が、、自分の中で燻っている気持ちと重なった。早く車を出して欲しい。食事なんて、何でもいい。

俺に気を遣ってくれてるのは、何となくわかるよ。でも、今俺が父さんにして欲しいのは、そんな事じゃないんだ。

「別に、何でもいいよ」

父の見当違いな気遣いが、もどかしくて、誠はぶっきらぼうに答えた。普段ならこんな態度を見せれば、すぐに不機嫌になる父が、

今日は何も言って来ない。いつもは小言くさい父に辟易しているくせに、こんな時だけ、何も言って来ない父を不快に思うなんて、身勝手かもしれないとも思うが、じわじわと胸の奥から湧き上がってくる苛立ちを上手く誤魔化せるほど、誠は器用ではなかった。

「そうか、じゃあ中華にしようか。それでいいか？」

「いいよ」

さらに無愛想に、誠は答えた。もう、返事をするのも億劫だった。

「じゃあ、中華にしよう。美奈子も、それでいいか？」

「うん」

美奈子は明るくそう答えたが、母はこういう時、大概自己主張はせずに、誰かの意見に合わせるタイプなので、その返答は予想通りだった。だけど。

母を憎む気持ちは無い。でも、自分の進むべき道を、自分の意志で決めることができずにもがいている誠にとって、母の主体性の無い言動は、誠を少し苛立たせた。

「それじゃあ、行こうか」

義秀がそう言って、充分過ぎるほどのアイドリングを終えた車が、ようやく動き出した。

37

明日から、息子の中学最後の公式戦が始まると言う事は、以前から知っていた。義秀は、息子が小学校時代から続けていた野球を、高校以降でやることを認めていない。義務教育の間はともかく、がうせ維持代よりずっと長い将来のことを考えれば、高校三年間を楽しむ事より、早いうちから勉強に専念し、より良い大学へ行き、より良い企業に就職し、安定した収入を得ることが、何より大切なのだ。息子にも、その意向は中学の野球部に入った時点で言い聞かせておいた。息子も、不承不承といった様子ではあったが、それを受け入れてくれとように、少なくとも義秀には見えた。昔から、物分りの良い、手の掛からない子だった。

ところが、東尾商業高校から勧誘された事を機に、息子の態度が変わり始めた。

初めは「向こうから誘われたから、やってみたい」程度の事しか言っていなかった。勿論その時も、義秀は断固として容認しない態度を見せた。

それからしばらくは、何事も無かったが、ある日の夜、仕事から帰宅した自分に、もう一度野球を続けたいと息子が言ってきた。この時も、義秀は厳しい態度で臨み、息子の要求を跳ね除けた。しかしこの時、息子は今までに義秀が見たことも無いほど激しい口調で、義秀に反論しきたのだ。

驚いた。息子が自分に逆らってきた事に対する怒りよりも、驚きのほうが大きかった。それほど、息子は普段温厚で、激しい感情を覗かせる事などなかったのだ。

息子が、野球を好きだと言う事は、義秀も以前からよく理解しているつもりだった。小学生の頃、少々根の張るグローブを買ってやった時は、いくら自分が出した条件をクリアしたとはいえ、こんなに高いものを使っても、大差は無いだろうと思っていたが、息子が

未だにそのグローブをまめに手入れをして使っている事は、買い与えた者としても勿論嬉しかったが、それ以上に、この治療消費の時代にも、物を大切にする息子の気持ちが嬉しかった。

息子から、野球を取り上げるのは、申し訳ないという気持ちは、義秀なりにある。だけど、親として、やはり息子には、目先の楽しさよりも、長い将来を見据えた進路を選ばせなくてはならない。大人が甘い顔を見せれば、子供は増長するものだ。ごねれば何でも通ると思い、大人のアドバイスに聴く耳を持たぬ、身勝手な人間になってしまう。それでは、まともな大人にはなれない。だけど、やはり、息子から大切なものを取り上げるのは心苦しい。

その罪滅ぼしのために、最後の大会が始まる前日に、外食に連れて行くなんて、我ながら白々しいとは思う。だけど、何もせずにはいられなかったのだ。

悪いとは思ってる。でも、これはおまえ自身の為なんだ。わかってくれ。

ルームミラー越しに、後部座席を見ると、息子は頬杖をつきながら、窓の外をぼんやりと眺めている。窓の外に、何か気になるものがあるというより、ただ何をするでもなく、そうしているだけといった様子だった。能面のようなその表情からは、何の感情も読み取れなかった。

38

店に入り、席に案内されてからも、井岡家三人の空気は、どこかぎこちないないままだった。息子は、何か考え事でもするかのように、虚空を睨んで神妙な面持ちでいるし、重苦しい空気を誤魔化そうと、車内では、無理に明るく振舞っていた妻も、押し黙ってしまっている。

やはり、いくらなんでもあざとかっただろうか。

息子に、野球を辞めさせるのは、あくまでも自分の意思だ。それは、わかっているつもりでいる。例え自分が息子から恨まれようとも、それが息子の将来の為になるのであれば、それに耐えるのが、親の義務だとも思っている。だが――

どこかでそれを、割り切れないままでいる自分がいる。息子に、恨まれたくない、嫌われたくない。そんな気持ちが、まだ胸の奥のどこかにある。

義秀自身、身勝手で横暴な父を恨み、嫌った過去がある。そんな自分に、罪悪感が無かったわけではない。

どんな親でも、親は親だ。親がいなければ、自分は存在しないし、親が世話をしてくれなければ、自分はここまで育つ事はできなかった。それは事実だ。

それでも、もっと“いい親”の子に生まれていれば、もっと自分を理解してくれる、もっと自分を受け入れてくれる親の子に生まれていれば、もっと幸せだったのに。そう思ってしまうことがある。

父の収入が不安定で、貧しい家庭で育ったことは、義秀にとって大きなコンプレックスだった。もし自分が、将来家庭を持ち、人の親になったら、自分の子供にも、その子供にも、そのまた子供にも、そんな惨めな思いをさせたくない。そう思って、一人息子の誠には、幼い頃から厳しく接してきた。それが、息子のためなのだと、信じていた。

だけど、あの夜の息子の態度が、義秀に信念が、微かにぐらついた。

息子の人生は息子のものだあり、例え親であろうと、必要以上に干渉すべきではないのかもしれない。本人の意思を、尊重すべきなのかもしれない。でも、まだ若い息子に、どこまで将来の見通しがついているのだろうか。そう考えると、若さゆえの勢いに任せてしまう事は、大いに不安だった。

息子に、失敗をして欲しくない、安全な道を選んで欲しい。そんな親心が、息子を束縛し、苦しめる事になってしまっているのかもしれない。

自分のやり方は、必ずしも正しいとは言えないのかも知れない。でも、決して間違ってはいないはずだ。自分が息子にさせようとしている事は、必ず将来息子のためになるはずだ。そう信じている。でも、もしかしたら、それはそう信じたいだけなのかもしれない。自分にそう言い聞かせる事で、自分自身を納得させているだけなのかもしれない。

不安だ。どうしようもなく不安だ。でも、それは、自分自身の自信の無さが、そう思わせているのかもしれないとも思う。

今は、自分にとっても正念場なのだ。息子の長い将来を見据えたら、今努力しておく事が、是他に大切なのだ。愛する息子に、楽しい時間を過ごさせてやりたい。だけどそれだけでは、将来必ず苦労する。そのためにも、今は自分自身も我慢して、息子にも忍耐を強いる事が必要なのだ。

自分の教育方針は、決して間違ってはいない。息子に、少しでもリスクのある未知を避けさせる事は、親である自分の義務なのだ。義秀は、何度も自分にそう言い聞かせ、必死に不安を打ち消した。

39

井岡家の三人が注文した料理が全てテーブルに並んだ。義秀は、自分が注文したワンタン麺をすすりながら、自分の正面の席で、定食のレバニラ炒めと白飯を、交互に、黙々と口へ運ぶ息子の様子を見ていた。

息子の誠は、俯き加減に顔を料理のほうに向けたまま、一言も口を利こうとしない。もともと口数の多い子ではないし、夕食の時間が遅くなってしまったから、腹が減っていたのかもしれない。でも息子は、育ち盛りの男の子にしては、どちらかと言えば食が細い方で、今もがつがつと食べているような感じではない。流れ作業のように、皿の上の料理を箸でつまんで、口に入れ、咀嚼した物を飲み込んでは、また同じことを繰り返している。

「うまいか、誠？」

義秀が、そう尋ねた時、誠は初めて顔を上げ、小さく頷きながら、ぼそりと「うん」とだけ言った。

「明日から、大会があるんだってな」

あえて、“最後の”とは言わなかった。

どうしたら、うまく切り出せるのだろう。いや、そもそも、自分は息子に何を伝えたいのだろう。

野球を辞めさせる事を、許してくれとでも言うつもりだったのだろうか。いや、そんな事を自分の口から言い出せば、自分が息子にさせようとしていることを、自分自身で否定するようなものではないか。だけど、自分の中にも、息子から大好きな野球を奪う事に、罪悪感はあるのだという事は、わかって欲しい。でも、それには耐えなければいけない。息子の将来の為なら、嫌われ役にもならなければいけない。そう心に決めて、今まで息子に厳しく接してきたのだ。だけど――

義秀は、自分自身がかつて、父を憎み恨んでいた時のことを思い

出した。普通ならば、最も信頼を寄せ、尊敬するべきであるはずの親を、嫌っている自分自身を嫌悪していた。こんな大人になりたくない。こんな親になりたくない。いつもそう思って、義秀は育った。

結果的には、その経験を糧にして、義秀は人一倍の努力をし、理性的な人格を磨き上げ、収入の安定した職業に就くことに成功した。だけど、父がひたすら憎く、そんな父に逆らえない自分の弱さも同じくらい憎かった当時の自分の精神状態は、決して健全なものではなかっただろう。

自分は今息子に、あの時の自分と同じような思いをさせているのかもしれない。そう考えると、堪らなく不安になる。でも、自分がさせようとしていることは、間違いなく、将来の息子にとって、有意義なことなのだ。父のような、感情に任せて暴力で捻じ伏せるようなやり方とは違う。自分が息子にさせようとしていることは、理論的にも筋の取ったことなのだ。父と自分は、断じて同じような父親ではない。今は自分の言っている事がわからなくても、いつか必ず、息子にも自分の気持ちがわかる時が来る。それまでは、自分も耐えなければならないのだ。それが、親の務めなのだ。

「どうしたの？」

はっとして、顔を上げると、誠が怪訝そうな顔で、自分の顔を覗き込んでいた。

「食べないの？」

そう言われてみて、義秀は、初めて自分の箸が止まっていた事に気づいた。

「ああ、いや、別に」

少ししどろもどろになりながら、少し冷めてしまったワンタンメンを口に運ぶ。

下手な事は言わない方がいいのかもしれない。まだ野球への未練を断ち切れていない息子の気持ちを、これ以上揺さぶるような事は、控えるべきなのかもしれない。そう思って、義秀は結局、それ以上何も言わなかった。そして、誠も何も言わなかった。

40

父の運転する車で、帰宅する途中も、帰宅してからも、誠は一言も口を聞かなかった。父がこのタイミングで外食に誘ったことや、その席での態度などから考えても、自分の進路の事に関して何か言いたげなのは、誠にもわかった。もしかしたら、父なりに、自分煮から野球を奪う事に、罪悪感を感じているのかもしれない。だけど、それならなおさら、自分の意思を尊重して欲しい。自分の将来は、自分の意志で決めさせて欲しい。だけど、父は結局、最期まではっきりとした態度を示す事はなかった。いつも独断的で、一方的な父にしては、珍しい事だった。

自室のベッドに身を預け、誠は考えた。父にも、迷いがあるのだろうか。それとも、そういう素振りを見せる事で「俺にもお前の気持ちはわかってる」つもりである事を、遠まわしに示したかったのだろうか。

いずれにしても、父がはっきりとした態度を示さなかったことは、誠にとっては、肩透かしを食らったような気分にさせられただけだった。

部屋の灯りは消してある。目を閉じて、眠る前に、誠はもう一度、明日から始まる中学最後の大会への思いを、自分の中で整理した。

卒業後、東商で野球をしたいと言う気持ちと、そこで自分の力が通じるだろうかという不安。それを案じてとはいえ、一方的に自分に野球を辞めさせ、学業に専念させようとする父と、その父の胸の奥に微かに垣間見えた、自分への罪悪感。

高いレベルで野球がしたいというだけでなく、父に従順だった今までの自分から脱却するためにも、あくまで野球を続けたいと言う気持ちを貫く事と、将来の安定を最優先に考え、父の意向に従う事と、果たして自分にとって、どちらの選択が“正解”なのか、今の自分には分からない。

ただ、今後自分がどんな道へ進もうとも、東尾中野球部員としては、この大会が最後の公式戦であり、一度でも負けてしまえば、そこで自分の中学野球は終わる。それははっきりしている。

やはり今は、東尾中野球部員として過ごした三年間の想いだけを込めて、試合に臨むべきだ。進路の事は、それから考えればいい。最後まで諦めなければ、きっと自分の願いはかなうはずだ。そう信じて、誠は静かに目を閉じた。

41（前書き）

先日、初めてポイントを入れて下さった方と、お気に入り登録をして下さった方がいらっしゃいました（同じ方でしょうか？）。ありがとうございます。とても励みになります。もっと沢山の人に気に入っていただけるよう、がんばりますので、今後も宜しくお願いします。

41

日曜の朝、誠は旭ヶ谷中学との試合が行われる、東尾市民公園のグラウンドにの三塁側入り口到着した。市内で最も広いこの公園は桜の名所としても知られ、春には多くの花見客が訪れる。今は公園内に設置されている市民プールが、涼を求める市民達で賑っている。

携帯電話を開き、デジタル時計を見ると時刻は、午前八時四十五分を示している。東尾中対旭ヶ谷中の試合は午前十時試合開始予定。集合時間は九時半。早すぎるとは思っていたが、家でじっと時間を潰しているよりは、と思い、誠はかなり早めに家を出た。まだグラウンド近辺に、チームメイトの姿は見えない。

七月に入り、すでに梅雨明けからも一週間が過ぎたが、まだ朝のうちは、まだ日差しも穏やかで、過ごしやすい。天気予報は晴れとなっていたから、試合が中盤に差し掛かる頃には、夏らしいぎらついた陽射しがグラウンドに照りつけているだろうが、試合に入り込んでしまってからなら、さほど気にはならないだろう。

誠は、三年間身に纏って来た、東尾中のユニフォームを見つめなおした。白地の上下の胸に、ブロック体の青い文字で「ＨＩＧＡＳＨＩＯ」と書かれている。帽子には青地に、白で「Ｈ」の文字。実は東商のユニフォームを模したデザインである。ただし、“本家”のそれは、胸と帽子に刻まれた文字に、金色の刺繍で縁取りが施されている。

来年の春には、自分はあのユニフォームに袖を通す事が出来ているだろうか。そんなことを考えて、まだ無人のグラウンドを眺めていると、後ろから声を掛けられた。

「なんだよ、俺が一番乗りだと思ったのに」

振り向くと、佑介が立っていた。

「オッス、早いじゃん」

「佑介」

「いつごろ来たの？」
「五分くらい前かな、なんか家でじっとしてるのもなんだったからさ」
「そうなんだよな、俺もだよ。誠」
それこまで笑顔だった佑介の顔がきゅっと引き締まった。
「うん？」
「いよいよ今日からだな。絶対勝とうぜ」
「ああ」
誠も、自分の顔が引き締まるのを感じた。
そうだ。もう間も無く、中学野球最後の大会が始まる。相手は格下とはいえ、大事な緒戦。一発勝負のトーナメントだから、絶対に取りこぼすわけにはいかない。負ければそこで、誠達三年生の中学野球は、終わってしまうのだ。
この大会で、いい成績を残して、さらに東商野球部監督西崎にアピールしたいと言う気持ちもある。でも、それより何より、大好きなこのチームで、少しでも長く野球がしたい。それが今の誠の、最大のモチベーションだった。その想いは、同じく西崎の誘いを受け、すでに東商行きの意思を固めている佑介も、きっと同じはずだ。
誠は、少しずつ胸の鼓動が高まって来るのを感じた。

42

「おお、二人とも随分早いな」
九時頃になってやって来た、顧問の青木が誠達の姿を見て、驚いた声を上げた。
「おはようございます」
二人揃って、頭を下げる。
「何だ、二人とも、家でじっとしてられなかったのか」
「ええ、まあ、そんな感じですね」
少してれたように佑介が答え、誠もそれに同調するように頷いた。
それから徐々に部員が集まり始め、集合時間の九時半ぎりぎりになって、最後の一人、翔太がやってきて、部員全員が集合した。
「菊池、一応集合時間ぴったりだけどな、こういうときは五分くらい早めに見積もって来るもんだぞ。特にお前はレギュラーなんだから、もっと自覚を持て」
「はーい」
スポーツバッグのベルトを頭に掛けたまま、翔太がおどけたように手を上げる。
「まあ、とりあえずこれで全員揃ったな」
青木が、部員全員の顔を見渡しながら言った。
「わかってはいるだろうけど、これが今年度最後の大会だ。勿論三年生にとっては、中学最後の公式戦と言う事になる。今年の三年生は、一年生の頃から試合に出てた人も多いし、チーム全体としての総合力は、ここ数年のうちの野球部では、一番だと、俺は思ってる。東尾中初の全国出場を目指す、今日がその大事な第一歩目。勝つだけじゃなく、はっきりと“俺達のほうが強い”って思えるような試合をしよう。俺はそれだけの練習を、君達に課してきたし、その練習についてきた君達には、それだけの力があると信じてる。それじゃ、気合入れてこう！」

「はい！」
部員達が揃って返事をした。普段はあまり大きな声を出さない誠は、こういうときも他の部員にまぎれて消えてしまう様な声しか出さないが。この日は自然に、腹の底から声が出た。

43

誠達東尾中野球部の面々が、三塁側ベンチに入る頃には、先にグラウンド入りしていた対戦相手の、旭ヶ谷中野球部が、守備練習をしていた。顧問の教師がノックをし、選手達が順次その打球を捌いている。

旭ヶ谷中の守備は、決して拙くは無いが、かといって洗練されていると言うほどのものでもなかった。贔屓目無しに、自分たちのほうが上だと、誠は思い、仲間たちも同じ気持ちだろうとも思った。

ただ、一人だけ気になる選手がいた。ノックを受けている野手ではなく、ファールグラウンドに設けられたブルペンで、投球練習を行っているピッチャーだ。

すらりとした長身の左腕投手だ。おそらく１７０センチはあるだろう。顔が小さく手足が長い。真夏だと言うのに長袖のアンダーシャツを着込んでいる。

ゆったりとしたモーションから繰り出されるボールは、スピードこそそこそこだが、しなりの利いたフォームから繰り出されるボールには、かなりキレがありそうだ。

「誠、旭ヶ谷にあんなピッチャーいたっけ？」

旭ヶ谷中とは、何度か練習試合をしたことがあったが、ブルペンで投球練習をしている長身左腕には、全く見覚えが無かった。

「知らない」

「だよな。一年生かな。それにしちゃ随分背ぇ高いけど」

旭ヶ谷中とは、今年度に入ってからは対戦経験が無い。今春入学した一年生なら、見覚えが無いのも頷ける。

「でも、そこそこは速そうだけど、別にあのぐらいなら打てないってレベルじゃないっしょ」

翔太がにやりと笑いながら、、自信を覗かせる。

「まあ、試合が始まるまでは、なんともいえないけどね。変化球も、

どんなの持ってるかわからないし」
英治が、淡々と言った。
「よし、俺達も、守備練習始めるぞ」
「はい！」
青木の声を聞き、野手陣がグラウンドへ駆け出す。誠も、慣れ親しんだショートのポジションへ向かった。
旭ヶ谷中の練習中に、乱れた土をスパイクで丁寧にならしながら、自分に打球が来るのを待つ。
「ショート！」
青木の打球は、正面への平凡なゴロ。すばやく駆け寄り、拾い上げ、一塁へ送球する。体の調子はよさそうだ。
やがて、東尾中の練習時間が終わり、主審の指示で両チームの選手が、ホームベース付近に整列した。
東尾中主将の佑介と、旭ヶ谷の主将がじゃんけんをして、かった佑介は、後攻を選んだ。
「えー、これより、東尾中学対旭ヶ谷中学の試合を開始します。礼！」
「お願いします！」
主審の合図で、両軍の選手が帽子を取って頭を下げ、誠達東尾中ナインは、それぞれの守備位置へ散っていった。
マウンド上で、英治が投球練習をする間、内野手間でボール回しをするときも、やはり体の調子は良いと、誠は感じていた。

44

一回の表、旭ヶ谷中の攻撃は、東尾中先発宮田英治の前に、三者凡退に終わった。一・二番は、共に低めのスライダーで内野ゴロに仕留めた。三番はこのチームのキャプテンで、試合前から英治が最も警戒しているバッターだったが、このバッターに対しては、逆にスライダーを見せ球にして、最後は胸元を抉るインハイの真っ直ぐで見逃しの三振。殆ど完璧な立ち上がりだった。

「ナイスピッチ！」

ベンチ前で、控え選手達と英治がハイタッチを交わすのを横目に、誠はネクストバッターズサークルへ向かった。

投球練習のボールにタイミングを合わせ、素振りをする。しなやかな腕の振りから繰り出されるボールは、やはりかなりスピンが効いていて、伸びがありそうだ。

ここで見ているイメージよりも、少しはやめのタイミングで合わせた方がいいかもしれない。そんなイメージを抱きながら、誠は左バッターボックスに足を踏み入れた。

「プレイ！」

主審の右手が上がり、誠はいつものように、入念に足場を馴らしながらバットを構え、前を見据えた。その視線の先には、マウンド上から誠を見下ろす長身のサウスポー。改めてみると、上背はあるが、顔立ちはまだどこかあどけない。佑介の言うとおり、一年生なのかもしれない。だとしたら、相当な長身だ。しかも長い手足に左利き。ピッチャーをやるために生まれてきたような体と言ってもいい。事実、この男の投げるボールは、同学年として考えても、かなりのものだった。

だけど、どんなに身体的な面で恵まれていても、経験や技術が伴っていなければ、本当に優秀な選手とは言えない。誠は、どちらかと言えば小柄だし、体の線も細いけれど、一年時から東尾中のレギ

ュラーの地位を守り続けてきた実績がある。意地がある。ましてやこの大会は、誠達三年生にとって、中学野球最後の公式戦。試合に掛ける意気込みも、最上級生とそうでない者との間には、決定的な違いがある。

負けたくない。いや、絶対に負けられない。そんな気持ちをこめて、マウンド上の投手に視線をぶつけた。相手は、そんな誠の気持ちなどまるで眼中に無いかのように、キャッチャーとサインの交換をし、首を縦に振り、セットポジションに入った。

真っ直ぐか、変化球か。

投手の右足がゆっくりと上がり、第一球目が投じられた。

45

しなやかな腕の振りから投げ下ろされたボールは、ストライクゾーンのほぼ真ん中に決まった。やはり打席で見ると、外から見たイメージ以上に速く感じる。それに上背があり、比較的銃身を高く保ったまま投げ込んでくるフォームなため、角度もある。

思った以上に、手強いかもしれないな。

打席の中で、誠は相手に対する評価を少し高めた。　それにしても、あれだけの長身と長い手足、さらにサウスポーと言うスケール感のある投手にしては、ランナーがいないときでもセットポジションで投げるというのは、少し大人しすぎる気がする。それでもあの速球なら、充分通用するだろうが、あの投手は、もっと自分が天から授かった資質を、思い切り使って投げ込みたいとは思っていないのだろうか。指導者の方針か。だとしたら、身体的な資質に比べ、精神面はそれ程でもないのかもしれない。

余計なお世話だな。もっと試合に集中しないと。

ヘルメットの後頭部を、コン、と軽くバットで叩き、誠は二球目に備えた。

二球目。今度もストレート。高めだがコースが甘い。

いける。

そう確信し、誠はバットを振り抜いた。しかし、誠のスイングは、僅かにボールの下を掠っただけで、打球はバックネットに当たって落ち、ファールグラウンドを転々とした。タイミングは合っていたが、誠のイメージ以上に、ボールが伸びているのだ。たった二球で、誠は追い込まれてしまった。

カウントはツー・ナッシング。セオリーなら、一球外に外すところだが、この投手はどうか。

ストレートに対しては、二球目はファールにこそなったが、タイミングは合っていた。三球勝負の決め球に、ストレートとは考えに

くい。ストレートならば外して来る。逆に決めに来るならば変化球か。誠はそう読んだ。
三球目。ボールは投手の腕を離れた瞬間、誠の顔に向かって飛んできた。
あっ、危ない。
誠は咄嗟に、しゃがみこむようにして避けようとしたが、次の瞬間ボールは失速しながら大きく曲がり落ち、アウトローに構えられたキャッチャーミットに、吸い込まれるように収まった。
「ストライク！」
しゃがみこんだまま呆然としている頭上で、主審のジャッジが聞こえた。
カーブ。曲がり幅、落差、共に、今まで見たことも無いような、凄まじい変化だった。
半ば呆然としたまま、ベンチへ引き上げる誠と入れ違いに打席へ向かう、二番の翔太に忠告した。
「真っ直ぐも伸びるし、カーブも凄い。気合入れてけよ」
「うわぁ、打てるかなぁ」
おどけて首をすくめる翔太の背中を、ポン、と叩いて送り出した所へ、ネクストで待機する、三番の英治が尋ねた。
「最後の球、カーブ？」
「うん、凄かった。あと、真っ直ぐの伸びも凄い。イメージより、ボール二つ分くらい高めに来る感じ」
「なる程、なかなか手強そうだね」
「うん。簡単には、援護できそうに無いな」
誠は、そう言いながらも、こちらも英治が投げている以上、簡単に点は取られまいと思っていた。
翔太は、初球のストレートと、二球目のカーブを空振りし、三球目のストレートを打ち上げて、ファーストファールフライに倒れた。
三番の英治は、初球のストレートをバックネットへファウルチップ。二球目のカーブをかろうじてバットに当てたものの、平凡なサ

ードゴロに終わった。だが、誠と翔太への投球を見て、多少なりとも情報を得ていたとはいえ、三人のうち唯一、空振りを喫しなかったのはさすがだった。初回は、両軍共に三者凡退。

今日は、投手戦になりそうだな、と思いながら、誠は二回の表の守備に就いた。

46

二回の表。先頭の四番バッターは、左の長距離砲で、去年から旭ヶ谷中の主軸を担っている男だった。高めの速球に滅法強い反面、低めの変化球を苦手としている。

英治は初球、このバッターに、あえて高めのストレートを投げた。勿論釣り球だ。見送ればボールになるが、高目が得意なバッターなら、思わず手が出てしまうような高さへ、絶妙なコントロールで投げ込む。

バッターが、わずかに反応したが、さすがにそう簡単には引っかからない。ワンボール。

三球目も、アウトコースのスライダー。ただし今度は、ストライクゾーンから、低めに外れるコースへ。注文道理に引っ掛けさせて、ファーストゴロ。バッターの足があまり速くない事も、去年の対戦で調査済みだ。

打球をミットで拾い上げた佑介が、マウンドからベースカバーに駆け下りてきた英治を制し、自らベースを踏んでワンアウト。

五番の右バッターには、三球連続でインコースのストレートを投げ込んだ。初球は見送ってストライク。二球目はボール。三球目はファウルチップで、カウントは、ワンボール・ツーストライク。

四球目の勝負球。アウトコースへの、ストライクからボールになるスライダーで、空振り三振。英治が最も得意とする配球パターンだ。鮮やかな、内と外のコンビネーションだった。

これでツーアウトランナーなし。ここで迎えた六番バッターは、あの投手だった。左打席に入り、バットを肩に担いで、ふうっ、と一息ついて、バットを構えた。懐の深い、大きな構え。上背があるだけに、迫力もある。

あれだけのボールを投げるほどの身体能力の持ち主なら、おそら

く足も速いだろう。しかも一塁に近い左打者だ。自分の所にゴロが来たら、内野安打にならないように、素早く正確に打球を捌く必要がある。誠がそんなふうに考えているうちに、英治が一球目を投げた。低めのストレート。悪くないコースだ。

バットは出ない、見送る。まずはワンストライクか。誠がそう思った次の瞬間――

風を巻き込むような豪快なスイングで、英治のボールは、まるでピンポン球のように弾き返された。内野手は勿論、外野手すら一歩も動かなかった。スイングも、打球も、およそ中学生のものとは思えない、異次元のものだった。先制の特大ソロホームラン。

東尾中の絶対的エース宮田英治の、低めに決まる速球が、完璧に打たれたという事実を理解するのに少し時間が掛かった。それほど衝撃的な一発だった。

流星のような打球を放ったその男が、悠然とダイヤモンドを一蹴する姿を、誠達東尾中ナインは、それを呆然と眺めている事しか出来なかった。

47

先制アーチを浴びても、英治は崩れることなく、続く七番バッターをアウトローのストレートで見逃し三振にしとめ、後続を断ち切った。

一点ビハインドで迎えた二回の裏、東尾中の先頭打者は、四番の佑介。

長身左腕は、初めて初球にカーブを投じた。決して厳しいコースではなかったが、佑介は、これにピクリとも反応せず、ワンストライク。

二球目。今度もカーブ。二級続けてカーブを投げたのも、初めてだった。やはり、相手バッテリーも、佑介を相当警戒していると見える。だが、今度は少し高めにすっぽ抜けた。一球目のカーブには全く反応しなかった佑介だが、今度は見逃さなかった。バットをボールに叩きつけるように、思い切り引っぱたく。鋭い金属音と共に、痛烈な打球が三塁線を襲った。旭ヶ谷中の三塁手が、打球に飛びつくが、わずかに届かない。

「フェア！」

その判定を聞いて、俄然盛り上がる三塁側東尾中ベンチ。

「キャプテン、二つ！」

打球を拾ったレフトから、ショートの中継を経て、二塁ベースカバーへ入ったセカンドへ、ボールが送られた頃には、佑介はすでに悠々二塁へ到達していた。

「ナイスバッティング！」

チームメイトの声援に、佑介が軽く握り拳を上げて答える。

ノーアウト二塁。一打同点のチャンス。しかし、後が続かなかった。東尾中打線の五・六・七番は、得点圏にランナーを背負ったことで、凄みを増した相手投手の速球とカーブのコンビネーションに

三者連続三振を喫し、スリーアウトチェンジ。佑介を二塁に釘付けにされたまま、この回も無得点に終わった。

それでも、攻略の糸口は掴んだ。佑介が捕らえたのが、ストレートでなくカーブだったのは大きい。ストレートなら、いくら速くても出会い頭の一打があるが、失投とはいえ、変化球を完璧に打ち返したのだから、相手に与えた精神的ダメージは決して小さくないはずだ。

英治が打たれたホームランだって、出会い頭だったということもありうる。一点リードされて入るけど、チームの自力はこちらのほうが上だ。まだまだ、負ける気はしない。

三回の表。佑介の一打に勇気付けれれた東尾中ナインは、駆け足でそれぞれの守備位置に付いていった。

48

三回の表も、英治は巧みな投球術で、旭ヶ谷中打線を三者凡退に抑えた。やはり、先制ホームランを打たれた影響は全く見られない。その精神力に改めて感心させられながら、誠はこの回三つ目のアウトとなるショートゴロを、無難に捌いた。

その裏。東尾中の八・九番バッターは、旭ヶ谷の投手の前に、為す術なく連続三振を喫し、あっという間にツーアウト。東尾中打線は、前のイニングをまたいで、四者連続三振を喫している。

三人目のバッターは、この日二度目の打席を迎える、井岡誠。第一打席は、実力未知数の大型左腕の前に、敢え無く見逃しの三振を喫したが、今度はそうは行かない。

ここまでの投球パターンから、相手投手のピッチングスタイルと、その力量はある程度見極められている。

長身から角度をつけて投げ下ろす伸びのあるストレートと、大きく曲がり落ちるカーブ。持ち球は、この二つと見ていい。フォアボールはここまでひとつも無いが、制球力が高いというよりも、少々甘く入っても、ボールの威力で捻じ伏せていると言う印象だ。むしろ制球力に限って言えば、比較的アバウトで、甘いコースへ来る事も、決して少なくないし、外れる時は、はっきりとしたボール球が多い。左バッターの誠にとって、背中から回りこんでくるようなカーブを打つのはかなり難しいだろうが、甘く入ったストレートに的を絞れば、かなりの確率でヒットを打てる自信はある。

一点ビハインドの状況。ツーアウトとはいえ、何とか出塁して同点のチャンス作りたい。そんな気持ちで誠は、この日二度目のバッターボックスへ向かった。

初球はストレート。やや外よりだが、ほぼ真ん中と言っていい甘いコース。積極的に打ちに言った誠だったが、前の打席でのカーブの残像が、ほんの一瞬バットの振り出しを鈍らせ、振り遅れた。三

塁ベンチ方向への、ファール。僅かな気の迷いも、この角度と伸びのある速球には命取りになる。
二球目も、誠はストレートにヤマを張って待った。もしもカーブが来たら空振りでも良い。仮にツーストライクに追い込まれても、バットを普段より一握り短く持って、叩きつけるようにして転がすくらいはできる。そうすれば、クリーンヒットは望めなくても、内野安打は充分に狙えると考えたのだ。
二球目。狙い通りのストレートだったが、今までよりも速い。それでも誠は、迷わずバットを振り抜いた。両手に、イメージよりも少し鈍い感触が伝わる。しかし、若干差し込まれ気味ではあったものの、しっかりとバット振り抜いた事で、打球は詰まりながらもサードのグラブの先を転がり抜け、レフト前へのシングルヒットとなった。
「ナイスバッティング！」
沸き立つ自軍ベンチからの声援に、応えたい気持ちもあったが、今はそれ所ではない。このピッチャーから、そう何度もチャンスを作れるとは思えない。誠は一塁からリードを取りながら、相手投手の一挙手一投足を、つぶさに観察した。
セットポジションの姿勢が、一塁方向と正対するサウスポーの場合、一塁から二塁への盗塁、いわゆる二盗は難しいとされる。しかし、キャッチャーから最も遠い、二塁への盗塁は、最も成功率の高い盗塁でもある。それに、旭ヶ谷中のキャッチャーの肩は、それほど強くなさそうだ。狙ってみる価値はある。
この投手は、上背があり手足が長い分、必然的にモーションが大きくなる。バッターからすれば、迫力のあるフォームだが、ランナーを塁上に置いた際に、クイックで投げるのには少々窮屈になるはずだ。
二番バッター、翔太への初球。旭ヶ谷バッテリーも、誠の足を警戒しているのか、クイック気味のモーションからの、ストレートだった。誠への警戒心が焦りを生んだのか、ボールはすっぽ抜け、外

角高めに大きく外れた。
やはり、クイックには自信がなさそうだ。さっきよりも、半歩大きくリードを取る。
牽制球。殆ど手首のスナップだけで投げるような、極めてコンパクトなモーションだった。誠は咄嗟に、頭から一塁キャンバスへ滑り込んで帰塁した。
「セーフ！」
間一髪だった。クイックは苦手だが、牽制は上手いらしい。固まりかけていた、盗塁への決心が揺らぐ。だが、この投手から、そう何度も得点のチャンスをもらえるとは思えない。
行け。びびるな。
誠は、いつか見たテレビ番組で聞いた、かつて何度も盗塁王に輝いたプロ野球選手の言葉を思い出した。今は古巣の走塁コーチとして後進の指導に励んでいるその男は、こう言った。
「足の速さだけなら、自分よりも速い選手は沢山いました。それでも、自分が人より多くの盗塁を成功させる事ができたのは、“アウトになるかも知れない”という、恐怖に打ち勝って、スタートを切る勇気があったからだと思っています。勿論、投手の癖を見抜く研究も怠りませんでしたが、盗塁に最も必要なのは“スタートを切る勇気”。これに尽きます。だから私は、今でも若い選手達に言い続けています。例え結果的にアウトになっても構わないから、とにかく走れ、スタートを切れとね」
そうだ。勇気だ。リードを許している側の自分達が、消極的になってどうする。
誠は、全神経をマウンド上の投手の右足に集中させた。右足を、体の中心線より内側へ入れたら、投手は牽制球を投げられない。投げればボーク（不正投球）で、一塁ランナーの誠は二塁までフリーパスだ。
二球目。上がった右足を、体の中心線の内側へは入れないまま、相手投手は、翼を広げるように、長い両腕を大きく開いて引き絞っ

た。その両腕が開き始めた瞬間に、誠は思い切ってスタートを切った。

盗塁に必要なのは“スタートを切る勇気”。

かつての盗塁王の言葉に後押しされて、誠はわき目も振らずに二塁キャンバスめがけて全力で走った。二塁ベースカバーに入った、旭ヶ谷中のセカンドが、捕球体勢を取ったのが見えた。スタートを切ってから、二塁キャンバスしか目には言っていなかった誠には、投手の投球や、捕手の送球がどうなっているのかは全くわからない。ただ無我夢中で、二塁キャンバスへ頭から滑り込んだ。

懸命に伸ばした指先へ、キャンバスに触れた感触が伝わってくるのとほぼ同時に、セカンドのクラブが覆い被さって来た。

「セーフ！」

誠は、半ば這い擦るようにして上体を持ち上げ、片膝立ちの体勢のまま、力強く両手の拳を握り締めた。

ツーアウト、ランナー二塁。二球目は、どんなボールかはわからないが、ストライクだったらしい。ならば、カウントはワンボール・ワンストライクか。ツーアウトだから、誠はバッターが打ったと同時にスタートを切る。場合によっては、シングルヒットでも、同点のホームを踏むチャンスがある。外野手の肩の強さまでは、さすがに把握しきってはいないが、それでも多少の無理は承知で、ホームへ突っ込むべきか。難しいところだ。

翔太への三球目。カーブだ。大きく曲がり落ちるボールに、翔太が喰らいつく。ボールがバットに当たった。次の瞬間、打球がホームベース付近でバウンドし、一塁側へ高く跳ね上がるのが見えた。完全な当たり損ない立ったが、あれだけ高くバウンドすれば、翔太の足なら、内野安打になる可能性は充分にある。どちらにせよ、今の自分に出来る事は、全力で三塁へ走る事だけだ。

誠は、三塁キャンバスめがけて全力で走った。だが、打球が飛んだ方向からして、自分が三塁で刺される心配はなさそうだ。誠は途中でスピードを緩め、打球の行方を目で追った。

定位置から数歩前進して打球を捕球したファーストが、一塁ベースカバーに入ったピッチャーへ送球する。それとほぼ同時に、翔太が一塁へ、頭から滑り込んだ。

「セーフ！」

ツーアウト・ランナー無しから、ツーアウト一三塁へ。一打逆転のチャンスだ。しかも東尾中の打順は、ここからクリーンナップを迎える。

ここしかない。ここで最悪でも同点に追いつけなければ、試合の流れは、完全に旭ヶ谷中へ傾いてしまう。東尾中の誰もがそう思った。そんな中、東尾中の三番。宮田英治が、打席に入った。

49

英治への初球を、ピッチャーが投じた。リリースされた瞬間、ポンと浮き上がるような軌道から、カーブだとわかった。その瞬間、一塁ランナーの翔太が、スタートを切った。英治が、空振りで援護する。キャッチャーが捕球したタイミングにあわせて、三塁ランナーの誠が、ホームへ向けて駆け出すポーズを見せる。勿論ホームスチールを狙っているのではなく、キャッチャーが、翔太を二塁で刺そうとするのを牽制する為だ。

誠の狙い通り、旭ヶ谷のキャッチャーは、送球の構えを作っただけで、二塁への送球を諦めた。

ツーアウト・二三塁。東尾中としては、なんとしてもこのチャンスをものにしなければならない。

英治への二球目。今度はストレート。英治が、バットを振り抜く。体の軸が全くぶれないシャープなスイングが、ボールを捉えた。快音を響かせた打球が、三遊間を真っ二つに切り裂き、三塁ランナーの誠が、悠々とホームへ還って、同点。ベンチの仲間が、ハイタッチで誠を出迎える。

なおもツーアウト・一三塁。続くバッターは第一打席にツーベースを放っている、四番の佑介。試合の流れは、確実に東尾中へ傾きつつあった。

佑介への初球は、ストレート。前の打席でカーブを打たれている事と、一塁ランナーの英治の盗塁を警戒しての配球だろう。だが、英治は初球から迷い無くスタートを切った。佑介が、先刻の英治と同様に援護の空振りをする。キャッチャーが捕球し、送球に移ろうとした瞬間、三塁ランナーの翔太が、誠と同じようにスタートを切るポーズを見せると、再びキャッチャーは送球を諦めた。やはり、肩には自信が無いらしい。英治が余裕を持って二塁を陥れ、再びツーアウト・二三塁。

佑介の二球目。投手が、キャッチャーと正対してサインの交換をしている。
キャッチャーのサインに頷いた投手が、振りかぶった。
「あれ？ワインドアップ？」
高く上がった右足が大きく踏み出され、叩きつけるような腕の振りから放たれたボールは、唸りを上げて空気を切り裂き、一直線にキャッチャーミットに突き刺さった。
「ストライク！」
「……！」
大きくを目を見開いたまま硬直した佑介の表情からも、今の一球の凄まじさが伝わってくる。今までに、見たことも無いような、豪速球だった。
「なんだよあれ……」
「あんなの、打てるわけねえじゃん……」
「今まで、本気出してなかったのかよ……」
東尾中ベンチが、俄かにざわめく。
これまでとは、フォームからして明らかに違う。これまで、あの投手は、ランナーの有無に関わらず、セットポジションからの投球だった。力感は無いが、ゆったりとしたモーションから、長身を生かすべく、重心を高く保ったまま短めのステップ幅で、上から投げ下ろすようなフォームだた。
たが、今のフォームはまるで違った。体全体の、ありとあらゆる筋肉と間接をフル稼働させたかのような、ダイナミックなフォーム。そしてそのフォームから放たれたボールは――
ツー・ナッシングに追い込まれた佑介は、バットを一握り短く持って寝かせ気味に構えた。小学生の頃から図っと一緒に野球をやってきた誠でさえ、佑介がバットを短く持ってミート重視の構えるところなんて、初めて見た。負けるのか？
誠は、この日初めて、負けを意識した。
東尾中野球部初の、全国大会出場を目標として来た。そして、そ

れは決して夢などではなく、充分に実現可能な事だと思っていた。だけど、自分たちが、この投手から、あと何点取れるというのだろうか。

前の打席では、ツーベースを放っている佑介だが、それでも、ここへ来て隠していた牙を剥き出しにしてきた、あの投手のボールを打てるだろうか。

佑介への三球目。再びワインドアップから放たれたボールが、佑介に襲い掛かる。佑介のバットが、迎え撃つ。しかし、その瞬間、ボールは佑介のスイングを嘲笑うかのように浮き上がり、バットが空を切った。天を仰いだ佑介の顔が、屈辱に歪む。だが、伸び上がったボールは、キャッチャーのミットさえも越えて、主審のマスクを直撃し、あさっての方向へ転がって行った。

「走れ！」

真っ先に叫んだのは、青木だった。その言葉にはっとした佑介が、懸命に一塁へ駆け出し、三塁ランナーの翔太も、スタートを切った。ボールを拾い上げたキャッチャーが、ホームへベースカバーに入った投手へボールを返す。翔太が、頭から滑り込んだ。

「セーフ！」

二対一。思わぬ形で、東尾中は、この試合初めて勝ち越した。

50

「ナイスイラン！」
ホームへ生還した翔太を、東尾中ベンチが、ハイタッチで出迎えた。しかし、どこか様子がおかしい。勝ち越しのホームを踏んだと言うのに、お調子者の翔他の顔が強張っている。
「あいつ……、花園シャインズの、新田恵介だ……」
「あいつって、あのピッチャーの事か？」
青木が、翔太に尋ねた。
「はい……」
「花園シャインズっていや、この辺の少年野球チームじゃかなりの名門だな。知ってるのか？」
「はい。さっきまでセットだったから気づかなかったけど、ワインドアップから投げたときに、思い出しました。俺より、一コ下だから、まだ一年生のはずです」
やはり、一年生だったのか。それにしても、中一であんなボールを投げるなんて、並大抵の才能ではない。しかも、小学生時代には名門チームにいたというではないか。何故、そんな男が、旭ヶ谷中の様な所にいるのか。あれだけの素質があれば、シニアのチームからのスカウトもあったはずだ。
「菊池先輩の一コ下ってことは、俺達とタメですよね。でも、俺が去年シャインズと対戦した時には、あんな背の高いピッチャーいませんでしたよ」
渡辺が言った。
「俺がいたチームに、あいつと同じ小学校の奴がいたんだけど、そいつの話だと、コーチと喧嘩して、六年に上がる前に辞めちゃったらしい。結構問題児だったみたい」
「と言う事は、一年近いブランクが合って、あのボールか。体格と言い性格と言い、ある意味ピッチャーになるために生まれてきたよ

うな奴だな」
青木が、感心したようにそう言っ手いるうちに、東尾中の五番打者はあっけなく三球三振を喫し。スリーアウトチェンジとなった。しかし、青木は直後に表情を引き締めて、こう続けた。
「でも、俺は、お前達が負けるなんて思わないぞ。確かに凄いピッチャーだが、実際に今子トラがリードしているんだ。それに、あのピッチャーを除けば、俺達がチームとして、相手に劣っている部分なんてひとつも無いと、俺は思う。お前達ならやれる！弱気になるな！しっかり守って来い！」
「はい！」
頼れる顧問の声に勇気付けられ、東尾中ナインは、駆け足で四回裏の守備に就いた。

51

一点のリードを貰った、英治の投球は、この回も冴え渡っていた。二番から始まった、旭ヶ谷打線に対し、徹底して低目にボールを集め、全て内野ゴロ。内二つは、ショートの誠が捌いた。やはり、青木の言うとおり、チームとしての総合力は、自分達の方が上だ。大丈夫。勝つのは、自分達だ。

低めに決まる英治のスライダーを、次々に打ち損じる旭ヶ谷中のバッター達を見て、誠は改めてそう思った。

しかしその裏、新田恵介の投球は、英治以上に圧巻だった。東尾中の六・七・八番をいずれもストレートのみで、三球三振。遊び球は一球も無かった。ファウルすら、無い。まさに完膚無きまでに捻じ伏せた。

本来の力を解放した新田が、マウンド上で躍動する姿は、敵であるはずなのに、思わず魅入ってしまうような輝きを放っていた。

ゆったりとした動きで振りかぶり、足を高々と上げ、右手で壁を作って、上体の開きを抑えながら力強く踏み出し、長い腕を鞭のようにしならせて一気に振り抜く。フィニッシュの際、体重移動の余韻で跳ね上げる左足が、なんとも美しい。

その美しいフォームから放つ剛速球で、東尾中の打者を捻じ伏せても平然としている。まるで、それが当然であるかのように。その自信に満ち溢れた姿は、とてもリードを許しているチームの投手とは思えなかった。

五回の表。この回先頭の、五番バッターが打席に入った。だが、東尾中ナインは、旭ヶ谷のクリーンナップを打つこの男よりも、ネクストバッターズサークルで片膝をついて目を光らせている、六番の新田の方が、よほど気がかりだった。あれほどの打者を、あえてクリーンナップを外しているのは、ピッチングに集中させるためだろう。

新田の前に、ランナーは出せない。もし、このバッターを出塁させて、新田に二打席連続のホームランを打たれれば、逆転だ。そうなったら、東尾中は、新田から、少なくとも二点取らなくては勝てない。負ける。全国への夢が、そこで途絶える。ランナーがいなければ、ホームランが出ても同点。それでもかなり厳しいが、勝ち越されるよりは、だいぶましだ。そういう意味でも、この五番バッターを出塁させるかどうかは、試合の流れさえも変えるほど大きな意味を持っている。

もし、自分のエラーで、このバッターを塁に出してしまったら。そして、英治が新田に、二打席連続のホームランを打たれてしまったら。

不安が過る。

守備には、自信がある。野球を始めた頃から、守備の確実性は、誠が一番自信を持っている分野だった。東商の西崎からも、真っ先に誉められたのが守備だった。だが、勿論エラーをした事が無いわけではない。

俺の所に、打たないでくれ、と言う弱気な気持ちが湧き上がる。そんな自分に、これからさらに上を目指すつもりなら、こんな事でびびるな、と言い聞かせ、奮い立たせる。

英治の初球。アウトローへのストレート。コーナー一杯に決まったかに見えたが、判定はボール。

二球目、今度はタイミングを外す緩いカーブ。さすがに冷静だ。虚を突かれたバッターが、はっとしたように目を見開き、思わず手を出した。しかし、緩いボールを待ちきれず、完全にタイミングを外されて、大きく体勢を崩されながら空振り。

三球目、低めへのスライダー。バットが回る。ボールがバットに当たる。が、完全な当たりそこない。打球は、ピッチャーとショートとサードの守備範囲の、ちょうど真ん中へ、力なく転がった。

来た。

完全に打ち取った当たりだったが、打球の勢いが殺されている分、

素早く処理しなければ、内野安打になる。誠としては、最も恐れていたシチュエーションだった。それでも、最も守備力のある自分が、この打球を処理すべきだ。

誠は、全力で打球に駆け寄り、バウンドにあわせて腰を沈め、足元にグラブを差し出し、捕球姿勢に入った。

大丈夫。捕れる。誠がそう思った、次の瞬間。

打球は、グラウンドの土の、わずかに窪んだ部分に当たり、突然高く跳ね上がった。

イレギュラーバウンド。

嘘だろ。こんな時に。

自分の顔をめがけるように跳ね上がった打球に、誠は、咄嗟に顔を背け、一度足元で構えたグラブを、懸命に打球が飛んでくるであろう方向へ突き出した。グラブの先に、微かにボールが触れた感触が伝わる。

しかし打球は、誠のグラブに収まる事なく、レフト前へ転々と転がっていった。

無理な体勢から捕球しようとした誠は、振り向きざまに崩れ落ち、力なく転がる打球を、レフトが無造作に拾い上げる上げる光景を、呆然と見つめていた。

52

「ごめん」
誠は、チームメイトに謝罪した。イレギュラーバウンドだから、記録上はヒットなのかもしれなかったが、誠の中では、決して取れない打球ではなかった、と言う気持ちがあった。
「今のはイレギュラーだから、仕方ないよ。切り替えていこうぜ。ドンマイ」
佑介が、励ます。
そうだ、切り替えなくては。次のバッターは――
ノーアウト一塁。ここで打席に入るのは、第一打席に特大ホームランを放っている、新田恵介だ。打席でバットを構えた新田の姿が、心なしかさっきよりも大きく見える。
英治、セットポジションからの、初球。アウトコース低めのスライダー。しかし、前の打席の残像が、手元をわずかに狂わせたのか、鋭く曲がり落ちたボールは、ワンバウンドとなり、あらぬ方向へ跳ね、それを見た一塁ランナーが、スタートを切った。誠は、二塁ベースカバーへ入って、キャッチャーからの送球を待ったが、間に合わないと判断したキャッチャーは、送球姿勢を作っただけで、ボールは投げず、そのままがっくりとうなだれた。
「内野集合!」
ファーストの佑介の合図で、東尾中バッテリーと内野陣が、マウンド上に集まった。
「ごめん、せめて前に転がせれば……」
キャッチャーが、土のついてしまったボールを手でこねながら英治に手渡し、申し訳なさそう謝罪する姿が、ついさっきの自分と重なる。
「いや、こっちこそごめん。今のは、俺の失投だよ。それより……」
英治が打席の新田をちらりと見ながら言った。

「歩かすか？」
「えっ！？」
英治の提案に、一同は、驚きを隠せなかった。しかし、それは東尾中ナインの誰もが、頭の片隅で考えていた策でもあった。ランナーが似るへ進んだ事で、ホームランでなくとも、一打同点と言う状況なのだ。だが、一塁は今、空いている。仮に新田を歩かせて、ノーアウト一・二塁としても、旭ヶ谷中の七番以降の下位打線に、英治が打ち込まれるとは考えにくい。
まだ五回とはいえ、七回制の軟式野球においては、もう後半戦だ。それでも、敬遠策という、いわば“守りに行く”には、まだ早い段階といえる。セオリーとはいえない作戦だ。しかし、誠の捕球ミス、英治の失投、キャッチャーの後逸。小さなミスが重なり、試合の流れは確実に相手に傾きかけている。事実、ついさっき、自分達も、相手のミスから勝ち越し点を奪ったではないか。消極的かもしれないが、今打席にいるバッターは、真っ向勝負などと言う綺麗事で、どうにかなる相手ではない。逆に言えば、ここで嫌な流れを断ち切ることが出来れば、旭ヶ谷中へ傾きかけた流れを、もう一度引き寄せる事もできる。
「エーちゃんは、それでいいのかよ？」
佑介が、英治に尋ねた。真剣な表情だった。
「そりゃ、やられっぱなしは悔しいけど、こんなとこで負けるわけには行かないだろ？トーナメントなんだから、一度でも負ければ、そこで終わりなんだ。多少消極的かもしれないけど、勝つ為には最善の策だと思う。俺の個人的な感情で、危険な選択をするわけにはいかない。それに、やっぱりあのバッターはちょっと次元が違う。でも、はっきり言って、向こうは彼のワンマンチームだ。仮に彼一人との勝負を避けて、俺達が勝ったとしても、それをとやかく言われる筋合いは無い。こっちは自らランナーを一人出してやってるんだから、他のバッターが、それを返せばいい。それを向こうが出来なければ、それは俺たちの方が強いチーム、勝つのにふさわしいチ

ームだったと言う事さ」
英治の言葉には、チームメイトを納得させるだけの説得力があった。英治は、決して弱気になっているのではないのだ。前の打席で完璧に打たれた相手、それも一年生を、敬遠のフォアボールで歩かせる。この上ない屈辱だろう。しかし、英治はあえて、それを自ら提案した。こういうときに、小さなプライドに拘らずに、客観的で冷静な判断が出来るのが、いかにも英治らしい。
佑介が、ちらりとベンチの青木に、目配せをする。腕組みをして、こちらに向けられている視線は、真剣そのものだったが、青木は何か指示を出そうとはしなかった。
「いざという時こそ、どうすべきかを自分達で考えろ。言われたとおりしているだけじゃ、いつまで経っても成長しない。その代わり、どんな結果になっても、お前達が考えた末に出した結論なら、俺はそれを尊重するし、結果に関しては責任を取る」
青木に、何度も言われた言葉だ。一部の保護者からは、無責任だと非難する声もあったというが、選手達を子供扱いせず、彼らの主体性を重んじる青木のやりかたを、少なくとも部員達は信頼していた。
「大丈夫。七番以降の奴らは、俺が絶対に抑える」
英治が、珍しく断定的な口調で言った。確かに、常識的に考えれば最も打力の劣る選手が並ぶ、七・八・九番という打順を打つバッターが、英治のボールを捉えられるとは考えにくい。
「エーちゃんがそこまで言うなら、俺はそれで良いと思う。実際、それが一番確実だとも思うし。皆はどう思う」
佑介の問いかけに、全員が頷いた。
「よし、それじゃ決まりだ。きっちり守ろうぜ」
佑介の合図で、誠達は各々の守備位置に散って行った。

53

キャッチャーは立ち上がりはしなかったが、二球目、三球目と、明らかなボールで、カウントノースリーとなったところで、旭ヶ谷中ベンチから、英治に罵声が浴びせられた。

「勝負しろよ！」

「逃げてんじゃねえよ！」

「びびってんじゃねえぞ！」

二塁ランナーが、ショートの誠に言った。

「おいおい、敬遠かよ。いくらさっきホームラン打たれてるからって、あいつ一年だぜ。お前ら、情けなくねえの？」

誠は、相手をちらりと一瞥したが、何も言い返さなかった。その一年の力に頼りっきりで、ようやく自分達と対等に渡り合えている、お前達こそ、情けなくないのか。

喉元まで出かけた言葉を、懸命に飲み込む。この程度の事で、自分がエキサイトするわけにはいない。マウンド上の英治は、自分以上の屈辱に耐えているのだ。強敵を恐れずに、真っ向から立ち向かう事だけが勇気ではない。臆病者と罵られても、勝利の為には恥辱に耐える事もまた勇気なのだ。英治は、俺達のエースは、断じて臆病者などではない。

決して、誉められた作戦ではないが、ルールの範囲内だ。なにも、後ろめたい事なんてない。英治の言う通り、相手の罵声は、旭ヶ谷中側が新田の力なくして自分達に勝つ自信が無いと言う気持ちの現れなのだ。

四球目も、明らかなボール。新田は、バットを放り出し、一塁へ向かった。

「こっからだぞ、きっちり守るぜ！」

「おう！」

佑介の声に、ナインが応える。

ノーアウト、一・二塁。打順は七番。一本でもヒットを打たれれば、同点になる危険もある。長打なら、逆転もありうる。しかも、そうなれば、打順もトップまで回る。

下位打線には、絶対に打たれないと言い切った英治の度胸に、改めて感心する。頼もしいエースだ。だけど、仲間に頼ってばかりはいられない。そもそも、このピンチは自分のミスから始まったものだ。その汚名を返上するためにも、今度はどんな打球にでも喰らいついて、絶対にアウトにしてやる。

英治の初球はストレート。バッターは、初球に、送りバントの構えを見せた。しかし、英治の速球の勢いを殺しきれず、中途半端な打球が、ファーストを守る佑介の正面へ転がった。

二つ取れる。

誠は、瞬時にそう判断した。

ダブルプレーを成立させるには、少々際どいタイミングだったが、誠は佑介が必ず二塁へ送球して切ると直感的に感じ、素早く二塁ベースカバーに向かった。

「佑介！」

誠の予想通り、打球を拾い上げた佑介が、素早く体を切り返し、誠へ送球してきた。誠は、二塁ベースへ駆け寄りながら、ズシリと重たい送球をがっちりと愛用のグラブでキャッチすると、二塁ベースを蹴って、滑り込んできた一塁ランナーの新田を、ひょいと飛び越えるように交わし、セカンドの守備位置から一塁ベースカバーへ入った翔太へ、スナップスローで送球した。それを翔太がキャッチする。

「アウト！」

一塁塁上を駆け抜けたバッターランナーが、悔しさに顔を歪めた。

「ナイスショート。さすがのフットワークだね」

英治にそういわれた誠は、少し照れながら左手を軽く上げ、笑顔を返した。

ダブルプレー成立。この間に二塁ランナーは三塁へ進み、ツーア

ウト、三塁。まだまだ油断は出来ない。
しかし、八番バッターは、英治の速球とスライダーのコンビネーションに掠りもせず、三球三振。東尾中は、見事にピンチを乗り切った。
「しゃあっ！」
八番バッターを三振に斬って取った瞬間、英治が、小さくガッツポーズを作り、短く叫んだ。誠は、三年間共に野球をしてきた英治が、初めて感情を剥き出しにする姿を見た。おそらく、他の部員の前でも、これほど感情を露にするところを、今までに見せたことはなかっただろう。
勝ちたい。この最高の仲間達と、もっと野球がしたい。誠の中で、一度萎えかけた思いに、再び火が灯りはじめた。

54

自然に、声が出ていた。無意識に、拳を握り締めていた。そんな自分に、宮田英治は自分で驚いていた。

旭ヶ谷中の六番バッターで、第一打席に先制ホームランを打たれた新田恵介を敬遠しようと言い出したのは、自分だった。

決して、闘争心が旺盛な方ではないと、自分でも思っている。だけど、チームのエースナンバーを背負う者としてのプライドは、人並みにあるつもりだ。個人的な立場から言えば、例え結果がどうなろうと、もう一度新田と、正面から勝負がしたかった。

だが、前の打席では、新田に完璧な打球を打たれている事。その新田に、二打席連続のホームランを打たれれば、逆転を許してしまう状況であった事。バッテリーエラーにより、一塁が空いた事。他の打者は、ほぼ完璧に抑えている事。これから試合が後半に差し掛かる状況で、自軍のリードは僅か一点だという事。秘めた力を解放した新田の投球からは、これ以上の追加点を挙げるのは、極めて厳しいと考えざるを得ない事。さまざまな視点から、冷静に分析した結果、英治は、新田と勝負するよりも、新田を歩かせて、続く下位打線を抑える事のほうが、東尾中が勝てる確立が高いと判断し、敬遠策を提案した。

もう一度新田と勝負をして、抑えてやりたいと言う気持ちは、当然あった。一年生にやられっぱなしで、逃げるような真似は、耐え難い屈辱だった。しかし、相手は、明らかに自分よりも力量が上だった。中学生にとって決して小さいとはいえない二年分の経験や体格の差など、問題にもせぬほどの圧倒的なスケールを、新田は、マウンドで、打席で、英治達に見せ付けてきた。

こいつだけは、完全に別格だ。だけど、他の奴らはどうだ？チーム全体の総合力なら、自分達の方が明らかに上だ。野球は、団体競技なのだから、チームの総合力が高いチームこそ、勝つのにふさわ

しいはずだ。一年生におんぶ抱っこのチームに、全国への夢を断たれてなるものか。そう自分に言い聞かせた。

それでも、不安はあった。下位打線とはいえ、百パーセント抑えられるわけではない。出会い頭のヒットを打たれることもあるかもしれない。打ち取った当たりが野手の間にぽとりと落ちるかもしれない。でも、もしそうなれば、同点、逆転の可能性もある状況だった。しかも、打順がトップに返れば、ピンチはさらに広がる。

強打者との勝負から逃げ、格下と侮っていた下位打線に試合の流れをひっくり返される。もしそれで点を取られたりしようものなら、自分は笑い者もいい所だ。

それでも、新田と勝負に行って、抑えられる確率に比べれば、確実な手段だったとは思う。　表情には決して出さなかったが、最後のアウトを取る瞬間までは、不安に押し潰されそうだった。

万に一つの失敗も許されない。そんな状況に、野球をしていて初めて、英治は追い込まれた。しかし、切り抜けた。最後の三振はともかく。その前のダブルプレーは、仲間の好守に助けられたとしか言いようがない。

英治は、バッターがバントの構えを見せた瞬間、マウンドを駆け下りて、前方へ全力でダッシュした。バント処理の基本だ。

そしてファーストの小川の方向へ、打球が転がったのを確認すると、二塁ベースへ視線を移した。一塁ランナーの、二塁封殺を諦めて、バッターランナーを一塁でアウトにすることだけに専念すれば、全く問題ないタイミングだったが、場合によっては一塁ランナーを二塁で刺せるかも知れないと思ったからだ。だが、仮に一塁ランナーを二塁でさせても、ダブルプレーは厳しいだろうと言うのが、英所の予想だった。それでも、ひとつアウトが取れればそれでいい。後の二人を、打ち取れば、点は取られない。自分達のリードを守れる。それだけで、充分だった。

しかし、ショートを守る井岡は、持ち前の軽快なフットワークで素早く二塁カバーに入り、打球を拾った小川も、それをあらかじめ

見越していたかのような迷いのない動きで、二塁へ送球した。それを受け取った井岡は、ランナーのスライディングを冷静に交わし、小川の前方チャージのために空いてしまった一塁へベースカバーへ入ったセカンドの菊池へ、流れるような動きでスナップスロー。二つ取るにはこれしかないと言う形で、見事にダブルプレーを成立させた。次打者を、英治が三振に打ち取った事で結果的には、トップに返すどころか、九番打者にすら打順を回さなかった。

ここまで上手くことが運ぶとは、正直思わなかった。仲間に救われた。頼りになる仲間達だ。自分が提案した賭けとも言える選択に、付き合ってくれただけでなく、最高の結果で応えてくれた。野球がチームスポーツである事を、改めて痛感した。

負けられない。

このチームは、こんな所で負けるべきではない。もっと大きな舞台で、この仲間達と

野球がしたい。

野球を始めて、いや、生まれて初めて、自分の内から燃えるような闘志が沸きあがって来るのを、英治は感じていた。

55

五回の表の守備を終えて、ベンチへ引き上げた小川佑介は、ペットボトル入りのスポーツドリンクをバックから取り出して、口に含んだ。一リットル入りのペットボトルに、半分ほど残っているドリンクを一気に飲み干したい程に、喉が渇いていたが、試合中は、一度に飲む量は、三口までと決めている。顧問の青木に、一気に飲み物を飲むと体が重く感じるから、試合中は喉が渇いていても少しずつ飲むようにと、指導されたのは、まだ一年生の頃だった。

「一気にがぶがぶ飲まなくても、ある程度飲めば、喉の渇きは落ち着くから大丈夫」

半信半疑で、言われたとおりにしてみると、その通りだった。以降、佑介はこの教えを忠実に守っている。

「小川」

「はい」

その青木に名前を呼ばれて、佑介は顔を上げた。

「さっきの敬遠策は、お前の指示か？」

青木は声を少し潜めながら、佑介にそう聞いてきた。

さっきの敬遠策とは、五回の表の、二人目のバッター、旭ヶ谷中の六番バッター、新田恵介を故意のフォアボールで出塁させた事だ。自分が声を掛けて、内野手をマウンド上に集めてからの事だったから、青木は、佑介の指示かもしれないと考えたのだろう。小声で聞いたのは、おそらく英治に会話を聞かせないためだろう。結果的には無失点で切り抜けたとは言え、前の打席でホームランを打たれたバッターを敬遠で歩かせると言う事が、ピッチャーにとってこの上ない屈辱である事に変わりはない。それを蒸し返すような事を避けたかったのだろう。青木は、子供に対してもそういった細やかな気配りが出来る、数少ない大人の一人だった。

「皆で相談して、最終的には、俺がそうしようって言いました」
出来る限り、自分に責任があるという聞こえ方をするような言葉を選んで、佑介は言った。英治のアイデアとも、マウンドに集まったメンバーの創意とも言いたくなかった。そういう言い方をすれば、自分以外の誰かに、責任を押し付ける事になる。それはしたくない。敬遠策に賛成した以上、自分にも確実に責任がある。怒られるなら、自分ひとりでいい。誰かが起こられるのを見ているよりはましだ。キャプテンとしての責任感から出た言葉だった。
「そうか」とだけ、青木は言った。
「まずかったですか？」
やはり、真っ向勝負をするべきだっただろうか？不安になって、佑介は青木に尋ねた。
「いや、俺もあの時、あいつを歩かせる事を、少し考えたんだ。でも、俺がお前達の立場なら、実行には移せなかったと思う。正直、良く決断したと思うよ。お前達が、本当に勝ちたいと思っていることが良くわかった」
“よく決断した”と言う言葉が、嬉しかった。敬遠をしたという、表面的な事実だけではなく、自分達なりに苦心した末での決断だったと言う事を、この人はわかってくれている。
「しかし、本当に凄い一年生だな。油断していたつもりはないけど、まさか初戦でこんな苦戦を強いられるとは思わなかったよ」
佑介自身も、少し不安だった。青木が言ったように、今日の試合でここまでの苦戦は想定していなかった。だけど、青木にも、チームメイトにも、自分が不安な気持ちになっていることを、悟られたくない。そんな気持ちから、青木にむけられた自分の目が、睨むようなものになってしまっていたことに気づいたが、佑介は、青木から視線を逸らそうとも、目つきを変えようとも思わなかった。虚勢でも良い。キャプテンである自分が、弱気なところを見せれば、それはチーム全体の士気にも関わる。
その不安を打ち消したくて、佑介は自分に言い聞かせるように言っ

た。
「でも、さっき先生も言ってましたけど、今は俺達が勝ってます。あの新田ってピッチャーがどんなに凄いピッチングをしても、俺達が点を取られなければ、俺達が勝ちますから」
「そうだ。その通りだ。そして、お前達ならそれが出来ると、俺は信じてる」
その言葉に、こわばった顔の筋肉が少し緩むのを、佑介は感じた。それとほぼ同時に、東尾中の九番バッターが三振を喫し、スリーアウト・チェンジとなった。四回の佑介から数えて、六連続だ。
ワンアウトランナーなし。打順はトップに返って、前の打席でヒットを打っている、一番の井岡誠が入る。
「誠！頼むぞ！」
親友の背中に向かって、佑介は声の限りに叫んだ。

56

五回の裏。ワンアウト・ランナーなしの状況で、誠にこの試合三打席目の打順が回ってきた。二対一。東尾中のリードは、わずかに一点。打順の抉り合わせからいっても、この回に追加点を取れなければ、厳しい。

なんとしても、塁に出なければ。

前の打席では、ヒットを打っている。しかし、今マウンド上にいるピッチャーは、同一人物ではあるが、まるで別のピッチャーと言っていい。

佑介ですら、力で捻じ伏せたほどの剛速球は、バットに当てる事すら困難だろう。それでも、モーションが大きくなった分、制球にはバラつきがある。フォアボールで出塁できるチャンスは、今のほうがあると考えられる。

初球は、どんなに甘いコースでも見送ろう。まずは打席から見た体感速度がどれほどのものなのか。それを知る必要がある。

ワインドアップからの初球。セットポジションから投げていたときよりも、フォーム全体が大きく、迫力がある。その動きだけでも、打者を威嚇するほどの圧力がある。

鈍い音を立ててキャッチャーミットに突き刺さった、ボールは、外角高めに大きく外れて、ワンボール。

凄い。

今までに見た、どんなボールよりも速い。そして、猛烈なスピンが掛かったボールが、空気を切り裂く音も、尋常ではない。

だが、やはりその分制球は荒れている。セットから投げていたさっきまでは、こんな明らかなボール球は殆どなかった。

初めからフォアボール狙いで歩かせてくれるほど甘くはないだろうが、ボールが先行して、置きに来たところを狙い撃ちする事ぐらいは出来るかもしれない。

二球目もストレート。今度はインコース。ストライクだとはわかっていたが、反応できなかった。初球は、体から遠かった分、じっくりと見極める事ができたが、体の近くに来た二球目には、一瞬身がすくむような迫力があった。

ワンボール・ワンストライクからの、三球目。今度は、ほぼ真ん中のストレート。バットを振り抜く。しかし、当たらない。誠のスイングは、ボールのかなり下で空を切った。速さだけでなく、伸びも桁違いだ。

ワンボール・ツーストライク。追い込まれてしまった。少々ボール気味でも、喰らいついていくしかない。しかし、これだけ速いボールを、じっくり見極めるのはかなり厳しい。バットが都督と判断したら、なりふり構わず打ちにいくしかない。

四球目。今度は胸元を抉るような危険なボール。誠は、仰け反るようにして避けた。一瞬、またカーブかもしれないと言う考えも、頭を過ったが、それを冷静に判断している時間的余裕はなかった。これでカウントは、ツーボール・ツーストライク。

上手くぶつかって、デッドボールをもらればよかったかな、とも思ったが、あのボールをまともに喰らえば、いくら軟式球とはいえ、ただではすまないだろう。マウンド上の新田は、一応帽子を取って謝罪する態度を示してはいるが、その表情には、誠に対する申し訳なさよりも、カウントを悪くしてしまった事への苛立ちの方が、色濃く現れていた。

生意気な奴だ。

そう思う一方、そんな新田が羨ましくもある。恵まれた体格と身体能力も勿論だが、誠が何より羨ましかったのは、新田の精神面だった。コーチと衝突して、チームを飛び出したと言うほどの、激しい気性。一年生でありながら、投打の中心に自分がいて当然であるかのように振舞う、自信に満ち溢れた態度。

あんなふうに振舞えたら。誰が相手だろうと一歩も引かず、年齢の差などものともせず、自分の力で、意思で、自分の道を切り開い

て進んで行く強さが、自分にもあれば。
誠が今、何よりも欲している“心の強さ”を、新田は持っている。誠は、そんな新田を、生意気だと思った自分を恥じた。
年なんか関係ない。俺だって、自分が大人だからと言うだけで自分を見下す父の態度に、何度も不条理を感じ、悔しい思いをしてきたじゃないか。下級生だからと言って、あいつが自分に対してへりくだらなければならない理由なんて、ひとつもないじゃないか。あいつには、それだけの力があるんだ。
年の差なんて関係ない。一人の対戦相手として、相手を客観的に見ろ。
綺麗なヒットなんかじゃなくたって良い。フォアボールでも、デッドボールでも、振り逃げでもかまわない。とにかく塁に出たい。出なければならない。
誠は、いつも以上にバットを短く持ち、寝かせ気味に構えた。
五球目。真ん中高めのストレート。殆ど反射的に、上から叩きつけるようにバットを振る。辛うじてバットには当てたものの、打球は力なく三塁ファールグラウンドに転がっただけだった。無意識に小さく舌打ちした。
ミートに徹しても、喰らいつくのが誠一杯かよ。
五球目もストレート。これもファール。だが、四球目同様、打球は三塁ファールグラウンドに転がったが、今度はしっかりと捉えた。僅かずつではあるが、ついていけるようにはなっている後はタイミングだけだ。
六球目もストレート。誠は、ワンテンポ始動を早めて、思い切りバットを振りぬいた。
捉えた。
誠の打球は、一塁線のほぼ真上に、ライナーで飛んでいった。ファーストがジャンプしたが届かない。誠は、バットを放り出して全力で一塁へ走った。フェアになれば、スリーベースも狙えるコースだ。

しかし打球は、ファーストの頭上を超えたあたりから切れてゆき、ライトファールグラウンドに落ちた。わずかに、タイミングが速かったのだ。

一塁へ向かう歩調を緩めながら天を仰いだ誠は、打席へ戻る途中にマウンドへ目をやった。マウンド上の新田も、こちらを見ている。目が合った。新田の切れ長の目から放たれる鋭い眼光には、さっきまでとは違う、自分に対する明確な敵意を孕んでいるように見えた。

たかがファールだろう。芯で捉えられる事すらできないとでも思ってたのかよ。

負けじと睨み返す。

いくらなんでも、真っ直ぐだけで、抑えられるなんて思うなよ。

仕切り直し。カウントは、依然ツーボール・ツーストライク。

57

新田は、ワインドアップになってからは殆どカーブを投げていない。ほぼストレート一辺倒で、東尾中の打者達を牛耳ってきた。だが、そろそろカーブか来るかもしれない。一打席目は、そのカーブの前に、屈辱的な三振を喫した。もう同じ轍は踏まない。

七球目。新田が投じたボールは、誠の顔に向かって飛んできた。誠は、今度は避けなかった。カーブだ。ボールがリリースされる前から、腕の振りが鈍くなっていたから、カーブが来ると読んでいた。

ボールが、ストライクゾーンへ向かって大きく曲がり落ちてきた。が、低すぎる。誠は、出しかけたバットを止めた。

ワンバウンド寸前のボールを、キャッチャーがしがみつくように捕った。判定は勿論ボール。これでフルカウント。

カーブを投げるときは、真っ直ぐを投げる時程は腕を振り切れないらしい。これほどフォームにはっきり違いが現れるなら、真っ直ぐにあわせて待って、カーブについていくことも出来るかもしれない。

いつまでも、上から見下ろしてるなよ。こっちだって、伊達に全国目指してるわけじゃないんだぜ。

八球目。今度はストレート。前のカーブの残像があったのか、一瞬反応が遅れたが、何とかバットに当ててファール。タイミングは完全に遅れ、打球は三塁ファールグラウンドに飛んでいったが、六級目同様、しっかりとミートすることは出来ていた。

大きいのはいらないんだ。内野の頭さえ越えればいい。それなら充分出来る。

打席に入る前は、相手の速球に気おされ気味だった誠だが、自分の打撃が徐々にその投球に順応してきたことで、自信が沸いてきた。

前の打席だって、俺はヒットを打ってるんだ。大丈夫、打てる。

負けられないと言う緊張感と、打てるという自信がもたらすリラ

ックス間が絶妙なバランスで交じり合い、誠の集中力は、極限まで研ぎ澄まされていた。
九球目。ストレート。しかしこれもファール。打球はほぼ真後ろに飛び、バックネットに当たった。今度は、タイミングは合っていたのに、ボールの下っ面を叩いてしまい、打ち損じた。
「いいぞ井岡！ついていってるぞ。相手も苦しいんだ。気持ちを切らすなよ」
ベンチからから、青木の檄が飛んでくる。
そうだ。今日のうちのバッターで、ここまで粘った奴はいない。自分も神経をすり減らしているが、相手も焦れているんだ。
誠は、ふぅっ、吐息をつき、バットを構え直した。
これが俺にとって、中学最後の、いや、野球人生最後の大会になるかもしれないんだ。例え素質では敵わなくても、この三月まで小学生だったような相手に、気持ちで負けるわけにはいかない。
再び、全神経を、マウンド上の新田の動きに集中させる。ワインドアップからの、十球目。腕の振りが鋭い。
ストレートか。
予想通りのストレートが、インコース低め、誠の膝元に襲い掛かる。これまで出一番厳しいコース。腕を畳んで、スイングの起動を出来るだけコンパクトにして迎え撃つ。しかし捉えきれずにファール。
審判から新しいボールを受け捕った新田が、マウンド上で大きく息をついて、首をすくめるようにして、肩を上下に揺すった。
十一球目。腕の振りが、わずかに鈍い。
今度はカーブか。
完全なすっぽ抜け。新田の左手を離れたボールは、誠の頭上を越えて、そのままバックネットを直撃した。フォアボール。最後の最後で、新田は誠の粘りに根負けした。
誠は、バットを放り出すと、力強く両手の拳を握り締め、一塁へ向かった。一塁に到達して、一息ついて、野球を始めて以来、フォ

アボールを選んでガッツポーズをしたのは、初めてだったことに気づいた。

58

ワンアウト・ランナー一塁。バッターは、二番の翔太。誠は一塁塁上から、自軍ベンチの青木に視線を送った。送りバントのサイン。妥当な判断だと思った。

前の打席で内野安打を打ってはいるが、今の新田から、翔太がヒットを打てる確率は決して高くない。だが、バントで転がす事なら、器用な翔太なら充分に決めてくれるだろう。ましてや、後に続くのは、英治と佑介。新田からクリーンヒットを放っているのはこの二人だけだ。例えツーアウトになったとしても、この二人に得点圏にランナーを置いた状態でつなげれば、追加点が充分に期待できる。

翔太への初球。ストレート。リリースと同時に翔太がバントの姿勢に入り、それを見たファーストとサードが、前方へダッシュする。しかし、打球は後方へのファール。球威に押されて痺れたのだろう。翔太が顔をしかめて、右手の手首を振っている。

サードの守備位置が、さっきよりも前進している。三塁線に転がすのは危険かもしれない。だが、ファーストは、一塁ランナーの誠がいるため、一塁ベースから離れられない。狙うなら一塁線だ。

「翔太！狙ってけ！」

ファーストの視界に入らぬよう、小さなしぐさで一塁線を指差す。翔太が頷く。勉強に使う頭は持っていないが、こういうときには知恵が回る男だ。だからこそ、二年生にして二番という制約の多い打順を任されているのだ。

新田が二球目を投じようとしたとき、誠は盗塁のスタートを切るポーズを仕掛けた。ファーストの注意を少しでも自分に引き付け、打球処理への反応を遅らせるためだ。

新田の腕から放たれたボールが、翔太の胸元を抉る。翔太が、体を仰け反らせながらも喰らいつくようにして、ボールをバットに当てる。しかし打球は、前進守備を取っているサードの方向へ転がっ

た。
誠は二塁めがけて全力で走りながら、視界の端で、打球の行方を追った。思った以上に球足が速い。さすがにあの体勢からでは翔太も、ボールの力を殺しきれなかったか。サードの反応は悪くなかったが、タイミング的には、二塁は充分間に合いそうだ。そう思った瞬間、わずかに足の運びが緩んだ。
その時――
目にも留まらぬ速さでマウンドから駆け下りてきた新田が、サードを遮るようにして打球を素早く拾い上げた。新田は、振り向き様に二塁へ、矢のような送球を投じた。一瞬の躊躇も感じられない動きだった。誠が二塁へ滑り込むより、一瞬速く、二塁ベースカバーへ入ったショートのグラブに、ボールが突き刺さる。
「アウト！」
主審のその声を聴いた瞬間、誠は自分の顔から、血の気が引いていくのを感じた。新田の俊敏なフィールディングに、衝撃を受けたのではない。勝手に間に合うと判断し、気の緩みスピードを落とした事が、チームの作戦失敗に繋がった。
誠の速度の変化は、傍目にはわからなかっただろう。もしかしたら、最後まで全力で走っていても、アウトだったかもしれない。それでも、この状況で、三年生の自分が、そんな緩慢なプレーをしたことが、許せなかった。
重い足取りでベンチへ引き上げるとき、またしても新田と目が合った。その新田の口元が、微かに歪んだように見えた。

59

何故――

何故、油断した。

何故、走る速度を緩めた。

ツーアウト・ランナー一塁。バッターは、三番の英治。二塁でフォースアウトになった誠は、ベンチに戻ってからも、俯いたまま、顔を上げられなかった。己の怠慢を悔やまずにはいなかった。

このまま、勝てるとでも思っているのか。

東尾中のリードは一点。この送りバント失敗が、試合の勝敗を決定的なものにする可能性だってあるはずだ。なのに、何故――

新田は、どうだった。

通常なら、サードに任せてもいい打球だった。それでも、新田は自ら懸命に打球を追いかけ、迷わず二塁へ送球し、誠の進塁を阻止した。タイミング的にも、二塁へ送球するという選択は、バッターランナーの翔太を一塁で刺す事は極めて厳しい事は、明白だった。もし、誠が二塁でセーフになっていたら、オールセーフなり、ワンアウト、一・二塁となり、さらに今日当たっている、英治と佑介を打席に迎え入れる事になる。

それほどのリスクを犯してでも新田は、一塁ランナー誠の、二塁封殺を狙った。その決断力に、改めて感心し、自分の慢心を恥じた。

自分より新田の方が、強い気持ちで戦っている。より、強い意志を持って、勝とうとしている。

俺は、何をしてるんだ。何の為に、三年間、努力してきたんだ。父の前で、あんなに大見得を切っておきながら、自分の野球への想いは、この程度だったのか。

違う。断じて違う。自分は、本気だった。父の決められたままの道を歩みたくないというだけの理由ではない。

野球が好きだから。東尾中野球部が好きだから。この仲間達と、

一試合でも多く野球がしたいから。そして卒業してからも、もっともっと野球がしたいから。その気持ちに、嘘は吐けないから。だからこそ、あれほどにまで、父に抗ったのだ。

なのに、今の俺はどうだ。勝ちが確定している状況でもないのに、気を抜き、チャンスを拡大する機会を失った。

まだだ。試合は、まだ終わっていない。このままでは、例え試合に勝ったとしても、納得できない。この試合が終わるまでに、自分の野球への思いを再確認できるだけのプレイをしなくては。少なくとも、その気持ちだけは、試合終了の瞬間まで、途切れさせるわけにはいかなない。

落ち込んでいる暇はない。一刻も早く、気持ちを立て直し、相手を上回る気持ちで、勝利を掴むのだ。

誠は、俯いた顔を上げ、打席の英治の背中に向かって叫んだ。

「エーちゃん、頼むぞ！」

英治に何を頼んでいるのか、自分でもわからない。ただ、何もせずにはいられなかった。

60

英治への初球。旭ヶ谷バッテリーはカーブを選んだ。やはり真っ直ぐに比べ、腕は触れていないが、それでもさすがの切れ味だ。低めに決まってワンストライク。英治はバットを出さなかった。

英治自身、ここで自らのバットで追加点を上げる事ができれば、自分のピッチングが格段に楽になる事は間違いない。なんとしても追加点が欲しいはずだ。

二球目もカーブ。今度はスイング。しかし高々と上がった打球は、三塁ファールゾーンのされに外側、ネットを越えて、休場の外に出てしまった。やはり真っ直ぐへの意識が強かったのか、タイミングが早かった。さすがの英治も、この状況ではやや冷静さを欠いているのかもしれない。たったの二球で、追い込まれてしまった。

「カーブの連投は、今日初めてだな」

青木が言った。

言われてみれば確かに、誠の記憶にも、新田が二球続けてカーブを投げた記憶はなかった。それだけ英治を警戒しているのだろう。とすれば、三球勝負はせずに、次は一球外してくるかもしれない。

「だけど、さすがに三連投はないだろう。次はおそらく真っ直ぐだ。ただ、カウントから言って外してくるかもな」

三球目。アオキの予想通り、やはり新田は一球、外に外してきた。しかし、外しきれなかった。ストライクゾーンに、気持ちの入っていない棒球が飛んでゆく。それを見逃す英治ではない。

金属音。打球は快音を残し、ショートの頭上を越えて、右中間へ。しかし、やはり球威に押され気味だったのか、左中間を破る事はなくセンターに捕球され、シングルヒットになった。打球が抜ければ三塁へと、ハーフウェイで様子を伺っていた翔太も、二塁へ止まりで、ツーアウト一・二塁。

「ナイスバッティング！」

新田がワインドアップになってから、初めてのヒットだった。東尾中ベンチが、英治の巧打に沸き立つ中、誠は一人俯き、唇を噛み締めていた。

自分が全力で走っていれば、自分がが二塁でセーフになっていれば、ここで一転入っていた。自分の脚なら、あの打球なら二塁からホームへ還って来れた。なのに――

未練がましいとはわかっていても、悔やみきれなかった。

「井岡」

青木に名前を呼ばれて、はっとして、顔を上げる。

「気持ちわかるけど、終わったことはしょうがない。今勝つために最善を尽くす事だけ考えろ。追加点のチャンスなんだぞ。もっと前向きになれ」

口調は優しいが、目は真剣だった。

「はい……」

そうだ。終わったことを、いつまでも引きずっていても、状況は変わらない。気持ちを切り替えなくては。

ツーアウトながら、ランナー一・二塁。バッターは四番の佑介。これ以上ないチャンスじゃないか。

「佑介、打て！」

佑介なら、きっと聞こえているはず。そして、自分の気持ちを、力に変えてくれるはず。そう信じて、誠は親友の背中に声援を送った。

61（前書き）

バットの握りについて、不自然な部分があったので、加筆修正を加えました。

61

この日三度目の打席を迎えた小川佑介は、かつてないほどの緊張感と責任感を持って、打席に入った。佑介は、バットを前の打席と同様に短く持ち、いつもより少しだけ、腰をかがめて構えた。

大きいのはいらない。コンパクトなスイングでもしっかり振りぬきさえすれば、金属バットなら内野の頭くらいは越える。それだけで良い。いや、なんとしてでも、最悪それだけの結果は残さなくてはならない。

そう自分に言い聞かせ、佑介は全神経をマウンド上の新田の動きに集中させた。

前の打席。それまでセットポジションから淡々と投げていた相手投手は、自らの暴投で逆転された事を機に、秘めていた力を解き放ち、佑介はそのボールの威力に圧倒され、掠ることすら出来ずに、捻じ伏せられた。

今度は、前のようには行かない。ここで追加点を挙げられるかどうかで、試合の流れが大きく変わる。何が何でも喰らい付いて、追加点を挙げねばならない。

マウンド上の投手が、キャッチャーのサインに頷く。足が上がり、セットポジションから、第一球が投げ込まれる。

ストレート。佑介は、そう読んでいた。第一打席で打ったツーベースはカーブを打ったものだったし、第二打席は渾身のストレートに空振りの三振を喫した。これ硫黄の失点はなんとしても避けたいこの状況で、大事な初球に敢えて打たれたボールは選択してこないだろうと読んだのだ。

その初球を、佑介は狙った。狙い通りのストレート。やや外角高め。佑介にとっては、比較的得意なコースだ。しかし、ここへ来て新田のストレートは、さらに威力を増していた。

振り遅れた。一塁ファールグラウンドへのファール。小さく舌打

ちして、マウンド上へ視線を送る。視線の先の長身左腕投手、旭ヶ谷中の一年生、新田恵介は、憎たらしい程ふてぶてしい表情で、睨むような視線を投げつけてきた。顎を軽く突き出し、こちらを見下ろすような角度で放たれる眼光に、思わず気圧されそうになる。

しかし、そんな自分への怒りが、萎えかけそうになった集中力を奮い立たせる。

びびるな。相手は一年生なんだ。こんな所で、一年坊主に、全国への夢を断たれてなるものか。

二球目もストレート。甘い。しかし打ち損じた。タイミングは合っていたが、完全にボールの下っ面を叩いてしまい、バックネットへのファウルチップ。たった二球で、ノーボール・ツーストライクと、追い込まれた。

力むな、力むな。

首をすくめるようにして、肩を二・三度上下させ、大きく息をつく。

二人のランナーは、いずれも俊足だ。長打は要らない。シングルヒットで良い。一点追加できさえすれば、格段に優位に立てる。逆にここで自分がアウトになれば、この試合でこれ以上の追加点を望むのは、かなり厳しいだろう。

プライドなんかに、拘ってはいられない。

三球目。カーブ。不意を突かれ、タイミングを外され、体が前に突っ込みそうになるのを懸命にこらえ、何とか喰らいついた。打球は三塁方向へのファール。

前の打席で、ストレートの威力に圧倒された残像が、思った以上に強く残っているらしく、ストレート振り遅れまいとする気持ちから、完全にタイミングを外されてしまった。

カウントは、依然ノーボール・ツーストライク真っ直ぐに振り遅れても、カーブに泳がされてもいけない。佑介は、精神的にも追い込まれつつあった。

でも、二球続けてカーブを投げてくる事は、先ずないだろう。前

のバッターの英治には、初球から二球続けてカーブを投げてきたが、それでもここは、真っ直ぐに狙いを絞るべきだ。
ツーストライクからの勝負球だ。これまで以上に力のあるストレートが来るに違いない。
リリースとほぼ同時に球筋を見極め、スイングを始動させるぐらい出なければ、あの速球は捉えられないだろう。
力むな。力むな。
速いボールに振り遅れまいとして、速くバットを振ろうとすると、無意識に力みが生まれてしまう。力みは、フォームを狂わせ、始動を遅れさせる。適度に力を抜き、バットをしならせるようなイメージでシャープに振り抜いた方が、結果的には鋭くバットを振れるものだ。
肩を、手首を、腰を、膝をほぐすように小刻みに動かし、揺すり、緊張をほぐす。
力まず、コンパクトに、芯で捉える事だけを考えろ。自分に言い聞かせる。
新田の足が上がり、体ごと叩きつけるようなフォームから、渾身のストレートが投じられた。
唸りを上げて襲い来る快速球に、佑介は無心ででバットを振り抜いた。

62

捉えた。バットを通じて、両手にボールの感触が伝わってくる。新田の全力投球と、佑介のフルスイングが正面衝突した衝撃で、ゴム製の軟式B号球が、ひしゃげる。思わず、スイングを押し戻されそうになる程の衝撃。芯で捉えはしたものの、わずかに差し込まれたか。しかし、佑介は怯まなかった。

今までの野球人生で、一番のボールが来る。一番速くて、一番思いボールが。どんなに速くても、どんなに重くても、例え手首が折れても、絶対にバットを振り切る。そう心に決めて、バットを振り抜いたのだ。

右の手首に力をこめて、押し戻されそうになるバットを、佑介は強引に振り切った。

打球が、セカンドの遥か頭上を越えて、右中間方向へ伸びて行くのを見ながら、佑介は一塁へ向かって全力で駆け出した。翔太と英治、二人のランナーも、インパクトと同時にスタートを切った。

センターとライトが、互いの距離をつめるようにして、打球を追いかける。打球を振り返った新田の表情は見えないが、さすがに平静を装ってはいられまい。

抜けろ。抜けてくれ。

手応えは充分だった。あの感触なら、外野手が追いつく前に、このまま右中間を破るはずだ。ツーアウトだから、ランナーは打った瞬間にスタートを切っているはず。二塁ランナーの翔太は勿論、一塁ランナーの英治も充分に生還できる。二点入れば、こちらのリードは三点だ。六・七回のにイニングで、英治が三点以上取られるとは考えられない。こちらの勝利は、決定的なものになる。

抜ける。

しかし打球は、佑介のイメージほどの勢いはなかった。徐々に失速し、打球を追いかける二人の外野手と、打球の距離が、見る見る

詰められていった。それでも、まだわからない。このまま間を抜けることも、まだ充分ありうる。

センターが、ダイレクトキャッチを諦め、走る方向を外野フェンスよりにシフトした。仮に打球が間を抜けなくてもヒットになりさえすれば、一点は入る。それだけでも自分達は圧倒的に優位になれる。

勝てる。

佑介がそう確信した時、ライトが打球に飛びついた。外野手特有の大きなグラブの先っぽに打球が収まる光景が、佑介の目にはスローモーションのように見えた。

63

打球に飛び込んだうつ伏せの姿勢のまま、ライトがグラブを頭上に掲げた。

「アウト！」

スリーアウト・チェンジ。東尾中は、結局この回も追加点を挙げることはできなかった。

佑介は、二塁ベースを少し回った所で、両手を膝につき、がっくりとうなだれた。

やはりバットを短く持っていた分、力負けしてしまったのだろう。だが、いつものように、バットを目一杯長く持っていたら、あの速球にはとてもついていけなかっただろう。結局、どうあがいても、俺はあいつの全力投球を打つことは出来なかったのか。重い足取りで自軍ベンチへ聞き上げる途中で、佑介とは反対側の一塁側ベンチへ引き上げようとする新田に視線だけを移すと、新田はベンチへ戻る途中でわざわざ立ち止ってライトが戻って来るのを待ち、満面の笑みで彼とハイタッチを交わしていた。

佑介は新田の笑顔を、初めて見た。

新田は、ライトの選手と互いに笑顔のまま何か言葉を交わしながら、自軍ベンチへ引き上げていった。

バッターボックスから見るマウンド上の新田は、憎たらしいほどにふてぶてしかった。そして、そのふてぶてしさを裏付けるだけの、圧倒的な力を持っていた。だけど、今佑介が見た、仲間と談笑する新田の姿は、自分達と同じ普通の中学生のものだった。

あれで意外と、結構良い奴だったりするのかもしれないな。

重い足取りに喝を入れ、小走りで自軍ベンチへ引き上げながら佑介は、なぜかそんなことを考えていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2735w/

理由ある反抗

2011年12月11日20時52分発行